

特 100

969

武士道文庫  
忍術猿飛伏魔國漫遊記  
名及



始



Decorative border with repeating stylized floral motifs (possibly 'Om' or 'Aum' symbols) on a light background.



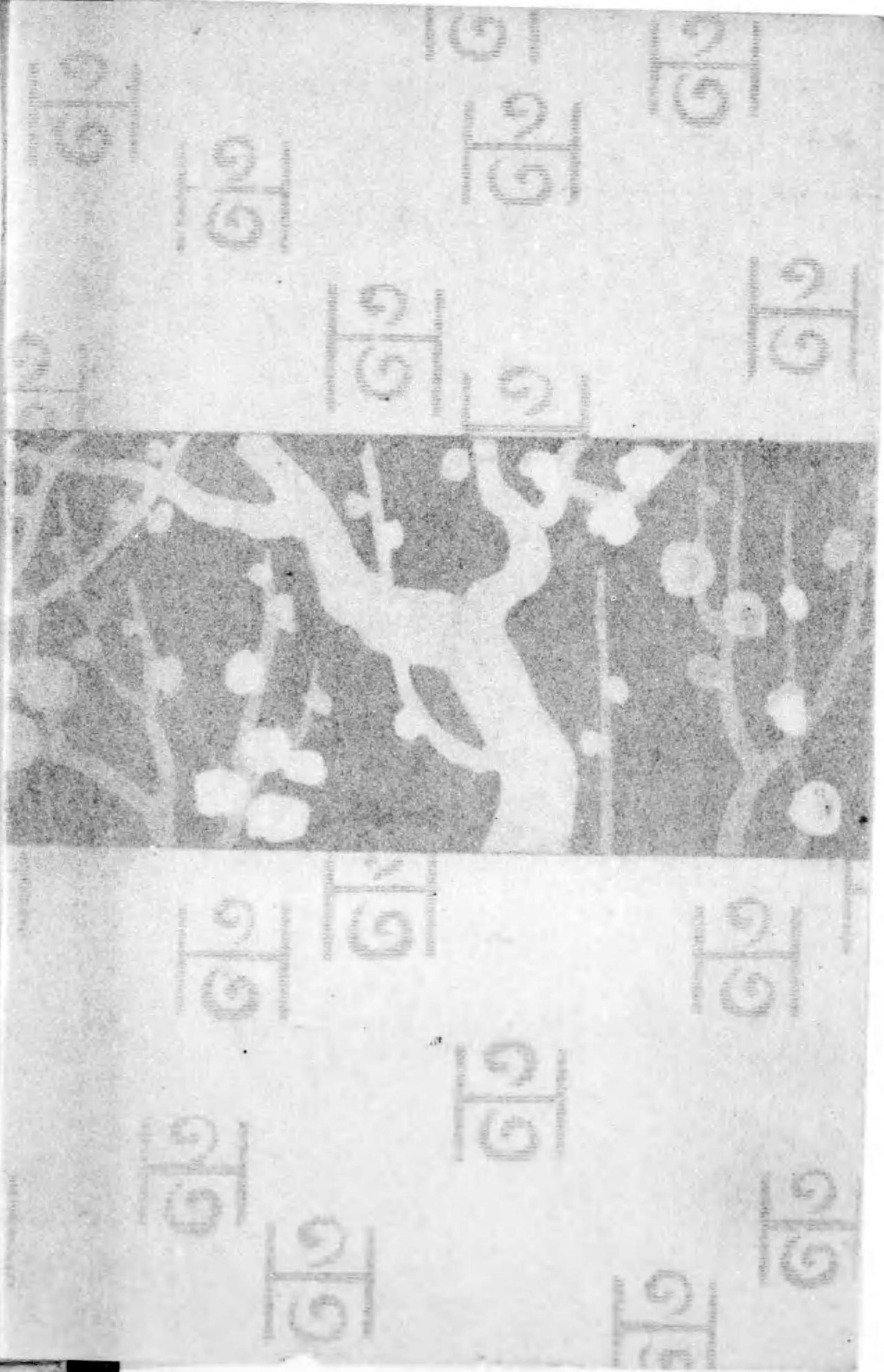
Decorative border with repeating stylized floral motifs (possibly 'Om' or 'Aum' symbols) on a light background, mirroring the left page.

持100  
969

武 士 道 文 庫  
忍 術 名 人  
猿 飛 佐 助 西 國 漫 遊 記

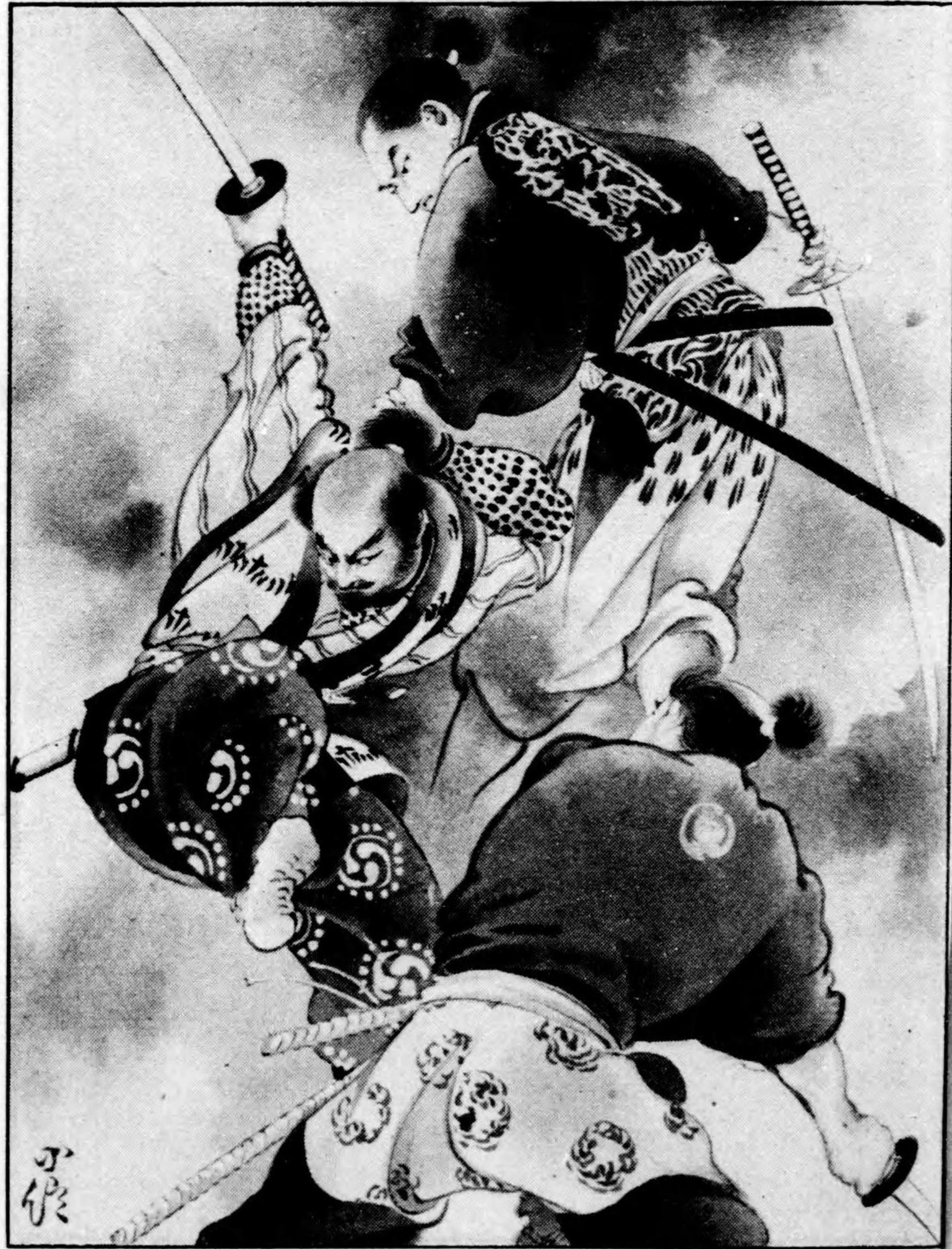
大 正  
5. 2. 3  
交 内

成 象 堂 發 行



緒言

青史に千載の美名を残せし忠臣が、碧血を濺ぎしところ、其所に文明の鐵路敷設せられて、史蹟は次第に破壊せられんごし、朝日に匂ふ山櫻その敷島の大和魂は、滔々たる泰西の思想盛んに輸入せられてより、年毎に其芳芬を失はんとす。あはれ神州精靈の氣、凝つては百鍊の鐵となり、銳利をすら兩斷したる、夏尙ほ寒き秋水は、永へに鞘に納まるご共に、身を以て君國に許す武士道の意氣は、漸くに銷磨し去らんとし、青年子弟の徒、浮華輕佻唯だ利のある所に是れ赴



ま、翫然として一世の風潮を作らんとす。あゝ此の傾  
 向を奈何せん。弊堂が今茲この文庫を刊行するの微  
 意、蓋しこゝに存する也、敢て一言を巻頭に題す。  
 平徳 壬子正月

**成象堂主人識**

目次

- 奥の手を出すから見ろ……………一
- 仕置場破りには妙を得て……………六
- 猿飛奴ツ鼻を明してやらう……………一一
- 一番乗りの功名するのだ……………一七
- 後の鳥が先になつたぞ……………二三
- チト此の後は乃公を見習へ……………三〇
- 奴屹竝して居やアがる……………三五
- 蛇の道は蛇だよ……………四一
- カツ攫つてやらう……………四八
- 浅野但馬守見参く……………五四

○誰かと思はんでも乃公だ……………六〇

○弓矢を以つて掛合申す……………六六

○乃公に尻を拭がせるのか……………七二

○嫌に笑つて居やアがる……………七八

○天に口おし人を以つて云はしむ……………八四

○乃公の拳骨は天下第一品だ……………九〇

○ウーA夫れには及ばぬ……………九五

○此奴は大分捲リツ振りが宜い……………一〇二

○忍術のニの字も知らぬ癖に……………一〇八

○之れは何うじや不思議……………一一三

○アイタ……ウーA……………一二〇

○アハ、ハ、ハ、弱い奴だ……………一二六

○捨り潰してくれろぞ……………一三二

○オヤツ此奴は大變だ……………一三七

○女は三界に家ふし……………一四三

○ソロ／＼弱音を吐き出した……………一四九

○物を云ひ／＼駢をかいで……………一五四

○驚ろいて腰を抜かすぞ……………一六〇

○細川の腰拔大名見参……………一六六

○乃公は尻を引受けるんだ……………一七三

○目を剥いて居やアがる……………一八〇

○ヤイ三好負けるぞ……………一八六

○乃公の手際は斯んふものだ……………一九三

○無闇に暴れては困る……………一九九

○人間迄の人を馬鹿にして……………二〇五

○何を愚圖くして居る……………二一一

○狸老爺今に見る……………二一六

目次(終)

忍術名人 猿飛佐助西國漫遊記

凝香園 著

○奥の手を出すから見ろツ

蚊龍雲を得ば遂に地中のものにあらず。天下分ケ目の關ヶ原合戦終ると共に、豊臣七將の意氣地ふきを憤慨して老將徳川家康を向ふに廻し、電光の如き活動を開始したのは、誰あらう真田左衛門尉幸村であつた、流石の家康も之には舌を捲いた、密に幸村に向ひ、信州一圓を與へ、十万石に封ずると云つて、先づ利を以つて誘つたが、幸村は頑として應ぜなかつた、此の時既に幸村の眼中には利慾の念なく、只一意豊家の運命を思ふばかりであつた、勇將の許に弱卒なし、真田の郎黨十勇士は、幸村の手足さふつて働らき、河れも一



騎當千、万夫不當の豪傑揃い、就中忍術使いの、猿飛佐助幸吉に到つては石火の如く天下を活躍して徳川加擔の諸大名をアツと驚ろかせたものだ、イデヤ之より猿飛佐助西國漫遊の至極痛快なる處をお目にかけてやう。

真田十勇士の中で、何日も出装婆るのは三好清海入道だ、此の男十勇士中の横紙破り、坊主頭を横に振つたら、アコでも動がふいさいふ厄介者だが、猿飛佐助ばかりには一目置いて居る、三「ヤイ猿飛、貴様は何をして居る……小堅しく軍書を読んだりふんかして、御大將の眞似をするか、青表紙を捨くつたつて戦は出来まいぞ……オヤ、由利の奴、靜にして居やアがると思つたら手習をして居やアがる、ハアツ、此奴片腹痛いと云ひたいが、兩腹が痛いはい、書は以つて姓名を記すれば足るだ、廢せ……ヤイ根津甚八、貴様今朝から見へまいと思つたら、劍術の稽古をして居るか、馬鹿事をするか

劍は一人の敵のみ學ぶに足らず、乃公ふごは萬人の敵を相手にする術を知つて居るぞ、關ヶ原合戦の時、信州上田城で秀吉五万の大軍を喰いこめ、乃公が八角棒を以つて、敵軍見參、云つて只一騎追かけた時の武者振りを知つて居るだろ、チト乃公を見習へ貴様等は近頃元氣がふい、確りしる馬鹿野郎……」十勇士を小口より悪く云つて廻る、若し喰つてか、らうものなら、直にドス、喧嘩になるのだから、皆夫れも五月蠅がつて、腫れ物に障るやうにして居る、所謂敬して遠ざけるのだ、清海入道夫れを知らふいから皆が恐れに居ると思つて、イ、威張る他のものはセッセと仕事を遣つて居るが、清海入道ばかりは握り拳丸で、餘計な世話を焼いて廻るのが仕事だ、處が清海入道の鬼門金神は猿飛佐助と霧隠才藏の二人だ、佐「ヤイ三奴、ガミ、さ喧ましくいふか、貴様は大体何んだ、矢張り十勇士の一人ではあいか、ジャア何ぞ握り拳丸で遊んで居る、チト用をしろ、三「何を吐す、土百姓、貴様等

の知つた事でアあい……」恐ろしい口の汚い男だ、スルト猿飛佐助は、**佐**  
 ■ーシ、奥の手を出すから見ろ……」バツと忍術で姿を隠したと思ふと、坊  
 主頭をコツ／＼打ン殴る、鼻の穴へ薬切を突つ込む、足を掴んで引倒す、姿が  
 見へれば、負けぬ氣の清海入道も、飛びかゝるのだが、肝心の本人が見へな  
 いから仕方がない、三「ウーンアイタ……、此の野郎アイタ……ウーム／＼」  
 キリ／＼舞をさせるから、二人には一目置いて居るのだ、一日九度村の幸  
 村の屋敷へ、一人の婦女が駆け込んで来て、女「お願いでございませう、お願  
 い申します」三好清海入道ノシ／＼立ち出で、見るも、頗る付の美人が支障  
 式臺に手を支へて居る、三「ナンシヤ其方は……、女」ハイ、妾は和歌山城下  
 のものでございますが、幸村御前様には是非お目に懸りたく存じます……」幸村  
 は今こそ百姓にふり下つて居るが、元は信州上田で五万石の城主であつたから  
 附近のものは御前様／＼と云つて居るのだ三、「コソヤ／＼、何んで、御大將

にお目にかゝるのだ、譯を申せ、貴様等がナカ／＼オイソレとお目にかゝれる  
 譯のものではない、女「ハイ、アはございませう、是非共御前様にお目にかゝ  
 つて申上げます、三「ヤイ、貴様乃公には云はれぬのか……シヤア取次ぐ  
 事相成らん、歸れ／＼……」怒鳴りつけて居る、處へ出て来たのが猿飛佐助だ  
 佐「オイ三好、何んだ／＼、三「ウム猿飛か、實は斯様／＼云つてるのだ我々  
 に話されぬいものが、御大將に取次けるか、猿「オイ／＼三好、相手は一婦人  
 だ、何か急用があるのだらう、取次いだら宜いではないか、三「廢せ此ン畜生  
 三好清海入道丈は婦女でも野郎でも怯さもしないぞ、佐「ナニ貴様のや  
 うにか／＼云つては分らん、喧ましくいふと奥の手が出るぞ、三「ウーム、  
 待て／＼猿飛、左様に威かすか、シヤア仕方がない、取次いでやる、ヤイ婦女  
 取次いでやるが不都合無き様いたせ、猿「オイ／＼三好、満らぬ事をいふ  
 か」三好清海入道は餘計な事といつて、婦女を一室に通し、幸村に執次いだ

幸「ナニ婦女が願いがあると申すか、苦しうない、これへ通せ、三「ハイ畏まりました……」出て来る、三「ヤイ婦女、斯う参れ……」幸村の居間へ連れて来た、婦女は平伏して幸村に向い、女「之れはお殿様でございますか、妾は若歌山城下の磨屋九兵衛と申しまする刀屋の娘、弘と申しまして、當年十八才でございますが、是非御願いの義がござりまする、幸「フム、左様か、云つて見よ……、女「ハイ、恐れ入りますが、お人拂いの程を……、幸「ナニ人拂い、コリヤ、清海入道起て、三「へエ某が起ちますので……」三好清海入道隣きながら、次の間へ退つて来た。

○仕置場破りには妙を得て……

三「オイ、大變、一大事出来だぞ、由「ナンダ、三「ナンダじやア、今乃公が婦女を連れて行つたらう、由「ウム猿飛から聞いた、三「

處か御大將、婦女の顔を見るにニコニコ笑ひ出したと思へ、處か「イヨ、一大事さいふのは、婦女がお人拂いを願いますと云つた、猿「エツ、人拂い……三「ウム、スルト御大將が乃公に向つて三好清海入道起て、三「来たのだ、夫れから何うした、三「夫から分らん、今御大將さ「ヒソヒソ話、最中なのだ、オイ猿飛、才藏も来い、貴様等其處で何を笑つて居るのだ、今御大將さ「女がヒソヒソ話をして居る、貴様一つ忍衛で様子を窺へ、佐「馬鹿いへ、一体貴様は年が何才だ、我々十勇士のうちで、一番古参ではあいか常に御大將のお側に居て夫れ位に分らぬか、御大將が一人の色香に迷はされるやうな、お方ではあいわい、三「夫れが、貴様で保証が出来るか、佐「アハ、三「清海、あいな事をいふふ……オヤツ、お手が鳴るじやアあいか、三「ウム、三好清海入道、十勇士を呼べ其方等は近頃戦争があいから脾肉の嘆に堪へない、何か仕事はあるまいかと毎日傭いて居るで

はふいか、夫れゆへ仕事が出来たのぢや、三へーン、幸何んといふ事を申すか早く皆のものを呼べ」三好清海、入道叱られて坊主頭を掻き、一同の詰處へ飛び込んで来た、三「ヤイ皆の奴、喜べ」時節到来、由「オイ、何んだ、時節到来さば……、三何でも宜い乃公に尾いて来い……」一同は幸村の目通りに出た、スルト幸村はズラリ十人を見廻し、幸「此の婦女は和歌山城下の刀屋磨屋九兵衛の娘、弘と申す者だ、去る浪人より一口の刀を磨いてくれと頼まれ、夫れを磨いで店へ並べ置きし處、淺野家の役人が乗り込み此の刀は大守御秘藏の鬼神丸と云つて新關白秀次公の御佩刀であつたのを淺野家に拜領した大切の寶刀である、先違より紛失して詮議最中である、誰に頼まれたかの尋ねに九兵衛は驚いて帳簿を繰つて見たが頼まれ主の名前が記してふい、其處で九兵衛に嫌疑か、奉行所へ引立てられ、責苦に遭つたが白狀の仕様がふい、處か頭九兵衛が盗んだといふ罪に落ち、明後日和歌山城

下の仕置場で打首といふ事に決定したさやら、依つて娘弘は是非共父を助けたい、其の浪人を探し出したさい、手に頼んで来たのである、一つ其方等が働かればあるまいと、思ふが何うじや……」之れを聞くと十勇士は躍り上つた、中にも由利鎌之助は、由「オイ三好、貴様先刻何んさ云つた、御大將の目尻が下つたの、目を細くせられたのさ云つて居たではふいか、三「ウー、アレは取消し、エツへ、由何を吐す此の野郎、アイヤ御大將、如何なる仕事でも此の由利鎌之助相勤めます、仕置場破りは尤も妙を得て居ります、士「エ、我が君に申上げます斯ういふ事は算十造に限ります、仕置場へ乗り込み、九兵衛なるものを攫つて歸りませうか、三「ヤイ、由利、算、貴様等乃公を差し置いて勝手な熱を吹くな、アイヤ御大將、三好清海、入道之より乗り込みまして、仕置の當日には例令何百何十人の木葉共向いませうとも只一人にて叩き潰し、九兵衛を助けて歸るは、掌らを指さすよりも、イさ易うござい

まする、ハイ……」各々勝手な事を云ひ出した、處が猿飛佐助と霧隠才藏は何んか仕事が出来ても必らず缺ぐでからざる人間だから必らず撰み出される夫れを知つて居るから、ニコニコ笑つて此方から押賣りはし、幸村公シロく十人の顔を眺めて居る、何れも出掛けたくつて堪らぬから、大きくあつて肩肘怒らし目につくやうに延び上つて居る、幸「アイヤ清海入道……三ハツ、有難う存じまする、何うじや皆の奴、乃公に仰せつけにふつた……幸「コリヤ、未だ何も申付けて居る、其方は目を割いて大きく延び上つて居るが何うしたのじや……、三「ヘーン、スルト未だ……オヤ、イエ實はお見落し下さる、甚はだ以て迷惑さ心得まして此の通り……、幸「アハ、皆行きなすうな顔をいたして居る、然し仕置場を破る位に、十人も乗り込みに及ばぬ二人で澤山である、二人のうち一人は猿飛才藏をつけてやう」之れを聞くと一同はイヨ、大きくあつた、彼方此方でエヘン、咳拂

いする、幸「コリヤ、咳拂いの大きいのを撰り出すのでは無いから、静にたせ、誰彼れさ名指をいたす、其方等のうちで八人は不平なものが出来る公平に籤引きにいたせ、コリヤ三輪虎兎之助、其方籤を拵らへて宜からう……、三「ハツ、畏まりました……」三輪虎兎之助は十勇士のうちでは無いが十勇士と相並んで無双の豪傑だ、十勇士の席が支へて居るから其のうちへは入れないが武藝十八般に渡り、正直事此の上もふいふ男のた虎兎之助は鬨を拵らへた、虎「サア、引け、三「待て、乃公が第一番だ、古参の三好清海入道が一番鬨を入れる……クシヤ、……」何か唱へるがイセ引

○猿飛奴に鼻を明してやらう

由「オ、イ三輪、乃公だよく、乃公が引くのだ、處で尋ねるが、一体何ん

ふ圖だへ、虎「ウム、上の字が二つある、之れに當つたものが出掛ける、八人は下の字が當る事にあつて居る、由「イヤ分つた、左様分つたら乃公にも考へが……、待て……南無金比羅大現體……クシヤ……、何卒此の圖に當りまするやう……」グイと引く、十「ヤイ、三輪、何故此處へ持つて來ない筈、十造は否でも應でも出掛けねばならぬ人間だ、乃公はクシヤ……云はふいが、天道様は正直だ……」グイと引く、順々廻つて一番最後に猿飛佐助が引いた、佐「サア残り圖福來るさいふ事がある屹度乃公には當つて居る、三「ヤイ、皆人の顔ばかり見ふいで開ける……、才「オイ……三好、お手許拜見した、貴様が一番に引いたのだ、早く開ける、三「ウム、心配だ、ヨシシ開けてやる、開けぬが花と云つて……開けて口惜しき玉手箱じやアふいか知ら……ソレ見ろ、上の字……へ、ン、何んかもんだい、虎「オイ三好、巧い事をやつたふ、三「知れた事をだへ、正直の頭に神宿るだ、十「ヤア、乃公

も上だ、由「イヤ、乃公も上だよ、佐「オーヤ、乃公も上だ、有難い……、虎「オイ、これは可笑しい上の字はタツタ二本しかふい筈だ、夫れに皆ふ上の字だとは不思議だ、取調べるから一々出せ、三「ウム、見てくれ、フーン何うだ此の通りだ……上の字……、虎「アツハ、三好不可んよ、下さいふ字を逆様に見せて居るではふいか、三「アツ失策つた、道理で乃公も點の打ち處が何だか變だと思つた、虎「オイ根津……貴様も下だよ……、甚「アツ露現した、計略が駄目さあつた……、虎「由利も不可んよ、由「ホイ、斯んな事があるので、夜前の夢見が悪かつたのだ、今年は年廻りが悪い、祿事事はありアしふい……」八人迄囁いて居る、上の字の當つたのは、猿飛佐助と三好伊豆入道だ、スルト清海入道は、三「ヤイ弟、貴様父上母上がお隠になる時に何んか云つて遺言しられたか知つて居るか、伊「知つて居ます、親の死んだ跡は、兄を親だと思つて、決して云ふ事を背くなさ仰しやつた、三「フ

▲豪い、ヨク忘れぬて居る、貴様の札と取りかへる、伊「エッ……取りかへる、二三知れた事をへ、親の死んだ後は兄を親と思つて、其の言葉に背くおの言葉に背くか父上母上の御遺言を無にするか、アノ此處お親不孝者奴がツ……」之れを聞く幸村公首め一同ブツと吹き出した、佐「オイ……三好、飛んだ處へ遺言状を持ち出すではいか、夫れは不可んよ、貴様と出掛けること乃公の云ふ事を聞かされて、無闇に暴れたがるから、兎角失策るのだ、乃公は伊豆入道の方が宜い、由、左様……だ、清海入道無理だ……」清海入道も頭を掻いて苦笑い「ヨ……猿飛佐助と三好伊豆入道と極つた、幸「コレ婦女明後日は助け出してやる、其の上で刀の詮議もいたしてやるから、安心して歸れ、其方の家は何處じや……ウム分つた、知らぬ顔をいたして居れ、明後日九兵衛を助け出す迄に其方の家を片付け、此處へ参れ、和歌山の城下に居ては

呑である、弘「ハイ、何分宜しくお願い申します……」お弘は喜んで歸る、翌日さあつた、間もなく日が暮れた、九段村から和歌山は大分あるが、夜のうち起きれば、仕置には屹度間に合ふさいふ積りだ、夜に入るとお弘は母親と二人で店の若い者に大八車を曳かせ、家を片付けて荷物をゲツスリ運んで来た、若いものさ云つても皆お親族だから、秘密を明すやうなものはない、此方の十勇士はナカ……夜に入つても眠られない、一同早くより部屋へ下つた、互ひに枕を並べて寝る、十疊の間二つへ五人づつ寝て居るのだ、中にも猿飛佐助と三好伊豆入道は嬉しくつて堪らない、二人はチャンと身仕度して、朝の飯は走り……喰ふ積りで握り飯を宵の中から拵へて枕許に置いてある、佐「オイ伊豆入道、乃公が大勢の役人を手玉に取るから、貴様は九兵衛さいふ奴を奮いて逃げる、伊「イヤ猿飛、九兵衛は貴様が奥の手でチョイと奪つてくれ、乃公は大勢を相手にして暴りたいのだよ、佐「不可ん……夫れは貴様では刃呑だ、

乃公は何んしろ忍術さいふ奥の手があるから大丈夫だ……」互いに争つて居るさ、闇に外れた八人は癪に障つて居るさ見へ、三「オイ、靜にしる、寢られぬわい、糞忌々しい、佐「アツハ、清海入道怒つて居やアがる、マア何さでも騒げ、乃公等は大手を振つて仕置場破りをやるんだ、嬉しいなア、之れが寢られるかい、ア、早く夜が明ければ宜い……」皆を羨ましがらせて居たが何時の間にか、ア、早く夜が明けて寝込んで仕舞つた、スルト横手に寢て居るのが、寛十造と海野六郎、由利鎌之助の三人だ、仕置場破りに行きたくつて堪らぬから、ナカ／＼目が冴へて睡入られぬ、蒲團被つてズツボリ、頭は隠して居るが、時々首を突き出して一同の寢息を窺つて居る、由利鎌之助がヌツと首を突き出すと、同じく寛十造もヌツと出し、目と目を見合して、ニツと笑つて又引込む、海野六郎も其の通り、三人が首を出したり引込めたりして居る、由「オイ寛、海野、三「ナンダ／＼……、由「シツ、靜にしる、乃公は癪

に随つて堪らぬから、一番抜かけの功名をしたいと思ふのだが、何うだ十「ウム、乃公も其の通り……、海「シャア、三人が猿飛と伊豆入道を出し抜いて出掛けやうか、十「ウム、宜からう、此の握飯も分捕つてやれ……」チヤンと相談が出来た、幾等忍術使いででもグウ／＼肝を搔いて寢込んで居ては分らない、三人は寢た振をして、時刻を待ち受けて居る、スルト次の十疊の間に寢て居る五人も思ひは同じだから、忍術使いふ霧隠才藏は、チヨイ／＼首つき出して次の間を窺いながら、オ「ヘ、ン、一番猿飛奴の鼻を明してやらんけりやアからん……」思つて居るさ、ヌツと坊主頭を突き出した三好清海入道ニタリ／＼と笑つて、才藏の顔を眺めて居る。

○一番乗りの功名するのだ

オ「サヤ清海入道、貴様肝を搔いて居るが目を覺して居るのか、三「知れ



た事をいへ之れが睡られるかい、猿飛と弟伊豆入道は、安心して寝て居るだろ  
う、オ「ウム、寝て居る、處が他の三人の奴は油断があらぬぞ、何うやら目を  
覺して居るらしい、三「エツ、其奴は大變だ、乃公は一番先に拔驅をやる積り  
かんだ、オ「ウム、乃公も其の通り……二人が出掛けやう、三「シツ、静にし  
る、根津と、望月、穴山の奴が目覺すさ不可い……、オ「ウム、左様だ、  
く、奴等が一處に行かうか云ふ人数が殖へて、働く仕事も少なくなる、  
三「左様だ……二人がヒソヒソ話合つて居るさ、三ツ首つき出した穴  
山小助は、小「ヤイ霧隠、三好、チャンと聞いてるぞ、拔驅の功名は斯く  
いふ穴山小助がするのだ、三「ウワー、貴様起きて居るのか、小「知れた事を  
云へ、之れが睡られるかい、根「オイ、乃公も一つ部に入れてくれよ三「  
オイ、根津ではあいか、甚「左様だ乃公はチャンと此の通り新しい草鞋  
を穿いて寝てゐる三「オヤ、草鞋穿いて寝る奴があるかい根「オイ、

此處にも仲間居るぞ、乃公は此通り握飯をチャンと拵へさせて居る、  
朝飯を食ふ間合がふいから走り、遣るんだ、オ「アツ、此奴等は乃公等より  
大分念入りだ、シヤア仕方ない、次の間の猿飛、三好はアノ通り、グウ、  
肝を掻いて居るやアがる、和利や海野、寛の奴は暢氣者だから、眞逆拔驅がそ  
は思ふまい、詰り五人で出かけるのだ、三「左様だ、霧隠が忍術使  
だから、刀屋九兵衛をカツ攫ふ、我々が暴れるのだ……」チャンと役割を定め  
て時刻の来るのを待つて居る、秋の夜だから餘程長い、其のうちに三好、望月  
霧隠、根津、穴山の五人は、何時の間にか寝込んで仕舞つた、十人のうち  
で目を覺して居るのは、由利鎌之助と海野六郎、寛十造の三人ばかりだ、夜は  
次第に更け渡り、彼是れ眞夜中過さるさ、由「オイ、海野、寛、起きる  
隣りの五人も何うやら寝たやうだ、寛「ウム、密に出掛けてやらう……」  
三人は起きた、チャンと仕度をして寝て居たのだから直に飛び出せる、寛十造

は好伊豆入道の枕許の握飯の風呂敷を分捕つた、三人は拔足差足居間を出た、庭へ飛び降りるが早い、寛「サア急げ〜」生垣のり越へ一目散寛十造走りながら、ムシ〜握飯をやり出した、十「ムニヤ〜」伊豆入道奴怒張つて人間の頭ほどの握飯を拵へて居やがる、由「オ、一つ出せ〜」ムニヤ〜」三人は喰い〜走る、一時ばかり経つと、不圖目を覺したのが霧隠才藏だ、次の間を見る、燈火が消へて闇にあつて居るが、忍術使いだから目がヨク利く、オ「ハテナ、オヤツ猿飛と伊豆入道の軒は聞へるが、三人の奴が居る、此奴抜驅けたのかも知れん、失策つた〜」三好清海入道等を起す事を忘れて飛び出さうとするムク〜起き上つた、清海入道才藏の刀の鋒をムツと掴んだ、三「ヤイ才藏、アレほど約束してあるのに、一人ソツと出掛けやうさは不埒な奴だ、オ「ウーム、其處處の騒ぎではあはいはい、離せ〜」バツと拂つてエイツ、叫ぶ姿がスーッと消へて

仕舞つた、三「アツ大變、一番乗をする積りの乃公だ、ウーム残念〜」ムク〜飛び起き帯引しめて居る、穴山小助が目を覺した、小「オヤツ三好何處へ行く、三「何處へ行くかは知れた事、乃公が一番乗の功名するのだ、其處放せ〜」振り切つてドン〜駈け出す、根津甚八が其の後から飛んで行く、望月六郎も章駄走り、五人は到頭乗り出した、此の騒に不圖目を覺した猿飛佐助は泥ま横を見る、三人の寢床は藻抜の殻だ、佐「ヤ、ツ、失策つた〜」次の間を見る、五人も居る、佐「サア大變〜」伊豆入道起きる、伊「ウーム、睡い〜、ムニヤ〜」佐「ヤイツ、ムニヤ〜」處か、肝心の役目を承はつた二人が一番後に残されて堪るものか、八人は最う出て行つたぞ三「オヤオヤ、貴様も日頃に似合はん奴だ、忍術使いの癖に〜」、佐「ウーム、夫れを今云つた處で何うあるものか、サア續げ、三「マテ〜、オイ辨當がな〜」アツ残念〜、折角拵へて置いたものを〜、佐「大方意地悪の寛十

造が分捕つたのだらう、サア来い、其處處の騒ぎじやないわい……」二人は慌  
 て、飛び出した、猿飛佐助面倒さや思ひけん、九字を切つて口中に呪文を唱  
 へると、一羽の大鷲がサツと舞ひ下つた、佐「サア三好来い……」二人は鷲の  
 脊中に飛びのつた、大鷲は羽叩きするさ等しく、二人をのせて、疾風の如く空  
 天遙かに飛び揚り暗に姿は隠れて仕舞つた第一番に乗り出した、由利鎌之助、  
 寛十造、海野六郎の三人は、何なく和歌山の城下へ乗り込んで来た、由「ア  
 、苦しい、夜の明けないうちに來る事は來たが横腹が痛くあつた、十「ウム、  
 生れて斯んふに走つた事はない、マア何處かで一つ休まう……」三人は仕置場  
 の近處へ來ると、幸い辻堂がある、夫れへ入り込み休んで居る其のうちに夜は  
 全く明け放れた、まだ仕置の時刻には間があるから三人は辻堂を出て、一軒  
 の居酒屋を探し出し、夫れへ入り込み、座敷へ通つて、由「サア、一杯飲まう  
 朝酒は女房を質に入れて飲めさいふ位いだ、十「ウム、大いに飲まう、海「オ

イ、飲むのも宜いが、大仕事があるのだから、貴様氣をつけて酔はさいや  
 うにしなればならぬ、十「ナアニ大丈夫だ三升や五升で足許がヨロメクやう  
 ふ我々ではない」と酒肴を注文して飲み始めた、夜通し寝ないのだから酒をの  
 むと睡くゑる、大きい事を云つて居たが、到頭三人は酔い潰れて、一人倒れ二  
 人倒れ、グワ／＼軒をかいて白河夜船だ。

○後の鳥が先になつたぞ

折柄表へヌツと出て來た五人連れ、是れぞ三好清海入道、霧隠才藏、  
 望月六郎、根津甚八、穴山小助の名々だ、三「オイ霧隠まだ早い、一生懸命  
 騒げつけて來たから、案外早く來た、一つ息休めに、朝酒を出掛けやうでさ  
 か、オ「ウム、宜からう、然し猿飛と伊豆入道を出し抜いてやつたから宜  
 い氣持だが、由利、寛、海野の三人が一番先に出て來た筈だ、一体何處へ行つ

たらう、穴「ナアニ、奴等は抜驅の功名をした積りで、何處かで威張つて居やアがるのだ、今にアツと驚ろかしてやらんけりやアふらふい」三五人はズイミ居酒屋へ入り込み、オ「コリヤ〜、店先では閉口だが、何處かに居間はないか、亭「ハイ、裏に座敷がございます……」五人はズイミ通る、酒肴を注文して、グイ〜飲み据へて居たが、隣りの間で軒の聲が聞へるから、穴山小助覗いて見ると、三人が酔い潰れて居る、穴「オヤツ、此處だ〜、オイ三人は酔い潰れて居るぞ、オ「オヤツ、矢張り此處へ来て居やアがる、奴等は夜通し寝ないのだから寝いよ、マア宜い、飲め〜……」平氣で飲み變へて居る、其のうち時刻が近よつたさ見へ、往來をゾロ〜人が通る、○「オイ、今日の仕置は可哀想じやアふいか、△「ウム、左様だ〜、刀屋の正直九兵衛も飛んだ災難を受けたものだ」さ口々に云つて通る、オ「オイ、ホツ〜出かけやう、刀を斯ういふ工合にして、頬被りをするんだ、顔を見られると不可いよ、

三「成程、夫れば宜い……」五人は勘定済してプイと出た、帳場に居る亭主に向つて、三「オイ亭主、此の書附を三人の奴に渡すのだ、勘定も一處に貰つてくれ、亭「へエ、御連様でございますか……、三「ウム、連も連も竹馬の友處ではふい、朝夕一處に居るのだ、亭「ハイ〜、畏まりました……」五人は行つて仕舞ふ、刀を隠して頬被り、尻端折つて居るから、變な風体だ、五人は行つて仕舞ふと不圖目を覺した三人は、由「アア、ヨク寝た、コリヤ女中〜、女「ハイ〜御用で……、由「まだ、仕置の時刻ではふいか、女「ハイ最ふ大分見物が參つて居りますから、程なく始まりませう、由「左様かヨク寝た、勘定を持つて來い、女「ハイ〜……」女中は勘定書を持つて來る、由「利鎌之助見て居たが、由「オイ女中、斯んなに勘定があるか……、女「ハイ、八人さんでございますゆへ、夫れだけにあります、由「八人三人ではふいか……、女「オ、忘れて居りました、之れを御覽下さいませ……」帶の間より取り

出した書付を見るこ。

拔驅をした手柄として五人の勘定を支拂つて置け、アバヨ。

斯う書いて三好清海入道、霧隠才藏、根津甚八、望月八郎、穴山小助等五人の名前が並べてある。由「失策つた、オイ海野、寛、後の烏が先にあつたぞ、之れを見る一杯引かけられた……」二人は見る、十「ウーム失策つた、五人が隣りで酒をのんだ事が少くも知らなかつた、残念く、之では夜通し起きて居た甲斐がふい」さ地國太踏んだが追つかない、三人は悄悄勘定拂つて飛び出した、之れも顔を見られないやうに、頬被り、刀を隠して變ふ風体、ノシく仕置場へ乗り込んで来た、見るさ最う矢來の外は雲霞の人無り、由「イヨ一来て居るふ……」三人は、アラくさ歩いて居る、スルトヒヨくさ背後より肩を叩くものがある、由利鎌之助振り返つて見るさ霧隠才藏が立つて居る、由「オヤツ、才藏か……、オ「アハ、ハ、大きに有難い、由「何が有難い

オ「勘定迄支拂つてくれて氣の毒だ、由「ヤイ人を馬鹿にするふ、オ「アツ

ハ、ハ、貴様等三人が拔驅けた罰だ、由「ウーム、左様云はれるさ一言ない處で五人は……、オ「彼方此方に居るよ、夫れは左様と肝心の猿飛と伊豆入道は寝過したと見へる、宜い氣味だ、由「ウム、彼奴等の鼻を明してやつて嬉しくつて堪らぬ、今に始まるだらう」八人は處々に別れて、今や遅しと待ち受けて居る、鑓で刀屋九兵衛は縛り上げられ警固の武士に取り巻かれて乗り込んで来た、場の中央の荒蕪の上へ引据へられる、群集は動揺めき渡り、可哀想だくさいふ聲が、彼方此方に聞へる今しも役人は罪狀を云ひ聞かせる、首斬り役人は背後へ立つた、白柄の太刀抜き放し、切水をかけて、ビューく二度振り試み、ヤツさばかりに振り被つた、途端にサツと烈しき物音がしたと思ふさ、空中に一羽の大鷲が現はれた、役人共がアレと見揚げる一刹那、ロエーと舞い下つたと思ふさ、爪に引かけ首切り役人を掴んで引裂いた、同時に驚

の脊中せなかに乗つて居た二人の武士が飛び降りた、大驚おまわしつは續いて九兵衛を引摺みサツと宙天ちゆうてんに舞まひ上り、アレヨ／＼といふ間もなく、何處どこともなく飛び去つた、これこそ猿飛佐助さるびさすけが忍術にんじゆつで大驚おまわしを出して居るのだ、脊中せなかより飛び降りたのはこれぞ三好伊豆入道みよしづにうどうと猿飛佐助の兩人だ、猿飛佐助は突つ立つて九字を切つて居たが大驚おほわしが居ゐるなるさ、天地てんちに轟とどろく大音聲おんせう、佐「ヤア／＼淺野家の木ッ葉役人はやくにん、我われこそ眞田の郎黨猿飛佐助まんだのらうどうさるびさすけ幸吉さいきち、三「斯かくいふ我われは、同じく十勇士じゆしの一人、三好伊豆入道みよしづにうどうふり天てんに代つて九兵衛を助けるから左様思さうおもへ我われと思はんものは來れ／＼……」呼よばりながら伊豆入道いづにうどうは拳骨振り廻けんこつりまわして、早はやや五人叩にんたき据すへた、猿飛佐助はエイヤツと叫よぶさ、四邊あたりの小役人こやくにんはバタ／＼倒たはれる此この体ていを見た一人はアツと驚おどろいた、才さい失しまつた、流石さすがは忍術にんじゆつ無双むさうの猿飛さびだ、矢張やはり一番乗りいちばんのりをやつたか、ソレツ……」八人にんは彼方あなただ此方こなたの矢竹たけやらい來きをバ／＼、名々めいめい名乗なりのりを上げて、ドツさばかりに暴あばれ込み、霧隠きりかくれ才藏さいざうは同

じく忍術にんじゆつを以つて役人やくにんを惱なます、三好清海入道みよしせいかいにうどう、由利鎌之助ゆりかまのすけ、笈十造かけひさう、穴山小助やまこすけの三人は、四方ほうに別わかれて小口こぐちより擲つかんで投なげる取とつて放はなる、根津ねづ甚八じんぱち、海野六郎うみのらう、望月六郎もちつきらうの三人は四人がバラ／＼投なげ出した奴やつを、片端かたつばしよりエイヤツと當あて殺ころして廻まわる、何んしる十人が役割やくわり定さだめて暴あばれるのだから、何万何千人居にんた處ところで敵かたはふい、見みる／＼五六十人の警固けいこ役人やくにんは氣絶きせつした、檢視けんし役人やくにんは驚おどろいて逃にげ出ださうとする、猿飛佐助さるびさすけ躍たりか／＼つて、ヤツと當あてる、一人も殘のこらず悉ことごとく遣やり付つけた十人は、三「サア之これで宜よい、引揚ひきあげる……」云いつて居ゐる處ところへ、早はやくも城内じやうじやうへ注進ちゆうしんした見みへ、淺野家の侍あしののさむらい大將おほしやう龜田大隅かめだおほすみ綱縣つながた五六十人の若武士わかざむらいを從したがへ、馬上ばせうでドツと乘のり込こんで來た、之これを見みると十人は躍たり上あがって喜よろこんだ、佐「オヤツ來きたぞ／＼、彼奴やつは龜田大隅かめだおほすみに違ちがひない一番ばん幽靈ゆうれいに泡吹うわふかしてやらう」十勇士じゆしは手具てぐすね引ひいて待まちち受うける。

○チト此の後は乃公を見習へ

騒動はイヨ／＼大きくあつた、龜田大隈はドツと乗り込んで来た、龜ヤア／＼  
 狼籍者其處動く、淺野の豪傑龜田大隅綱縣乗り込んだり、何奴此奴も睨み  
 倒してくれん覺悟しろ……」怒鳴りながら十勇士を犇々取り巻いた此の龜田  
 大隅綱縣といふは、元柴田勝家の家來であつたが、若年の砌り、幽霊よ  
 り力量を授かつたといふ無双の怪力、夫れゆへ幽霊と異名を取つて居るのだ、  
 十勇士は諸國漫遊の際出會つて懇意の間柄だ、三好清海入道は夫れへ進み  
 出で、三ノヤイ幽霊、狼籍者さは何んだ眞田の郎黨三好清海入道始め十勇  
 士が仕置場破りに乗り込んだのだ、お心安いは常の事だ、サア召捕れるもの  
 なら召捕つて見ろ……」之れを聞くに龜田大隈は赫々目を剝いた、龜ヤイ、三  
 好始め十人の奴、ヨクも仕置場破りに來せた、遠慮はしあいでツ……」下知

を得へるさ若武士は十人に打つてかゝる、猿飛佐助さ霧隠才藏は得意の忍  
 術でバツバと消へる、彼處に現はれ此方に隠れ、チヨイ／＼擲んで投げる、  
 何んしろ姿を見せぬで遣る仕事だから何うすか事も出來ぬ、只ワイ／＼騒  
 ぐばかり、其の騒いで居る奴を、三好清海入道始め八人が、ヒイオーと喚き  
 叫んで殴りつける、蹴り立てる、踏み潰す、捻じ倒す、一騎當千さは此の事で  
 あらう、一人が五人づゝ相手にすれば五十人は片付く、三好清海入道、穴山  
 小助、寛十藏などは、一遍に五人を叩き倒したから、他の領分へ暴れ込む、根  
 ヤイ寛、此の五人は乃公のものだぞ、横から飛び込んで余計な事をするさ……  
 寛、何を吐す、乃公は受持の五人は最う遣付けたのだ、貴様其奴一人二人分配  
 てくれる、根、ヤイ成らんぞ、一度に遣つ付けるさ退屈だから乃公はオチ／＼  
 遣つてるのだ、内輪で取合が始まらうといふ騒ぎ向ふを見るに猿飛佐助さ龜田  
 大隅も馬上さ徒歩で、鑓を削つて居たが猿飛佐助面倒さや思いけん、バツと

姿を隠すに等しく、馬の前足揃んでドシーン、引くり返したから堪らぬ、  
 龜田大隅馬止より投げ出されて、アツと驚き、起き上らうとする處を、清海入  
 道背後からエイッ龜田大隅を打ん毆る、掴み合捻じ合ふ、流石力自慢の大隅  
 も、三好清海入道の無茶苦茶にかゝつては敵はない、到頭捻じ伏せられて、  
 ボカ／＼毆られて居る、慘々暴れ廻つた十勇士は、十分勝利を得たから、猿  
 ヤア引揚げる／＼……」一度にドツと引揚げて仕舞つた、仕置場は物の美事に  
 暴られて仕舞つて、龜田大隅地團太踏んだが追付かぬ、然るに此方十勇士の  
 面々は、大威張りで九度村へ引揚げた、刀屋九兵衛は最う助けられて幸村の手  
 許に来て居る、猿飛佐助は八人を尻目につけて、佐ヤア何うだ貴様等、乃公等  
 は一番後から乗り込んでも遣り事がキビ／＼して居る、由利、寛、海野等は夜  
 通し寝ふいで一番先に出掛けても乃公等には敵ふまい、肝心の九兵衛を助けて  
 置いて暴れる處ふんぞは、乃公でふくつては出来ぬ仕事だ、チト此の後、乃

公を見習へ……」何んぞ威張られても一言ふいから、清海入道さへも坊主頭を  
 掻いて居るばかり、十人は幸村の目通りに出て、逐一申述べた、幸ヤア、宜  
 く助けた、然し僅か二人で宜い仕事を十人も出掛けるさは大仰だ、以後は内輪  
 で功名争いならぬぞ……」八人は叱られる、幸村は九兵衛等父子三人の身  
 の上を憐れみ、丁度裏手に百姓家の空いたのがあるから、夫れへ父子三人を移  
 らして、内職に紐を編ませる、之れが後に眞田紐と云つて、今も尙ほ残つて  
 居る眞田紐だ、處々幸村は淺野から信度睨まれるであらうと承知して居るか  
 ら反對に睨まれないやうにしてやらうといふ考へで九兵衛父子に鬼神丸の刀の  
 事について、嫌疑を受けた成行を尋ねるさ、九兵衛の言葉には、九お殿様、  
 私ば別に心當りはございませぬわ、娘のお玉を是非妾に呉れと申されたお方  
 がございます、夫れは淺野様の御家來で、二千石を頂戴さる北野彈正左衛門  
 さ申されるお方がございまして私は釣り合はぬは不縁の基、殊に一人娘を妾



に上げられませぬとお断り申し上げました、夫れゆへ若しや其のお方が意恨を  
 含まれまして寶藏にある鬼神丸の名刀を盗み出され、私を罪に陥入れてやらう  
 さいふお考ではござつたか、斯う思いますのでございませぬ、夫より外に心當り  
 は少しもございませぬ、幸成程、或ひは左様かも知れぬ、世の中にはヨクあ  
 る事だ、マア宜い、此の幸村が今に身の明しの立つやうにいたしてやる、幸村  
 が引受けてくれるのだから九兵衛親子三人は大喜び、毎日幸村の閑居へ來  
 て万事炊事向の世話をして居る處が此方山歌の淺野家では、眞田十勇士に仕  
 置場を暴されて、肝心の罪人は奪い取られ、之れを捨て置く時は、四十二万石  
 の威勢に關はる事だから、但馬守は重立つ臣等一統を、集めて協議さつた、  
 但「ヤツ者共、九度村の眞田幸村は平素より徳川家を戦つて居るのみならず、  
 今回は又仕置場を破るさば以ての外、流罪同様の身分でありながら、不埒千万  
 之れ此の儘に捨て置くに於ては、予の威勢に關はるのみならず、此の事關東へ

聞へる時は面目次第も無い、誰か九度村に乗り込み、篤志様子を取調べ、刀屋  
 九兵衛果して庇すはれて居るならば、夫れ相當の掛合に及ばねばならぬ、誰か  
 九度村へ問者に入り込む者はどうか、一座を見廻したが、相は手眞田、お  
 負けに命知らずの十勇士を控へて居るのだから、ナカノ、劍呑な仕事だ我れ乗  
 り込まうと問者の役目を引受けるものがない、淺野但馬守は機嫌が悪くさつ  
 た、但「ヤア、汝等のうち、問者の役目を勤めるものか一人も無いが、首尾よ  
 く仕終せるに於ては、五百石の加増であるぞ、懸賞付にあつた、人間は慾も  
 のだ、五百石さいふ聲を聞くさ、ソロ／＼關り出る奴がある。

○奴屹驚して居やアがる

○「エ、我が君様に申し上げます、仁オ、稲垣源内であるか、源ハ、私  
 が一つ問者の役目を勤めるでございませう、但「オ、ヨク申した、五百石で

あるぞ……」稻垣源内五百石が欲しさに、到頭問者の役を引受け百姓の姿な  
 つて、九度村へ出掛ける。處が幸村は少しも拔りが無い、九度村の附近一帯に  
 は自分の郎黨と百姓にして要處／＼に配置してある。少し見馴れぬ人間や、順  
 六部、乞食が來てき、淺の野間者でふいかさ、油斷しふいのだから、幸村  
 の閑居を探るなごさいふ事は何うしても出來ない。稻垣源内夫れを知らふいか  
 ら百姓姿でノコ／＼出掛ける。九度村へ入り込んで、田畑を耕して居る百  
 姓に向い、源「チヨイさ、お尊れ申します、百「ナンじや、百「此の邊に眞田  
 幸村様のお住居がある筈でございませうが、御存知ございませうまいか、百「な  
 に眞田様のお住居を尋ねるのか、一休お前は見馴れぬ百姓だが、何處から來た  
 のだい……」源内運の悪ささ、人もあらうに海野清左衛門が百姓をやつて居る  
 處へ打つ附つたのだ、清左衛門「シロ／＼源内の顔を見詰めて居たが、清「フ  
 ン、此奴一曲ある目付だ、大方淺野の間者に違いない、目「シ吃驚させてやら

う……」左あらぬ体で、清「オイ／＼、お前は眞田様へ何用があつて行くのか  
 知らぬが、此の頃は和歌山から間者が入り込むやうで、滅多な人間が行くさ  
 夫れこそ十勇士が退屈だから、酷い目に遭すよ、お負けに猿飛才助、霧隠さ  
 ふ日本一の忍術使いが居つて、チヨイさ人間の顔を見て、之れは敵國の間者  
 だ、之れは徳川の廻し者ださういふ位は、見抜見通しふんだから劔呑だよ悪い  
 事は云はふ引返したが宜からう、傳「へーン、夫れは豪いござい……併し私  
 は別に怪しいものではございませんで、チヨイさ其の……、清「夫れが不可  
 ない、百姓が眞田様へ御用のある筈が、マア返へした宜からう」源内も  
 少々驚いたが、五百石が左様容易く貰へる譯のものでないから、源「イエ、  
 私は決して怪しいものではございませんで、之から一つ眞田様の處へ行つて細を  
 編んでいらつしやるさ聞きましたゆへ、其の取次がしたいので……、百「フム  
 左様かい、シヤア行つて見るが宜い……」云ひつゝ、清左衛門腰にアラ下げて居

た竹法螺を取り出して空へ向け、ブーッ／＼／＼と二聲三聲高根に吹き立てる。斯は如何に彼方此方にブーッ／＼／＼竹法螺の根が八方に聞へる。源内ハッとおどろいて居る折柄、附近に野良仕事をして居た百姓共は、鋤鎌を各自に閃かしツイ／＼と押しよせて来る。○「ナンダ／＼、竹法螺は何んの知らせだ……」口々に呼び／＼、源内を袴々々遠巻にした、イヤ源内驚るいたの驚ろかないのでは無い、五百石より命が大事と這々の体で逃げ出した、跡に百姓共は大笑い、○「アハ、彼奴が淺野の間者であつたのか、イヤ面白／＼……」大笑い、何んか奴が来て、百姓共が威かして追ひかへす、淺野但馬守はイヤ／＼怒り甚だしく今度は屈強の若武士を撰み出し六部にして入り込ませた、首尾よく眞田幸村の閑居へ到着して、六「行き暮れて難澁のもの、一夜の宿を願いたい」と申込む、全体幸村は之れ等の六部や乞食には常に施行して宿を貸す事は珍らしくないのだ、夫れを知つて居るから、六部に身を装した淺野の

間者は歩つて来たのだ、取次に出たのが三輪虎兎之助、三「宜しい、お宿申す通らつしやい……」一室へ通す、六部はツロ／＼四邊に目をつける、座蒲團を持つて出たのが三好伊豆入道だ、伊「六部殿、悠くりさつしやい」茶を持つて出たのが海野六郎、六「六部殿、粗茶一つ召さつしやい……」菓子を持つて出たのが穴山小助だ、小「六部殿、一つ摘まつしやい」夕飯を運んで出たのが、根津甚八だ、甚「六部殿、何も無いが遠慮に及ばぬ……」膳の上には酒もついて居る、六部も呆れた、閑者に入り込む位い的人物だから淺野家では腕利と呼ばれた豪のものだが、出るものも／＼屈強な男ばかり、百姓風体では居るが武士の言葉を使つて居るから、六「オヤ／＼幸村何處に居るのだらう刀屋九兵衛は何處に庇つて居るのか知ら……」様子を窺つても分らぬ、其のうちに飯を済ました、處へ出て来たのが猿飛佐助だ、猿「ヤア、六部殿、嘸お疲れであらう主人が出て挨拶いたすべきだか、チヨイと手放せぬ用だあるから御免蒙むるこ

のこゝ、蒲團は押入にござる、勝手に出して寝まつしやい……」云ひ捨て、引下る最う誰も出る模様がない、夜は次第に更けて来る、六部は蒲團を出して轉り寝たが、六「待てよ、一つ様子を探つてやらう……」ムクムクと起き上りソツと廊下へ出て、一足二足行かうとするこゝ、チヨイと鼻を摘んだものがある六「ヤア誰だ……」呢と見る、誰か居る、六「ハテナ、可笑しい事だ……」又行かうとするこゝ、頭をボンと叩く、六「アツ……」四邊を見ても人の子一匹も居る、六「之れは不思議だ……」又行かうとするこゝ足をグイと引いたものがある、ドシーン、廊下から下へ轉がり落ち、頭を強が打つて、六「ウーム……」喚き苦しんで居る六部も氣味が悪くあつたが、漸々這い上り居室へ歸つて、蒲團引被り寝て居るこゝ一人の小姓が出て来た、小「六部殿、廊下から落ちて嘔お痛みでございませう」之れを召し上げ……」差し出したのは菓子、六部は喜んで受取らうとするこゝ、小姓は俄に大入道とあつてハツタと眠んだ

六部はアツと驚き、早々身仕度整へ、六「大變く、宛で化物屋敷だ、斯んふ處に長居は無用……」と居室を飛び出さうとするこゝ、何者かムツと襟頭撫んだ、アツと驚き、振り向く途端、エイツ、ドシーン、五六間向ふへ投げ出された、六部はアツと平倒り込んだが、之れや大變と、命カラ／＼逃げ出した、ヌツと現はれた猿飛佐助と霧隠才藏は、佐「アハ、ハ、奴吃ぬして居やアが……」斯んふ風で、幾等間者が來ても十勇士が追ひ拂ふ、淺野但馬守、イヨ／＼憤り甚はだしく、這に九段木の出口入口へ、番所を三ヶ所設けて幸村の身を十分警戒する事にあつた。

○蛇の道は蛇だよ

敵を計るは味方を欺くに如かず、幸村はワザと百姓風体とあり、世間の目を眩まして居たが片時も油断はしなかつた、十勇士の中にも余り幸村の意苦地ある

いを笑ふものもあつたが、幸村は平氣で毎日組を編むに余念がな、或る夜のこと幸村は密に飛佐助を招き、幸「其方に申付ける事がある、余の儀ではな  
いが、刀屋と兵衛を取り込んで、置けば真逆の時に役に立つ、刀劍又は槍の手  
入れをさせるには、餅は餅屋である、處で九兵衛の話せし北田彈正左衛門、奴  
娘の、に思いをかけ、夫れが敵はぬ意趣暗しに、企んだ計略であらうと申  
したが、夫れに間違ひあるまいと心得る、其方明日和歌山城下へ乗り込み、篤  
さ様子を探り、次第によつては、北田彈正左衛門を生捕つて歸れ」之れを聞く  
と猿飛佐助仕事が出来たので大喜び、佐「畏まりました」習にふるさ、十  
勇士には知らせもしないで、身仕度して表へ出やうとするさ、早くも見附けた  
のが例の三好清海入道だ、三「オイ猿飛、何處へ行く」佐助悪い奴に出會つ  
たと思つたが、左あらぬ体、佐「ウム、チヨイと其處へ……」三「ナニ、其處  
……其處へ行くに其の風体は何んだい、ハア御大將から何か云ひつかつて出か

けるのだる、乃公を連れて行け、佐「オイ、い、満りさい、直に歸るんだよ、  
乃公は三日市の海野太郎の處へ……、その病氣だといふから見舞に……、三「  
嘘をつけ、苦しい云ひ辭をするさ、海野太郎はビチ／＼して居るさ六郎は云つ  
てるぞ……」海野太郎は十勇士の海野六郎の叔父に當つて、三日市へ旅籠屋を  
開いて、密に天下の形成を窺つて居るのだ、佐「ウーム昨日不意に病氣に……  
三「何を吐す、貴様連れて行かんさヤイ佐助、土百性で、佐「オイ、口汚  
さい事をいふる連れて行くほどの事ではないのだ、三「ナクつても有つても是  
非同道しやう、佐「六月蠅いさア、マア御大將に尋ねて見る……」云ひつゝヤ  
ツと呼ぶさ、佐助の姿はバツと消へた、三「アツ失策つた到頭取り逃した、一  
体彼奴何處へ行つたのだらう……」清海入道一人地團太踏んで居たが、何に思  
ひけん、自慢の八角棒を提げ、ペラリ表に飛び出した、猿飛佐助は旨く清海  
入道を徹いて仕舞つて、ドシ／＼和歌山の城下へ乗り込んで来た、和歌山城下

の本町には眞田の郎黨で伊勢崎七郎三郎といふが旅籠屋商賣をして居る、之れは幸村が申付けて淺野家の舉動を探る便宜上出させて居るのだ、佐助は夫れへ歩つて来た、佐「ヤア、伊勢崎殿……、伊「オ、猿飛か、通れ……」奉公人下女も若い者も悉く眞田の郎黨のもの、縁固ばかりだから大丈夫だ、佐助は奥の一室に通リ主人七郎三郎に委細の話をして通常の泊り客のやうに見せかけ、酒でも飲んで居る、佐「何うも伊勢崎殿、三好清海入道相變らず元氣で困る、今朝も出て来る時斯様くだ、七「アハハ、アノ男は横紙破りだから、何處へでも行きたいのだ、詰り暴れ好ふのだが、アンも男も世の中には必要だよ、佐「必要は必要だが、奴暴れ出さず肝心の仕事に忘れて仕舞つて夢中にゐるから困る、ダカラ今度も連れて来なかつた……」話して居る處へ廊下にドシ／＼足音がする、三「ヤア猿飛何處くだ、到頭追かけて来たぞ……三好清海入道の聲だから、猿「アッ失舞つた……、三「ヤイ佐助、何が失舞

つたのだ、蛇の道は蛇だよ、大方此處だらうと思つて乗り出して来たのだ、猿「何うも困るじやないか、勝手に出て来て……、三「何が困る、貴様三日市の海野太郎が病氣だと云つたじやアないか、乃公は来る途中で寄つて見たら、ヒチ／＼して居たぞ、居い加減に嘘をつけ……宜で猿飛、仕事は何んじや……、猿「ウム、今だから話すが、實は斯様くだ、三「ソレ見る、大抵斯んふ事たらうと思つて居たのだ、斯ういふ仕事は乃公が居ない都合が悪い、貴様一人で出来る譯のものではない、佐「然し三好、乃公の命令に従はふいで、勝手に暴れると許さんぞ、三「大丈夫だよ、乃公は貴様の云ふ事を聞く、其の代り貴様一人が美味い汁を吸ふと承知しなさいぞ、マア酒を飲なう……」主人三人でグイ／＼飲み始める、翌日にある猿飛佐助と清海入道は、ブラリ宿を立ち出で、武者小路を歩き廻つて見ると北田彈正左衛門といふ標札がある、三「ヤア此處だ／＼乗り込んで撤み出さうか、佐「オイ／＼、満らさい事をい

ふふ、ヨク様子を探らぬいと不可ん、暴れる時は乃公が知らせるから万事乃公に任せて置け……」一旦宿に歸り夜に入ると猿飛佐助は身仕度してノジク武  
 者小路に歩つて来た、忍術で首尾よく北田彈正左衛門の屋敷へ忍び込み、奥  
 の間へ来て見ると、彈正左衛門一人の美人と酒を飲んで居る、此の彈正左衛門  
 は先年夏に別れ、子も何も無い獨身だ、夫れで二千石を取つて居るのだから懐  
 中は宜いのだ、猿飛佐助が忍び込んで居る事は知らぬから、北「コレ辰、其  
 方何を考へて居る、辰」旦那様、妾は斯うやつてお妾に上りましたも何日又  
 捨てられるかも知らんと思ふと、悲しうあつて……、北「アハ、何を満ら  
 ない、行々は宿の妻に直したいと思つて居る其方じや、馬鹿な事をいふな辰」  
 夫れも旦那様、妾はチャンと聞いて居ります、北「何を聞いて居る、辰」お隠  
 し遊ばして、憎らしい……、北「アイタ……、酒が溢れるじやアないか……、  
 辰」貴公は刀屋九兵衛さんの獨り娘お玉さんに惚れていらつしやつたのでござ

いますから、北「ウーム其の事を知つて居る事は、驚いた、イヤ實は辰、お前  
 のいふ通り刀屋の娘にはホの字だつたが、一人娘だから何うしても妾に遣  
 ないのだ、ダカラ其方を代りに妾にしたのだが、最玉の事はいふふ、其方を  
 見捨てる氣遣いはない、辰」イエ、分りません、旦那様は戀の叶はぬ意趣晴し  
 に、刀屋九兵衛さんをアンかにおさつたのだと、専ら城下では噂をいたして居  
 ります、夫れほど口惜しいお玉さん、逆も妾とは比べものにはなりません……  
 北「待て、靜にしる、城下では左様な噂があるか、辰」ハイ、ございます  
 お氣をおつけ遊ばさいと不可ません、北「フ、ム……イヤ心配する、決して  
 左様な事はない、夫れは口齟齬ない奴の悪口だ、何も證據はないではいか、  
 辰」證據はございませぬが、人の口には戸が立てられぬ譬へがございませぬ、  
 ……」之れを聞くと今迄勇ましかつた彈正左衛門、俄に悄氣込んで仕舞つた、  
 彈「最う云ふな、氣が悪くあつた、酒は廢さう、サア寝る事にしやう」と二人

は杯盤を女中に片付けさせ、其の儘寢床へ入り込んだ。

○カツ攫つてやらう

猿飛佐助は一任一什を立聞きして、佐「フ、ムイヨ〜此奴の所業だ待て〜、一つ悪戯をして置いて明晩三好を連れて来て、カツ攫つてやらう」佐助は時刻を計つて、寢所へ忍び寄つて見ると、二人は枕を並べ、女はスヤ〜、男はグウ〜と高聲だ、佐「オヤ〜、彈正左衛門醉拂つて寝たる……」枕許に歩つて来て、ブツと燈火を吹き消し、ソツと蒲團を捲り、女の脾腹をリンと當てた、其の儘氣絶する。佐「脆い奴だ……」横手を見ると鏡臺がある、曳出しの中より髮剃を取り出し、婦女の頭をブリ〜剃り出した。彈正左衛門は酔つ昏つて居るから知らない、佐助はお辰をクリ〜坊主にして仕舞つた、佐「アハ〜、面白い〜、之れで宜い、目を覺したら吃驚するだらう……」其の儘

アイと飛び出した。夜が明けると彈正左衛門は目を覺し、ヒヨイと見ると坊主がスヤ〜と寝て居る、彈「オヤツ……アノお辰でかいか……何うした……」お辰も正氣づいたと見へ、辰「ウーム、旦那様……、彈「コ、コリヤ、寄るお、其方は一体何うしたのだ……、頭を見る……」お辰は分らない……、辰「私の頭が、何うかいたしましたか……アツ、ク、口惜しい、ダ、旦那様は能くも、〜……」武者振りつく噛みつく、彈「コリヤ乃公は何にも知らぬぞ、アイタ……」ホカーン二人は寢間の中で殴り合ひを始める、家來や女中は驚いて居る。○「オヤ〜朝から犬も喰はふい、チン〜騒ぎをふさつて……」皆々呆れて居る、猿飛佐助は宿へ歸り、清海入道に逐一話して大笑い、翌晩さぶるさ二人はブラリ宿を出た、佐「オイ三好、今夜は彈正左衛門をカツ攫つて飛び出すのだ、貴様か思ふ存分暴れて見る、三「オイ〜猿飛、タツタ一人位いカツ攫つて逃げ出すのに思ふ存分暴れるもふいものだ、此れ位れい事は乃公の片腕に



も足りまい、佐「不足を云ふさ、サア来い……」何なく二人は門前に歩つて来た、佐助はハット姿を隠した、間もなく本門がギョーと開いた、佐「サア這入れ、三「オ、合點だ、佐「今、彈正左衛門は自棄酒を飲んで居るお辰さいふ、妾は泣いて居るぞ、三「アハ、面白く……」ノシ、奥へ通る、二千石を領して居るのだから、相當に仲間も居る、皆寢入り始だから知らまい、三好清海入道彼方此方の居間を引開け寢て居る奴の頭をボカ、蹴る、〇「アイタ……誰だッ、三「騒ぐさッ、ガヤ、吐すぞ捨り潰すぞ……」威しつける、仲間共は少さくふつてブルブル震へて居る、三「コリヤ、貴様飛び出して騒ぐぞ不可、斯うしてやらう……」蒲團でグルグル巻にして引縛る、何なく奥の間へ来て見ると北田彈正左衛門顔を真赤くして酒を飲んで居る、三「イヨ、此奴ださ、ヤイ彈正左衛門」怒鳴りつけられ彈正左衛門ヒヨイと清海入道の顔を眺め、彈「ヤ、ッ、貴様は何んだ、コ、此の眞夜中に人の家へ無斷で

……、三「黙れッ、此の八角棒伊達には持たぬぞ、貴様は云ひ分ある奴だ、ッタバタ騒ぐさ……」猿臂を伸してムツと首筋引摺んだ、北「ウメ曲者ッ、三「何を吐す眞田の郎黨三好清海入道を知らぬか……」ボカーン、横面打ん殿るさ、キヤツと叫んで氣絶した、此の体を見てお辰は驚き逃げんとする佐助は飛びかゝり、ウンと當てた、佐「サア、之れで宜い、余の奴は目をかけさ、三「オ、合點だ、此ん事さら、ワザ、出掛けて来る價値はふかつた……」三好清海入道彈正左衛門を八角棒の先へ縛りつけた、ウンと引摺いだ、三「サア行かう……」二人は大手を振つて門前に出た、馬が一頭繋いである、三「オヤッ、之れは何うしたのだ、佐「乃公が馬部屋から曳出して置いた、三「一頭では満らまい、佐「ナアニ、一頭しかまいのだ貴様のれ、三「シテ、貴様は何うするのだ、佐「乃公は貴様に尾ひて走る、三「左様な事が出来るものか、佐「出来ても、出来んでも一所に歸れば宜い、相乗りも宜いが馬が疲れる、詰

リ三好が乗る事にある。三三成程、シヤア乃公が乗らう……」清海 入道彈正左衛門を引擔いだまゝヒラリ飛びのる、三三サア驅けるぞ……」ハイヨ、疾風の如く飛び出す、二三里来てヒヨイと振り返つて見ると、猿飛佐助平乗る顔して、佐「オイ、三好、チト早く走れ、三三オヤツ此奴は妙だ……」ハイヨ、双角蹴込んで又二三里来た、足を緩めてヒヨイと見ると、佐「此處だよ、三三ウーム、此奴は奇体だ、ハイヨーツ」又三四里来て振り返ると、佐助は見へない、三三ハリア、猿飛奴幾等忍術使いでも、四足の馬と一緒に走れるものではない、三三ハリア、猿飛奴幾等忍術使いでも、四足の馬と一緒に走れる、三三ウーム、其處に居たのか、佐「知れた事をいへ、馬と一緒に走れるものか態を見るさは何んだ、三三ウーム、此奴は乗つた、然し貴様、何うして尾つて来た、佐「一緒に乗つて来たのだ、後ろの尻へ飛びのつて来たのだよ、三三だろうと思つた、左様であつては人間が馬と一緒に走れる氣遣いはないと思つ

た……」二人は難なく九度村へ立ち歸つた、スルト十勇士の面々は瞬いで居る穴「ヤイ猿飛、三好、ヨクも貴様達は我々を出し抜いて出て来た、不埒な奴だ、三三何を吐す、貴様等が益槍して居るから不可ない、チト乃公を見習へ暴れたいやうだつたら乃公の爪の垢でも煎じて呑め……、十「ウヌ、不屈な奴だ友達甲斐も無い……、三三アハ、怒るな、其の代り此の通り土産を擔いで歸つてやつた……」ドンと彈正左衛門を投げ出す、淺野家で二千石を貰つて威張つて居る奴も、十勇士の前に出てはボロ糞だ、幸村は彈正左衛門を奥へつれ込み詮議するさ、包み切れなくなつて一伍一什を白状した、短氣の笈十藏大いに怒り、十「此の野郎、武士の風上にも置けない代物だ……」ボカーン打撃、るさ其の儘即死して仕舞つた、幸「コリヤ十藏、何んかいふ事をいたす、殿り殺す奴があるか……」彈正左衛門こそ災難、幸村は今後笈十藏と猿飛佐助に向い、幸「兩人大儀だ、又和歌山城下へ行つてくれ、此の死骸を擔いで行つ

て斯様く計らへく、十「ホイ、今度ば暴れ役でふくつて、隠亡の眞似だ……、幸何を睨いて居る。十「へい、参ります、ヤイ猿飛、貴様は二度も出掛けるには仕合せな、奴だ之れを擔いで行け、佐「冗談じやアない、乃公は貴様を連れて行くのだ、一つ暴れ口を拵へてやるから擔げ、十「ヨ、シ、ジャア擔いでやらう」暴れると聞いて、十「藏、彈正左衛門の死骸を擔いで馬に飛びのりタツく、和歌山城下へ乗り込んで来た。

○浅野但馬守見参々々

佐「サア之からだ、確りしろ、十「大丈夫だ、何處へ行く、佐「城門へ打ち捨て、置くのだ、十「捨て、置くばかりでは満らぬではいか、佐「マア待て、細工はワウく、だ仕揚げを見て居れ……」離れ、大手門前に来た、北田彈正左衛門の死骸は門前の扉に立てかけて倒れ、いやうにした、猿飛佐助は腰の矢立

取り出して、

武士の魂抜たる但馬殿

粗品ながらもツツと進上

真田の郎黨 猿飛佐助  
おなじく 同 十 造

佐「アハ、但馬守が、カン／＼になつて怒るのだぞ、十「アハ、怒つたつて仕方ない、豊臣の恩義を忘れて、狸老爺に撫でられて居る魂の抜殻には、魂の抜殻の死骸を進上するのが適當だ、面白い……シテ暴れ口は……、佐「ウム、搦手から城内へ飛び込め……」二人はノシ／＼搦手へ歩いて来た、佐助はヤツと叫んで身を隠した、間もなく城門がギ／＼開く、佐「サア、這入れく……」十藏ノシ／＼入り込む、佐助は十造引つれ、奥庭へ遣つて来た、佐「覚、貴様此の石燈籠を兩戸へ投げつける、乃公が忍術でアツ

アさ出火のやうに見せつける、スルト城内が騒ぐ、貴様が眞田の郎黨、寛十造之れにあり、淺野但馬守見參、斯うやるのだ、乃公が忍術で十勇士を此處へ出す、貴様が十勇士の名前を一々名乗り立てる、雜兵が「ワイ」飛び出して来る風に見せかけるから、ワンとやれ……」十造之れを聞き躍り上つた。「イヤ、之れは面白い承知……」十造二百貫ばかりもあらうといふ石燈籠をウシと引擔いだ、雨戸を目かけてヤツと投げつけるぞ、メリ／＼バラ／＼ドスン、ピリ／＼四邊は震ふ、此の物音を聞くぞ、宿直の武士は第一番に飛び出した、(「ナンだ……」ワイ／＼出て来る、猿飛佐助は樹蔭に突つ立ち九字を切る、斯は如何に、彼方此方からプツプツと火を吹き出した、○「オヤツ火事だ」ソレ大變／＼……」イヨ／＼騒ぎ立した、スルト寛十造は、傍への松の木をムツ／＼と根こぎにして、十「ヤア／＼我こそは眞田の郎黨の寛十造さ、魂の抜殻淺野但馬守見參、三好清海入道之れにあり、

霧隠才藏、穴山小助、根津甚八、由利鎌之助之れにあり、豊臣の恩義を忘却して徳川の狸爺の罫丸を嘗める淺野但馬守見參、云ふ聲諸共、松の木をビュー／＼振り立て若武士の眞只中へ暴れ込んだ、スルト彼方此方から、十勇士らしい影武者が飛び出して来る、雜兵が六文錢の旗差物を閃かしてワア／＼繰り込んで来る、○「ヤ、ツ、大變／＼出火だ、思つたら、眞田左衛門介幸村の郎黨が夜襲をかけたのだ、出合へ……」大騒ぎさつた、寛十藏面も振らず、踏み込み／＼小口からビュー／＼撃つて廻る、見る／＼五六十人叩き潰した、猿飛佐助は最う宜からうと兼ての相圖、ヒューと口笛吹き鳴らす、寛十藏之れを聞き等しく、ヤツと松の木を大勢の中に投げ出し、ドシ／＼搦手へ驅け出し乗り捨てた馬に飛びのるが早い、ハイヨー一目散に驅け出した後よりは猿飛佐助、之れ又何時の間にか馬を分捕り、夫れに乗つて驚進、二人の姿が城内に見へなくふるさ、今迄の出火も影武者も雜兵もバツ

さ消へて仕舞つて跡方もなく。○「オヤ／＼此奴は不思議／＼、一向火事の跡もふいぞ、○「ケド、澤山殴り殺されて居るではふいか……、（「フム、サテは眞田の郎黨が忍術を使つたのだ、残念／＼……」切齒をしたが後の祭りだ城内は惨憺に荒されて、死人怪我人が敷知れずさいふ光景、夜が明けるさ門前の死骸を見つけた番兵は、此の事重役へ注進する、重役「飛び出してヨク／＼見るさ、豈に圖らんや北田彈正左衛門の死骸だ、殊に扉の悪戯書を見て何れも無念／＼と地團太踏む、淺野但馬守は之れを聞いて大いに怒り、但「己れ憎くき眞田の郎黨奴、飽迄も此の意恨は晴さんければならぬ」怒つて見ても、四十二万石が浪人者に惱まされたさあつては、不面目であるから、到頭泣寝入りの姿にあつた、此方猿飛佐助さ寛十造は大威張りで、九段村へ歸つた幸村に逐一言上する、幸「ラム、十造が暴れたか、マア／＼夫れ位いに苛めて置くも宜からう」斯んぶ風で眞田家と淺野家は始終スレ／＼睨み合いの体でお

つたが、或日の事幸村は十勇士を招き、幸「兼て其方等に申した通り天下はイヨ／＼動きかけて来た、家康今回秀頼公に秀忠の長女千娘を娶はせした之れ豊臣家を潰す下心である、就ては只淺野を苛めるばかりでは面白くないなんじらこれしよこまくらう汝等は之より諸國漫遊をいたし豊臣恩顧大名の意中を探り、及び徳川譜代大名を苛めつけてやれ大阪には人数少るし、豪傑有志と見れば味方に引入れるやうにいたせよ」之れを聞くさ十勇士は躍り上つた、三「エ、御大將、私は近頃腕かブツ／＼夜泣をいたしまする、十「某は夜泣き位ではございませぬ時に晝も泣く事がございします……」口々に力味出した、幸「待て／＼十人がふたり、五組に別れて出掛ける、予の手許には三輪虎兎之助さへ居れば差支へない側によつて籤引をいたせ……、三輪虎兎之助籤を拵へる、三「サア、引け／＼、三「待て／＼、乃公が一番だ何うか仲の好い奴を似合いまするやう……と勝手な事をいひながら、籤を引く、其の結果は猿飛佐助と三好清海入道、

霧隠才藏と笈十造、穴山小助と根津甚八、由利鎌之助と海野六郎、望月六郎に三好伊豆入道と極つた、三「ヤア猿飛と乃公だ、此奴は宜い、猿飛の奴を連れて居る、幾等暴れたつて、心配もない、眞逆の時は奥を手の出してくれから……、佐「オイ、乃公は貴様と歩く、第一困るのはヨク酒を飲む、飲むと暴れたくふるから閉口だ、三「アハ、夫れが宜いのだ、何か仕事がないと退屈だ、召連れてやるから有難く心得る……」大威張りだ。

○誰かと思はんでも乃公だ

又もや部署を定める爲め籤を引いた佐助と清海入道は西國、其他夫々決定した、幸村は漫遊の心得について懇々述べて立て、夫れより酒宴の饗しとまつた、翌日にあると、五組の人数は夫々目的地向けて出立した、猿飛佐助と三好清海入道は先づ第一に大阪へ出て来た、三「オイ猿飛、最うソロソ

暴れ口を拵へてくれる譯に行かぬかい、佐「オイ、満らぬ大阪は秀頼公のお膝下ではないか、チト遠慮しろ、三「ウム、夫れも左様だ……、オヤ、向から恐ろしい大きな武士が来るぞ、一つ當りをつけてやらうか……、佐「オイ、満らぬ……」云つて居る間に、三好清海入道ドンと突き當つた、武「エツ無禮者ツ……」清海入道の利腕掴んでヤツと投げる、清海入道投げられながら、クルリと筋斗打たせて、向ふへスツクと突つ立ち三「己れツ、不埒ツ……」打つてかゝらうとすると、相手の武士はヒラリ編笠脱ぎ捨て、武「ヤイ清海入道、乃公だぞツ……」云はれてヨク／＼見ると、豈に圖らんや黒田の豪傑後藤又兵衛基次だ、三「イヨ、誰かと思つたら後藤の兄貴か……、又「誰かと思はんでも乃公だ、又猿飛も猿飛だ、傍に居ながら、ナセ止めぬ、佐「イヤ、之れは後藤、ナアニ止めたんだけれど、三好が聞かないのだもの……、三「アハ、アハ、後藤の兄貴怒る、貴様だぞ知つ

たら當りをつけるではなかつた、イヤ恐れ入つた、又「アハ、ハ、ハ、ハ、夫れは宜  
 いが相變らす元氣な坊主だ、何處へ行く、佐之より西國漫遊に出掛けるの  
 だ、又「フン、夫れは宜い都合だ、ヨク暴れて来い……」二人も後藤又兵衛に  
 かゝつては下馬だ、又「實は乃公も主君に暇をくれて飛び出したのだ、三三  
 ナニ、主君……スルト浪人にあつたのが、又「左様だ主人の氣に喰はふいから  
 浪人した、以前の後藤又兵衛ではふい、マア来い久々で此處で出會つたのだか  
 ら一杯飲まう」附近の料理屋に上つた、大体此の後藤又兵衛が主君甲斐守長  
 政とスレ／＼にあつた原因は關ヶ原戦争にあるのだ、慶長五年關ヶ原の合戦  
 には豊臣取立ての大名三十六頭といふものが、皆徳川へ加勢して石田を討つ事  
 に極つたのだ、此の時黒山甲斐守、始め五人の大名だ犬山の押へを命ぜられた  
 乗り込んで見るさ、犬山が開城して仕舞つて居る其處で岐阜へ加勢に行かうさ  
 いふので、五大名三万人の同勢が乗り込んだ、見るさ岐阜も落城して居る、其

處で福島左衛門太夫頭で、「何うしやう大垣に石田が居るから之より大  
 垣へ乗り込まう」宜からうさあつて三万人が、大垣へ乗り出した、スルト途中  
 に合渡川といふのがある、見るさ水が張つて居てナカ／＼渡れぬ、三万人は  
 川の手前に滞陣して水の減るのを待つ事にあつた、川に向ふには石田、小西、  
 島津の三大名が岐阜の加勢に行かうといふので歩つて来て居る、最う岐阜は落  
 ちて居る事を知らぬのだ、同じく合渡川の手前に来るさ徳川方の五大名が三  
 万人で陣取つて居る、此處で對陣にあつた、徳川方の五大名は川を渡つて、石  
 田方へ討ち入らうか何うかといふ評定を開いたが決しない、何んする相手には  
 島津兵庫頭といふ九州切つての猛將が居るから、横紙破りの福島も尻込みし  
 て進んで打ち入らうさ云はふい仕方か、何うしやう斯うしやうさ云つ  
 て居る、桑山左衛門尉といふ人が一つ川を渡つて宜いか悪いか、黒田の大器  
 量人後藤又兵衛に尋ねて見やうで、いかに云ひ出した、夫れが宜からうといふ

ので又兵衛を呼び出した、三万人のうかすら只一人呼出されたのは案いものだ  
 後藤は怯めず疎せず黒系絨の甲冑に白鳥毛の差物をして出て来た、此の時桑  
 山左衛門尉が、左「時に又兵衛 此方より川を渡つて戦つたものか、又先方  
 より渡つて来るのを待つが宜いか、其方の所存を承たまはりたい……」此の時  
 又兵衛ニツッコとして、又「恐れながら、夫れしきの事を私に御相談にふるには  
 及びますまい、其の譯如何さあれば大山は開城、岐阜は落城、然るに何事もあ  
 く日を過して居りまするは、甚だ意苦地のふい事かさ存じまする、此れしきの  
 川は渡れぬ事ばございますまい、此の後藤又兵衛が一番渡りをして御覽に入  
 れまする」成程夫れに相違ない、評議一決してソレ渡るさふつた時、後藤又兵  
 衛は一番渡りの約束があるから、真先に川に飛び込んだ、石田方の勇士松田十  
 太夫、齋藤權左衛門は夫れぞ知つて、防戦に勤めた、又兵衛は一通りでは不可  
 ないと思つたから甲をぬき、冑一つを被りて、ザンアと水中へ馬のり入れた、

遙に此の体を見た松田十太夫は又兵衛を覗打ちに打つた、又兵衛打たれた振  
 りして馬より落ち河底を潜つて、不意に近より、松田十太夫を突き伏せた、又  
 兵衛は素早く十太夫の背を取つて被り自分の冑を槍の穂先にかけて進んだ、齋  
 藤權左衛門は松田十太夫が後藤又兵衛の首を揚げて歸つたものと思つて、油  
 をして、岸に立ち、權ヤア松田ヨクやつた手柄……」云ひつゝ其の手を  
 取つて引揚げやうとする處を、又兵衛不意に躍り上つて、一突きに空き伏せた  
 又「ヤア……後藤又兵衛合渡川の一番渡り……」と呼び立て……突つ込ん  
 だ、之れが爲めに流石の島津勢も破れ立つて大阪城へ逃げ込んだのだ、戦終  
 つて後、黒田甲斐守長政は又兵衛に向つて、長「又兵衛、合渡川合戦の時に  
 其方はナセ黒田甲斐守長政の家來齋藤又兵衛と名乗らぬ、唯後藤又兵衛一  
 番渡り云つて主人の名を云はないのは、之れ主人を軽んじた所業ではないか  
 何うだ……」詰問した、此の時又兵衛ニツッコ笑つて、又「恐れながら我が君



小量な事を仰しやるふ、後藤又兵衛といへば黒田の家來、黒田といへば家來に  
 後藤のある事は、三才の小兒でも存じて居ります。激戦最中、黒田甲斐守長政  
 の家來後藤又兵衛基次ふぞと、名乗つて居る暇がございませぬ」之れは尤も  
 話だから、長政公も閉口した。處が此の關ヶ原の合戦で豊前中津十二万石で  
 あつたのが、一躍して黒田家は四十万石の加増で筑前福岡五十二万石とあつ  
 た。

○弓矢を以つて掛合申す

其の時、又兵衛は同國小隈の城で三刀石貫つて、朝鮮征伐の時長政は、又  
 兵衛に大分助けられた事がある、其の時幾等立身しても十分の一は必らず與  
 へるぞよと云つた事がある、ダカラ五十二万石にふれば、五万二千石呉れば  
 ならぬ譯だが、又兵衛高の事は何にも云はふのみならず不平がましき顔もし

ふい、處が此の小隈といふ處は、筑前豊前の境に居るので、黒田甲斐  
 守隣國の細川越中守大の不和だ、其の中間にあるが小隈、細川が万一  
 押しよせて來たら、後藤又兵衛に喰いこめさせやうといふ考へで小隈の城將さ  
 したのだ、此の合渡川以來何うも甲斐守と後藤又兵衛の交情が巧く行かぬ、  
 ダン／＼折合が悪くふる、處へ差して一日又兵衛小隈の城で酒をのんで居るさ  
 悴の又一郎が泣きながら、福岡の城から歸つて來た、又兵衛は何を泣くか  
 聞くさ、又一郎が御父上、私に鼓を教へて下さるやう、鼓を知つて居りませぬと、  
 福岡の城申では小供に迄馬鹿にされます、今日御前御酒宴が始まりまして、  
 皆が謠曲をうたはれました、殿様は又一郎、鼓を打てと仰せにふりましたゆへ  
 私は鼓を存じませぬと申しましたスルト後藤の悴でありながら、鼓一つ打つ事  
 が出来いかさお叱りにふり、私は満座の中で耻をかきました、鼓を覺へませぬ  
 と福岡の城では御奉公が出来ませぬ、何うか教へて下さいませ……」之れを

聞く後藤は烈火の如く憤り、又「又兵衛の悴であるから、文武の兩道を知らんさいふふらば、耻にもふらうが、遊戯の鼓を打たんから、又兵衛の悴は云へぬさは怪しからん話だ、知らんさ云つたのは尤だ、小鼓ふんぞアレは遊戯だ決して福岡へ行くに及ばん、止せッ……」大層怒つた、斯んる譯だから何うしても又兵衛は主君甲斐守と意見が合はぬ、互いに確執の結果、小隈の城を立ちのく事になつた、之れより先き又兵衛は悴又一郎の事について福岡城中へ乗り込み、焼火箸を握らされた話には有名なものだ、又兵衛も意地にあつたから眞晝中五百人の家來を従へ行列を立て、小隈の城を立ちのいた途中で家來には夫々暇を與へ、甲斐守と尤も仲の悪い、豊前小倉の細川家へ歩つて来た又「私は、黒田の浪人後藤又兵衛でござる、お抱へ下さい」細川越中守喜こんで、元々不和と聞いて居たが、イヨ／＼破裂したか喜んで後藤を五万石で抱へた、其の時細川は三十三万石、五万石といへば少し高いやうだが、之れ

は後藤一人にやる譯では無い、又兵衛の家來には豪傑が澤山居る、第一に片山勘兵衛夫から山田幸左衛門、石田若狭、曾我兵太夫、近藤幸作、梶田與茂右衛門なぞと云つて何處へ出しても二千石三千石の腕前のある人物ばかり、夫れゆへ五万石で抱へた、細川越中守之れで最う黒田に恐るゝものではないと雀躍りして喜んば、スルト黒田家に早くも此の事が聞へて八虎の一人毛里太平がノシ／＼細川へ乗り込んで来た、太「某は、黒田甲斐守の家來、毛里太平でござる、後藤又兵衛義は主人が永の暇を出した譯ではござらん自分勝手に小隈の城を立ちのきましたもの、何卒黒田へお戻し下さるやう……」細川越中守イッカナ聞も無い、越「假令如何なる理由あるとも、一旦富家へ抱へた以上、今更黒田へ返へず譯に参らん、太「宜しい、然らば弓矢を以つてお掛合申す、越「面白い黒田に後藤を受取る弓矢があらば、此方には後藤を渡さぬといふ弓矢がある、何時でも参れ、少しも恐れ無い、太「委細承知いたした、何れ戰場

にて御面會仕まつる……」母里太平、ブン／＼怒つて歸る、之れを聞いて甲斐守烈火の如く憤り、咄嗟弓矢の争ひにも及ばんとする處を大御所家康之れを聞いて家「ソレは怪しからん、後藤又兵衛一人の爲に、兩家が干戈を動かすは宜しくまい、又兵衛一人扶持せなければ宜い譯だ、速に暇を與へるやう」誠める、細川も仕方がない、細「時に又兵衛、殘念だが駿府大御所公の仰せに脊く譯に參らぬから、其方には暇を出す、時に後藤、其方が居なければ、黒田の家來は最う恐るべきものはない、今日黒田と細川と戦つたら、何方が勝つと思ふ、時に又兵衛が、又「お廢しふさいませ、迎も勝つ目は御當家にごさいません、國の大小も申し、兵の多少も申し高の高下も申し、黒田に勝つ見込みはございませぬ、夫でも先手鐵砲せり合ひの時に、十分敵を皆殺にいたせば、或は勝つるかも知りませぬ、大体甲斐守は鐵砲せり合ひをして居るうちに、何時も自身が先手に入り込み、兵卒を指揮して居るばかりでなく、自分が鐵砲を取つ

て敵の番頭を撰み打ちにして居ります、恐ろしい大將でござる、夫れゆへ鐵砲せり合ひの時に打ち取れば兎に角、然らざれば到底勝つ目はございませぬからお廢し遊ばせ……」又兵衛、少しも黒田甲斐守の悪口を云はない賞めてばかり居る、此處に又兵衛の價値はあるのだ、又兵衛又もや細川家を浪人して加能越三ヶ國の大守前田大納言利家に七万石で抱へられた、後藤は喜び「家來一同をつれ金澤へ乗り込んだ、利家は心中で、黒田も越川だからグズ／＼云ふのだらうが、此方ならばヨモヤ掛合には參るまいと思つて居るさ、又もやヌツと母里太平が歩つて來た、太「又兵衛お戻し下さい、若しお戻しがなければ、弓矢を以つて受取り申さん……」利家公も仕方がないから、家康公に相談すると又兵衛一人扶持せなければ宜いのだ……」又兵衛又もや七万石を取り損れて浪人だ、ソロ／＼前田家を出て、家來達が△「御主人、此の先は何うございませぬ」といふさ、又「心配すな、又兵衛が浪人して居るのは、名玉を土中に埋め

て置くやうなものだ、今に又兵衛幸運の時節が来るわい、心配無用だ……」京都へ出て来るさ、越前福井の城主結城三河守秀康公が、七万五千石に抱かへやうと申込んだ、此れは越前家の總本家、駿府大御所の總領だからシヤンとして居る。

○乃公に尻を拭はせるのか

後藤又兵衛初め家來一同喜んだ、早速三河守に抱へられた、後藤の家來共は、**□**成程御主人は豪いものだ、黒田で三万石、細川で五万石、加賀で七万石、當家へ来て七万五千石、陪臣で七万五千石取るものは、今天下に一人もない、下手な大名でも及ばないさ、大した出世を喜んだ、處が又もや黒田から毛里太平が乗り込んで来た、太「後藤又兵衛をお返し下さい、然らざれば弓矢を以つて受取りに参る……」三河守豪氣活潑の荒大名だから使者を一旦追

ひ返したが、家康公の意見で己を得ず暇にあつた、又兵衛又々浪人する、細川では五万石、之れが僅か二十日ばかり、藤高は一ヶ年分だが日割勘定さんかにはされない、又兵衛二十日、五万石分の金を貰つて出た、前田家でも其の通り越前家でも同様、半年ばかりの間に大した儲けをやつて居るから當分食ふに困るやうな事はない、又「ア、否だ、何處へ行つても掛合に來られて五月蠅いから最う何處へも陪臣奉公はしない」と決心して、又「何うせ、其のうち大阪と關東と不和にあるから、若し戰場が始まつたら、大阪へ入城して太閤の恩に報じ黒田甲斐守を向ふに廻して、目に物見せてくれやうさ、有金は悉く家來に分配して、各地に潜ませ、其の身は一文あしとあつて、大阪へ出て来たのだ、又兵衛は猿飛佐助と三好清海入道へ身の上話をした、佐「フム、流石は後藤の兄貴だ七万石で抱へやうと申込んで来る處が豪いよ、此方から押し賣りしさいでも宜いのだ、三「ウム、感心、又「アツハ、之れ位い

に感心してくれるから、乃公は之から一つ關東大阪が合戦さる迄何處かで暢氣に遊んで居る積りだ、サア飲め〜遠慮するな、三「ヤア、馳走にふつて濟まん、又「マア、禮をいふなよ、お互いの中で他人行儀さ……サア飲め〜四海兄弟だ……」妙事ないながらグイ〜遣る、猿飛と三好も負けず劣らず飲む、又「ア、酔った〜、暫らく寝て行かう、佐「ウム、大分酩酊した……」三人は鱈腹飲んで喰つて、コロリ横になり、グウ〜と鼾の聲高く寝込んだ、暫くすると、又兵衛不圖目を覺して、ニタリ笑つたと思ふさ、横手に寢て居る三好清海、入道の懷中へ手を突つ込んでズル〜と財布を取り出し又「コリヤ、婦女勘定するぞ……ウム有る〜、五六十兩持つて居る、皆分捕るの氣の毒だから三十兩無斷拜借しやう……」チャンと勘定濟して女にも夫々纏頭をくれてやり又「乃公は、歸るから起きたら一足先に失禮したさ云つてくれ……」云ひ捨て、アと飛び出した間もなく二人は目を覺した、三「ア

ア寝た〜オヤツ後藤は何うした、佐「ウム、乃公も今日を覺したのだ、少〜も知らぬ、三「コリヤ女中、連の男は何うした、女「ハイ、先刻お歸りに来ました、佐「ウム、歸つたかハテ彼奴金がいから威張つた手前体裁が悪いと思つて一足先に歸つたのだよ、三「ウム、左様かも知れない、存外氣が少さいではいか金かないさ云つたら、少々貸してやるものさ……女中勘定をするぞ、女「ハイ〜、最う頂きました、佐「ナニ、貰つたか、女「ハイ、妾共にも返もお心づけを下さいます……三「フム、腐つても鯛だ、感心〜、流石は後藤だよ……、佐「ウム存外膽が小さい事はよいよ、三「左様だ〜……待て〜乃公も一つ纏頭をくれてやる……オヤツ……ハテナ……、佐「何うした三好……三「此奴は可笑しい……ヤツ失策つた、佐「何が失策つたのだ三「ウム一杯引かけられた、此の財布に六十兩あつたのだ、夫れに二十兩はどしかない、乃公の金を勝手に引出して勘定をして置いて、其の上三十兩位い

せしめたものだ、佐「アツハ、存外膽の小さいのが飛んだ事をやる、アツハ、ハ、ハ、ハ、三「ヤイ猿飛、笑い處じやアあいぞ、大体貴様は何んだ、何が商賣佐乃公は忍術使いだ、三「ソレ見る、忍術使いの癖に、夫れ位いが分らふいか、馬鹿野郎……、佐「アツハ、怒つたつて仕様がふい乃公もグツスリ寝て居たのだから、知らふい、幾等忍術使いで氣を許して睡入つたのだから知る氣遣いはふいよ、待て……乃公の分は……イヤ乃公のは無事だ、三好氣の毒だ、大体貴様が宜くふい何故胸巻へ入れて居ふい、三「其の胸巻が古くあつたから新らしく拵へやうと思つて居たのだ、佐「マア諦める、他のものじやアふい、相手は後藤又兵衛だ、我々も同じ仲間だから、左様悪い氣持もしないだらう、三「ウム、夫れも左様だ金は惜しくふいが、巧く瞞着かされたのが癪だ、佐「マア宜い首途に金を捲き上げられて、貴様は餘程お自出度いふ、三「冗談じやアふいよ、人を馬鹿にして居やアがる……」三好清海入道アツ

怒る、二人は料理屋を出た八軒屋に宿を取り五六日逗留して處々を見物、夫より中國地を下り乗り込んで来たのが播州明石だ、路傍の茶店に腕かけ休んで居るさ、下に……さ下座觸れ制止の聲、三「オヤツ、下に……さ云つてるぞ佐「ウム、何處の大名だらうオ、源氏車は福島だ……、三「ナニ、福島關ヶ原合戦で藝州廣島四十二万石にあつた市松の野郎か、面白い、後藤に金を取られたから、一番取り返してやらう、佐「アハ、江戸の仇を長崎で討つのか、三「ナニ、相手は豊臣七將の一人だ、大名中での横紙破りと呼ばれた荒大名、乃公は十勇士中での横紙破り、一番横紙破り同志が打つ附かつてやらう、眞逆の時には貴様が奥の手だ、宜いか、佐「オヤ、乃公に尻を拭はせるのか、マア宜い、福島と聞いて此の儘無事に通したさあつては、我々の價値が下る、ウンと遣れ、大きく無心を吹つかける……」合點だ清海入道手足懸引いて行列來れと待ち受ける。

○嫌に笑つて居やあがる

處へ差して福島左衛門太夫正則、行列殿めしく、下に／＼と歩つて来る  
 三好清海入道はヌツと大道の真中に現はれ、仁王立ちさふつて居るスルト先  
 供は早く見付けて、バラ／＼と、供「ヤイ、下に居らぬか……、三「アツ  
 ハ、構はん行け、供「黙れツ、其方が構はんでも此方が構ふ、下に居  
 れ、三「下に居るに及ばん行け、供「行く譯に行かん、下に居らぬか三「  
 下に居らんぞ、供「下に居らんとは不埒な奴、三「不埒でも何でも下に居らん  
 供「此奴、狂人に違ふ……」バラ／＼と三好清海入道の側により、手を  
 かけんとする、清海入道手をかけて貰いたくつて堪らぬのだ、反對に三「  
 エツ無禮者ツ……」肩に擔いでドシン、投げつけるぞ、武「アサ、己れ福島  
 左衛門太夫正則公のお供先へ狼籍を働く不敵者……、三「何を吐す、市松

か何んだ、此の野郎……我々は元信州上田の城主眞田左衛門尉幸村の郎  
 黨に左るものありと知られたる三好清海入道だ、乃公の尾にはまだ豪い奴が  
 控へて居るぞ猿飛佐助といふ忍術使いはアノ男だ、愚圖／＼吐す奥の手を  
 出すぞ……」清海入道威張つて居る折柄先供が騒がしいから、ドン／＼  
 騙けつけて来た供頭の大橋茂左衛門之れを聞くと夫れへヌツと現はれ、大「  
 ヤイ三好貴様何んといふ事をするのだ、三「イヨ、大橋の茂右衛門が暫らく  
 ……、大「暫らくもふいものだ、貴様のやうに亂暴な奴はあ、大名の行列を  
 遮る奴があるか、三「アツハ、マア恐るな、此處にあるんだ、三好清  
 海入道が福島公の行列を遮つて一番無心を吹つかけるのだ、大「何を吐す  
 無心を吹かける奴が暗唾腰にゐる奴があるか、三「喧ましくいふな、アレを貴  
 様誰だと思ふ……」指さす方を大橋茂右衛門ヨク／＼見ると、茶店の床机に猿  
 飛佐助が腰かけて居る、大「ヤ、ツ、彼奴は忍術使いの猿飛じやアあいか、

三「左様だ、愚圖／＼云つたらチヨイ／＼奥の手を出させるから、左様思へ、  
 ……」之には大橋茂右衛門も弱つた、之れ迄に度々猿飛佐助には弱らされて  
 居る事があるのだから、大「ヤイ猿飛、ニタリ／＼嫌に笑つて居やアがるが、  
 貴様鼻をヒコツカせて威張るふよ、佐「アツハ、大橋暫らく、一つ福島に  
 頼んでくれ、我々は素浪人の主人を持つて居るお蔭で、素漢貧だ、チ卜路金を  
 拜借したい、喧ましくいふさ、三好に暴れさせて、尻は乃公が引受けるのだ  
 ナア分つたか大橋、四十二万石の大守が、高の知れた我々に行列を崩されては  
 第一世間へ對して、正則公の睨みが利くまい、大名中での横紙破りさいはれた  
 藝州廣島の城主、元の豊臣七將の隨一人、四十二万石福島左衛門太夫正則  
 公の名が潰れる…、大「オイ／＼、嫌に貴様上だり下たりするじやアふいか  
 仕方がない、乃公が一つ申上げて見やう…」大橋茂右衛門此の事を正則公に  
 言上した、スルト正則公乗物より立ち出で、左右に吉村又左衛門、大崎支

蕃等を従へ、正「ヤア、夫れに見へたは眞田の郎黨三好清海入道に猿飛佐  
 助であるか、三「之れは／＼、市松公には暫らく御拜顔を得ませぬ、正「コリ  
 ヤ清海入道、市松公とは何んだ、貴様等の云ふ事は、一々予を馬鹿にいたし  
 て居る、三「イヤ、お氣に障りましたら御免下さいまするやう、實は桶屋の市  
 松公と申し上げたくつて堪らないのでござるが、桶屋だけは餘りたと思つて、  
 ……」ベラ／＼素性を口喋り出す、幾等横紙破りの正則公も、澤山の家來の  
 前で、素性をさらけ出されては堪らない、正「ア、コリヤ、最う宜い／＼、ヤ  
 ヲ茂左衛門、手許金のうちより二百兩を與へよ…」二人は嫌味を云つて到頭  
 二百兩をせしめた行列は行つて仕舞ふ、二人はホク／＼顔だ、三「アツハ、  
 ハ猿飛何うだ、當分飲めるぞ、佐「ウ、無心は之から大名に吹つかける事に  
 しまう、大分話が早分りするわい、三「左様だ／＼、サア行かう／＼…」  
 二人は上機嫌、明石を立つて人丸神社へ參詣、夫よりドン／＼加古川、姫路



の城下も何なく通り龍野へ歩つて来て、二人は茶店で正午飯を喰つて居るさ、旅装束の一人の男が入り込んで来た、男「オイ爺さん、酒を一つくんねへ、爺「へい〜……」酒肴を出させて遣つて居る、男「時に爺さん、此の龍野の先に大きい沼があるさいふじやアないか、爺「ハイ、ございます、男「其の沼へ化物が出るさいふが左様か、爺「イエ、化物ではございませんが、何でも水窟が居りますさうで其の沼へ落ちやうものなら、水窟に喰はれるさ云つて居たのでございませうが、夫れが化物じやアあつて、人間ださうで、男「ハ、ア、人間が何故左様な事をするんだい、爺「イエアノ沼は禁断の場處でございまして、鰻が澤山居ります、其の鰻は御領主様に差上げ夫から御家中へお下げ渡しにゐるんでございまして、逆も我々の口へは這入りませぬ、其の鰻が欲しいので、何處かの男が歩つて来て盗るんださうにございませうが、ナカ〜何うして一度も捕まりませぬ、大方其の鰻を捕つて何處かへ賣るんでせう一三好清海入

道水窟と聞いては黙つて居る、三「コリヤ〜亭主、イヨ〜水窟が出るのか……」尋れて居るうちに件の男は、男「爺さん、勘定だよ……」幾等かの金を投げ出し、男「御免なさい〜」と清海入道にドンと突き當りながら、バツと表へ飛び出した、三「ヤイ、慌てもの……アツ早い奴だ、最う何處かへ行つて仕舞つた、スルト猿飛佐助は、佐「オイ〜三好、貴様懐中を檢べて見ろ……」云はれてヒイと手を突つ込んで見ると紙入がない、三「失策つた、紙入を取られた、佐「ソレ見る彼奴人相の悪い奴だと思つた、三「思つたじやアないよ、何ぞ貴様最初から云はる、汝ツ逃してゐるものか、彼の紙入には福島公より貰つた百兩が入つて居るのだ……」ドン〜後を追ひかける、件の男は一生命懸命三里ばかり駆け出して来て、最う大丈夫と思つたか路傍の松の根方に腰打ちかけ、紙入より金取り出して調べながら、男「アツハ、茶店の老翁と共謀にあつて沼の水窟とか鰻泥棒とか云つて、油斷をさせ、マンマと鬻

つた此の紙入、百兩餘り入つて居やアがるさは有難い、不時の儲けだ、之れだけありやア當分樂だ茶店の老爺に五兩か八兩やつて後は乃公の丸儲けだ、エツへい、い、い、い、天道様はマダ見捨てねへ、斯ういふ福を授けておくんふさる……夢中で錢勘定をして居る、斯は如何に、紙入がフワリく、空中へ舞ひ上る、男「アツ、大變だ、百兩餘りも入つて居る重い紙入が空へ舞い上るさは、……オーヤオヤく……」紙入を取らうと、兩手を延してキリく舞をして居る折柄、頭の上の木の上に、ヌツと姿を現はした猿飛佐助だ、舞ひ上つた紙入を左手に受け止め、空を仰いで口を開けて居る男の口中へ、松かさの青い奴をエイツ、投げ込んだから堪らぬ、男「アツ、ブルくく……」悲鳴と共に平倒り込んだ。

○天に口なし人を以つて云はしむ

處へ差してドン／＼飛んで来た三好清海入道、倒れた男を見るより、三「サア、此の野郎だ、汝……」引摺んで引起しホカーン、打ン殴られて男はアツと驚いたが、口の中へ松かさを投げ込まれて居るから物を云ふ事が出来なウム／＼唸つて居る、三「此の野郎、紙入は何處へやつた、サア出せ……」首筋摺んでグイと宙に提げ、懷中へ手を突つ込み、胴巻をズル／＼引出して見ると金が五六十兩あるばかりで、自分の取られた紙入はない、三「オヤツ、此奴紙入は隠したな……、男「ウム／＼……ア、ア……」啞のやうに空を指さして居る、三好清海入道ヒヨイと見上げる、猿飛佐助が紙入片手ニコ／＼笑つて居る、三「ヤヤツ、猿飛早や来て居るのか、佐「知れた事だ、貴様では間に合はぬから乃公は奥の手出して飛び出したのだ、三「ウー、シテ紙入は取り返してくれたか、佐「大丈夫、此處にある、三「マア、降りて来いよ、猿飛佐助はドツと飛び降りた、佐「三好、斯様くだよ、三「エツ、茶店の老

爺共謀さふつて遣つたのか、佐「左様だ、天に口おく人を以つて云はしむ、此奴が獨り言を云つて居た、三「フ、ム太い野郎だじやア此奴を沼の中へ投り込んでやらうヤイ貴様は何んさいふものだ、男「ウーム、アアア〜」口を指さして居る、佐「アツハ、乃公が松かさを投げ込んでやつたのだ、三「ハ、ア、夫れで物が云はれぬのだ、ヨシ乃公が出してやる〜」漸々取り出した、スルト男はブル〜震へながら、男「オ、お助け〜、三「黙れ少貴様を助けてゐるものか、サア名前を云へ、男「ワ、私は胡麻の蠅の金次さいふもので〜、三「ハ、ア、胡麻の蠅の金次、ヨシ分つた、末期の水は勝手に喰へッ〜」ドアーン、側への沼の中へ眞逆様に投げ込んだ、金次はブル〜アア〜アア〜浮きつ沈みつ藻掻いて居る、三「オ、猿飛、紙入取られた利子に、此の胴巻を捲き上げてやつたから差引き徳だ、佐「オ、風が悪い事をするよ胡麻の蠅の上前切れる奴があるものか、三「處が此處に一人あ

る、乃公はチカ〜返さんよ、シテ茶店の老爺も共謀だとは誰か云つた、佐「彼奴が云つて居た、三「ヨ、シ、一番引返して懲してやらう、佐「オ、廢せ〜、アンが年寄りを〜、三「夫れが不可ないのだ、年寄の癖に悪い事をすると以ての外だ、ウンと遣付けぬ人民が迷惑する、サア猿飛来い、否、此處で待つて居れ〜」三「好清海、入道ドシ〜引返し、以前の茶店へ戻つて来た、三「ヤイ亭主、イヤサ老爺、之れへ出る、老「ヘエー、三「ヘエじやア、貴様は梅干の癖に、胡麻の蠅の提灯持をやつて泥の水甕だの何のぞ宜い加減な事を吐して、胡麻の蠅の金次の奴共謀にふつて、宜い儲けを遣つて居るぞは憎くき奴、乃公は天下の豪傑三好清海入道さいふものだ、捨り潰すから左様思へ〜」突然猿臂を伸して胸倉アツと引摺んだ、喜「アツ失儀だ、ジャア金次の野郎仕り損つたふ〜、三「知れた事を云へヤイ梅干、貴様は一人か子供はふいか、喜「ウームヒ、獨りだ〜此ン畜生、放しやアかれ、

三ナニ一人、ヨシ一人から叩き潰しても泣く奴は無い、却つて喜ぶ者が澤山あるかも知れない斯うしてやらうと、エイと一振り振ると老爺五六間向ふへ投げ出されて平倒り込んだ、清海入道バラリ双肌脱いたと思ふと、家の柱に抱きつき、三「エイ、ウーン……」家と云つても草葺きの小屋だから、メリ／＼バラ／＼揺れ出した、老爺は吃驚、痛さも忘れて起き上り武者振りついて来る奴を、又もや蹴飛ばし、清海入道到頭小屋を潰して仕舞つた、三「アハハ、之れで餓飲も下つた、オーイ猿飛／＼……」云つて居る處へ一人の武士がノソ／＼通りかゝつた、此の体を見るに清海入道を亂暴者と思つたか、武ヤイ坊主、家を押潰すとは何事だ、三「ナニ、貴様の厄介にはならぬ乃公に考へがあつて押し潰したのだ、愚圖／＼いふる……」遣り返へす武士は烈火の如く怒つた、武「ウヌ、不埒な奴、察する處汝は野武士の類に違いない、イデヤ一番乃公が手玉に取つてやらう」之れを聞いて清海入道赫々目を剝

た、三「ヤイ手玉に取る、猪虎才も事を吐すサア来い、乃公が捻り潰してやるふたり二人はガツキと引組んだ、エイオー、と捻じ合つて居たが、武士もナカ／＼剛のものだ、力足踏み鳴らし、金剛力を出して捻じ合い押し合い、此處一生懸命にの大立廻りに及んで居る、處へブラ／＼出て来たのが猿飛佐助だ、佐「オヤツ三好か到頭茶店を叩き潰して仕舞つた、ヤツ遣つてるか、此奴は面白い……オヤ／＼武士もナカ／＼強いドハテナ……オ、彼奴花房助兵衛では無いか清海入道はまた助兵衛を知らぬい見へる、此奴は面白い、一番何方が勝つか見物しやう……」暢氣者の猿飛佐助、潰れた小屋の屋根に腰かけてニコ／＼笑つて見物する、此方では三好清海入道と花房助兵衛、一生懸命捻じ合つて居たが、清海入道の力や優りけん、漸やく捻じ伏せて、三「サア何うだ、降参しろ、貴様はチヨイと話せる代物だ、花「ウーム、降参ぶとは汚らばしいウーム／＼……」刎れ返さうとするが、ナカ／＼清海入道は動かない、拳骨

振り上げホカ／＼助兵衛を打ン殴つて居る。

○乃公の拳骨は天下一品だ

殴られた位いで凹む花房助兵衛では無い、押へつけられた位いで降参する助兵衛では無い、此の花房助兵衛は、無類の利かぬ氣の者で嘗て小田原陣の時、出陣の諸將が武者押さやつて太閤殿下の尊覽に備へた、此の時殿下は酒を飲みつゝ武者押を見物して居たが少しく酔も發して眠くあつたさ見へコクリ／＼さやつて居た、處へ丁度武者押姿勇ましく繰り出して來たのが備前岡山宇喜多中納言秀家の家來で陣代を勤めて居る花房助兵衛だ、助兵衛ヒヨイと見ると憤りした、助「己れ不埒、我々が君に一命を捧げ之れ迄出陣して殿下の徒然を慰さめし爲め武者押を尊覽に供して居るに、何事を殿下は酔つ押つて居眠りさば怪しからんと烈火の如く憤つた花房助兵衛、ツカ／＼殿下の側に馬を進め、

棧敷の丸太に倚れて、コツリ／＼と遣つて居る殿下の横面目掛け、エイツ、ホカ／＼、嫌さいふ程拳骨喰はした、ヤツサモツモの末、流石は殿下秀吉公、花房助兵衛の勇氣を賞美の余り、大刀一口を與へる、助兵衛殿下を殴つて手打ちと思つて居た奴が、大刀を拜領したので大威張り、助「ヤイ／＼貴様等もチト乃公を日習へ、殿下を殴つて、太刀を拜領したものは天下に一人も無いぞ」と爾來助兵衛友人に出合つて、之れを自慢話の一つにして居る、斯んが無類の御性者だが宇喜多中納言秀家に對しては忠義無類、關ヶ原合戦の時も、西軍の爲に無双の働振を見せたが、如何せん時利あらず主家は滅亡、夫より浪人して天下を漫遊し居るのだ、斯んが男でも三好清海入道の亂暴にかゝつては一枚下だ、到頭清海入道の爲に押伏せられ、カム／＼唸つて居る、處へ猿飛佐助はヌツと現はれた、佐「オイ三好廢せ／＼其奴は貴様宇喜多の家來花房助兵衛だぞ、三「エツ、此奴が花房助兵衛か、フムジャア廢してやらう、ヤ

イ助兵衛、貴様は僥倖者だ、真田の郎黨三好清海、入道が捨り潰す積りであつたが許してやる、花「ナニイ真田の郎黨……オヤ貴様は誰かと思つたら忍術使いの猿飛佐助ではあいか、佐「アハ、ハ、誰かと思はんでも猿飛佐助だ、花「ヤイ何が可笑しい、貴様も人の悪い奴だ、サン／＼疲れさせて置いて揚句の末に引さめるふんで……怪しからん、佐「アツハ、ハ、マア嘸くも、之れは真田の郎黨で名題の横紙破り三好清海、入道ふんだ、花「ウム、此奴が三好か、イヤ大分強いと思つた、ヤイ三好、乃公は太閤殿下の横面を抛つて大刀を拜領した花房助兵衛といふ天下の豪傑だぞ、見知つておけ、三「アハ、ハ、ボン／＼いふなよ貴様も主に離れて素浪人とは氣の毒だ、最初から助兵衛と云やア、手酷い目に遭せるのではあかつた、花「何を吐す、真劍にやつたら貴様等に負ける乃公ではあいわい處で一体家を押し潰すとは余り亂暴であいか、三「イヤ、決して亂暴ではあいか、斯様／＼だ、花「ウム、夫れから怒る筈、スルト此の老

筆も胡蝶の繩の仲間だ……ヤイ此の野郎……」ボカーン、老爺は清海入道に投げられて腰を抜かし、蠢いて居る處をボカーンと遣られて、キヤツ其の儘死即して仕舞つた、喜「アハ、ハ、乃公の拳骨は天下一品だ、到頭老惚は死んだ、處が猿飛、丁度宜い處で出會つた、チト金を貸せ、佐「オヤ／＼、金の無心か……、花「オヤ／＼さは何んだ、貴様等は眞逆の時には忍術といふ奥の手を出すから宜いが、乃公は何うも夫れを知らぬから金儲けが乏しい、チト貸せ……」猿飛佐助は三十兩出して與へた、佐「一杯飲みたいのだが、此の邊に氣の利いた料理店はないらしい何れ又後日面會してリンと遣る事にしやう」と双方東西に引別れた、猿飛と三好清海、入道は何なく備前岡山の城下へ乗り込んで来た、此處は池田半左衛門輝政が、關ヶ原戰爭以前迄は播州姫路の城主であつたが關ヶ原に徳川に加増した爲め、宇喜多滅亡の後、岡山の城主に取り立てられ、三十二万石を領する事にあつたのだ二人は城下へ歩つて

來て兒島屋勘助といふ宿へ泊つた、三「オイ猿飛、此處も無事には通られぬい城下だぞ、佐ウム……左様だ豊臣恩顧譜代の大名でありながら徳川に媚び阿つて、鼻息を窺つて居るゑんて意苦地のい大名だ、一つ泡吹かせて遣らう」  
 二人に覗かれた大名こそ迷惑だ、逆も無事では濟まぬ、二人は毎日城下をアラ／＼歩き廻つて居る、大体此の岡山の城は鳥城と云つて天正年間宇喜多秀家の父直家が修築して居城としたものだ、宇喜多家が滅びると、直に小早川家が引移つて居たが今は池田輝政が封せられて城主さふつて居るのだ、佐「オイ三好、此の池田輝政といふ大將はナカ／＼武強つた大名だから家來にも随分豪傑があるに違ひない、一つ豪傑を誘ひ出して腕を一々試べてやらうではないか、三「面白からう然し何ういふ風にする、佐「他じやアない、二人で岡山の城下へ道場を開くのだ、スルト池田家の勇士が聞きつけて試合に来る、勿論最初若武士が来るに違ひないから一々引捕へて、脊中へ大きい灸を搦へ

て追ひ返す、スルト此の事を聞きつけてダン／＼強い奴が来る、賭勝負をして打ん殴るのだ、三「アハ、其奴は面白い、ヤレ／＼……」宿の亭主に話して早速目貫の場處へ空家を借つた、手入れをして道場らしく拵へ、表へは大きい看板で以つて行いて「天下無敵流開祖、無敵勝之助」と墨黒々と書き流して出した。

○ウーム夫れには及ばぬ

一犬虚を吠へて万犬實を傳ふ早くも此の事が城下一圓の噂にあつた、城内の詰處では若武士共が、○「オイ山田、貴様見たか、山「何を見たか云ふのだ  
 ○「他じやアない本町の眞中へ以つて行つて、天下無敵流開祖、無敵勝之助  
 さいふ看板を掲げた奴があるだらう……、山「ウム見た／＼、○「見た／＼じやアない、何うも怪しからんではないか、何んか奴が知らぬが、當池田家に

人がふいかのやうに、馬鹿にして居やアがる、之れ此の儘に捨て置く時は池田家に武威強きに似たり……、〇「オーヤオヤ、大分難かしくなつたぜ、ダカラ何うするさいふのだ。〇「何うするもふい、我々が乗り込んで一撃の許に遣付け、表看板を買つて歸るのだ、山「ウ成程、宜からう」若武士共は直ちに雷同した、秋月紋太郎と山田鐵之助といふ二人の若武士が最初に乗り込んだ

二「頼まう……、〇「ドレ……」出て来たのが三好清海、入道だから堪らふい、二人をシロく見廻し、三「ナンダ、何の用だ、山「何の用ださは何んだ試合に來たのだ、三「ハ、ア他流試合に來たのか、此奴は有難い、道場へ通して試合つてやる以前に度胸試しさいふ事をやるのだ、人間は幾等武藝十八般を極めて居ても、度胸が第一だ、武藝を一つも知らなくつても度胸さへあらば夫れで宜いさしたものだ、大体戦場なぞでは、度胸の据つた奴が勝つ、貴様等も度胸があるかふいか、一つ取り調べてやる、之れへ上れ……」清海、入道表

門をピシヤリ締め切つて仕舞つた、二人は驚いた、甲「オヤ、度胸誠へまは一体何んふ事をするのだらう……」氣味が悪くあつた、何んしろ威勢よく乗り込んで來たもの、恐ろしい大きい坊主が出て來たので、少々怯付いて居る處へ、度胸試べさ來たから二人はイヨく魔誤付く、清海、入道、表門を締め切るさ、三「サア、之れで貴様等逃げる事も出來ないぞ觀念しろ、待て……奥へ入り込み、何か持ち出したと思ふさ大きい線香に火をつけ蓬草を澤山握つて居る、山「オヤ、線香と蓬草を一体何うするのだらう」ピク／＼して居る、三「サア尻を捲れ……、甲「ヘエ……、三「ヘエ……」じやアふい尻を捲れ……、灸を据へるのじや、乙「ウフ、冗談じやアない、人を馬鹿にして……」三「誰が馬鹿にした、之れが度胸試へた、貴様等に灸を据へて見て、痛いさ云つて泣く奴は立ち合ふ價値はふい、ナニ糞と我慢をする奴は道場へ通して試合はせ……」乃公は度胸試への人間だが、未だ、奥に無敵勝之助と云つて敗つた事



のふいさいふ大先生がチャンと控へて居るのだ、サア尻を捲れ、三馬鹿くしいきふんか掃へられて堪るものか……、三堪つても堪らんでも捲れ、此處は地獄道場だ、一度入り込んだら無事には出られぬのだ、観念しろ、甲「ウ……、此奴は大變だ、山田貴様先に捲れ、山「イヤ岡崎、貴様が先づ小手試べに……、岡「オイく満らぬ遠慮するさ……」二人は互いに争つて居る三「ヤイく先陣を争そふのさ勇ましいが、一寸遁れをやらうとは卑怯な奴だ、ジャア斯うしよう二人でチツチノホイをやれ、負けた奴が先だぞ……、岡「ウム、山田来い……」二人はチツチノホイをやつた、山田鐵之助が負けた三「サア貴様が負けた、尻を捲れ、山「ウム、斯んさ馬鹿くしい事はぬい……、不承無承に尻を捲る清海入道一握りの蓬草を尻の真中に据へつけ、夫れへ火を移した、三「ヤイ、貴様變な面をするさ、之れに堪へるやうな奴さ、大いに話せる代物だ……」大きい團扇を持つて来い、煽ぎ立てた、ダンく火は喰

入つて来る、山「アツ、ア、ア、ア……イタイく……」三好清海入道荒れるさ不可ないから、ウンと足で胴中を踏みつけて居たから、身動きも出来ない、山田鐵之助は悲鳴を揚げる、山「アツ、ア、ア、お助けく、尻が焼けるく……、測貴材は友達甲斐のふい奴だ、見て居るさ……アツ、ア、ア、ア……」三「アツ、ア、ア、ア……」三好清海入道は泣いて居る、之れは何んか奴でも我慢が出来ぬ、山田鐵之助半死半生にあつて悶へ苦しんで居る、三「サア、貴様は落弟く、貴様来い、岡「ウム、夫れには及ばぬ、最ふ試合は取り消した、三「貴様が取消しても、乃公の方は一旦申込まれて取消す事は出来ない、サア尻を捲れ……、岡崎源藏も夫れへ引すへられて尻を捲られた、一握りの艾草を据へて火を移した、バツバと煽ぎ立てる、岡「アツ……イタイく……」之れも半死半生さあつた、三「アハ、ア、之れ位いで吼面かしゃうでは、逆も無敵勝之助と試合ふ事は出来ぬぞ、歸れく……」首筋進んで高城の上からヤツと表へ投げ

出す、ドシーン〜、キヤツ、二人は惨々の目に遭され、試合い處の騒ぎでは  
 さい、四ツ這いにあつて逃げ歸る、三「アハ、宜い氣味だ、猿飛〜、見  
 たか、佐「アハ、余り酷い事をやるふよ、三「ナア、之れ位にしる  
 いさ續々出て来さいのだ、乃公が手古摺るやうな代物が来たら、貴様が奥の手  
 を出すのだ、面白い〜……」此方は大笑ひをして居るに引かへ、二人の奴は  
 這々の体で逃げ歸つた、城内の詰所へ入り込み、山「ウーム〜、岡「アイタ  
 ……、〇「オイ〜、山田に隣崎ではいか何うした〜、オヤ〜四ツ這い  
 にあつてるじやアさいか、岡「ウーム、腰が延びんだ、〇「何うした、症氣  
 か、山「違ふ〜、マア之れを見くれ〜、尻を捲つて見へると、〇「  
 オーヤオヤ、恐ろしく焼けてるぞ、一体何うした、岡「何うしたと期うしたも  
 懲々した、斯様〜だ、恐ろしい試合があつたものだ、乃公は之れ迄諸國漫  
 遊をして大分道場も廻つたが腰を据へて度胸を試べる道場は初めてだ、〇「

ナニ、灸を据へて度胸を試べる……ケ、怪しからん事をする奴だ、小供も悪戯  
 をしたのであるまいし、人を馬鹿にして居やアがる、ヨシ乃公が乗り込ん  
 で叩き潰してやる、ウーム、岡「オイ〜唸つた處で駄目だよ、廢した方が宜  
 い、「ケ、怪しからん事を云ふふ、灸位に回たれる乃公ではさいぞ、之で  
 も神蔭流の腕前だ、サア奥村来い、二人で出かけやう、奥「オ、云ふにや及  
 ぶ……」中尾團平と奥村次郎が乗り込んだ、伴「頼む〜……、三「イロー  
 又来た〜ドレ……、宜うこそお越し……、奥「ヨクは来さいぞ、他流試合  
 を申込むと、三「如何にも承知仕まつた、然し常道場の規則として、初めは度  
 胸試しをする事にあつて居る、夫れを承知なら立合つてくれる、伴「ナニ度胸  
 試し、ツヤア灸を据へるのか、三「其の通り、貴等ばヨク知つて居る、灸を  
 据へて夫れに堪へるやうな人間なら、道場へ通して試合つてやる、サア尻を捲  
 れ」表の戸を締めきつた、無理矢理引据へて尻を捲つて灸を据へる、二人はイ

タイく、這々の体で逃げ歸る。

○此奴も大分捲りッ振りが宜い

何人出て来てても灸を堪へるやうな奴は一人も無い、之れで荒膽を取り挫かれる  
来る時は力味返つて居るが歸る時は四ツ這いでポロ／＼泣いて居る、此の事が  
早くも池田家重役の耳に入つた、一家老池田大膳は安からぬ事に思い、池何  
うも怪しからん事である、何れのものとも分らない素浪人に灸を据へられ逃げ  
歸るさは以ての外、アイヤ須藤支蕃は居らぬか、支ハイ、御家老、御用でこ  
ざるか、池支蕃、斯様／＼である、其方打ち向つて、道場を叩き潰して參れ  
支ハイ、畏まりました、この須藤支蕃といふは池田家名題の豪傑で武藝十八  
般に渡り、若武士の總取締を勤めて居る人物だ、寶藏院流の管箱を得意  
して居るのだ、支蕃は手槍を提げ、ノシ／＼乗り込んで来た、支頼む／＼

：「之れを聞くぞ支關兼度胸試し役の三好清海入道は、三「オヤツ、今  
度は大分ドツシリした聲だ……ドレ……出て見ると、大きい男が手槍を提げ  
て睨んで居る、三「サア、大分粒が宜くあつて来た……何の用だ、支道場破  
りに来たのだ、乃公は池田家の豪傑須藤支蕃だ、無敵勝之助に取次げ、三「ハ  
ア、須藤支蕃といふ代物が、三「承知した、然し豫て知つて居るであらう、  
當道場は度胸を据へた上で試合をする事になつて居る、支「夫れも聞いた、  
サア灸を据へる……」クルリ尻を捲つた、三「オヤツ、此奴は大分捲りッ振りが  
宜い、氣に入つた、三「痛いさいな、支「ウーム、首が千切れても痛いさ  
は云はんで、早くしろ……」三「好清海入道一握りの蓬早を持ち出し、尻に据  
へバツバと煽ぎ立てる、支蕃は何の糞も我慢はして居るが、熱い事は此の上も  
無い、脊中一面が焼けて仕舞ふやうだ、支「ウーム、何をッ……ア、熱いさは  
云はんで、ウーム、三「オイ／＼、此奴はチヨイと話せるわい、感心／＼、貴

「勝は及第く、サア通れく……」五六十人も来た中で初めて須藤支番ばかりが通された、支番も餘程痛い見へ未だウムく唸つて居る、處へ猿飛佐助がヌツと現はれた、佐ヤア、度胸試しに及第した須藤支番といふは御身が、身共は當道場の主人無敵勝之助だ、イザ抜つてやる、然し前以つて云つて置くが當道場には規則がある、只試合つたばかりでは面白くはないから、賭勝負をする事にあつて居る、支「ナニ、賭勝負……左様な卑怯な……、佐「アツハ、何か卑怯だ、武藝勵みの爲の賭勝負、少しも不思議な事は無い、先づ最初から二十兩づゝ積む事にしやう……」規則云はれて須藤支番も仕方がない、幸ばい持ち合せがあるから二十兩積んだ、支「サア来い、アツマ……」槍をリウくさ扱いて居る、猿飛佐助は鐵扇片手に現はれた、佐「イザ参らう、今日が道場を開いて以來、初めての試合だ、ウンス来い、支「何を糞ツ……」ヤツと突つかつた、佐助はパンくさ打ち拂ふ、飛び込んで打てるのだが、ナカ

く打たない、宜い加減に扱つて居る、三好清海入道之れを見て、三「オイ猿飛……イヤ無敵勝之助、早く片付けて仕舞へ、面倒臭い、此の二十兩は此方へ貰つて置かう……」懐中へ捻じ込む、猿飛佐助十分惱まして置いてエイと飛び込んだと思ふと、バシーン、槍を叩き落して、手許に飛び込み、利腕揃んでエイツ、振り廻す、支番はアツと云ふ間もなく、道場の武者窓突き破つて往來へドシーン、キヤツ、腰を抜して喚いて居る、佐「アツハ……二十兩は此方のものだ、斯ういふお客が毎日二三人来てくれると直に又金持になるのだが……」三「アツハ……之れで一杯飲める……サア酒だ……」二人は酒のみ始める、翌朝にふる猿飛佐助は、板を削らせて來、「池田家豪傑須藤支番と試合い打ち勝つ」斯う書いて門前に掲げた、須藤支番は惨々の目に逢された上、耻の上塗をしたやうなものだ、若武士共は此の掲札を見る、イヨく騒ぎ立つた、池田家の侍大將熊澤兵庫は之れを聞くと大いに怒つた兵

不埒千萬、ヨ一シ、乃公が乗り込んで遣付けてやらう……」ドン／＼乗り込んで来る度量試しの灸を据へられて、道場へ案内された、今日は賭勝負も價上りがして五十兩さふつた、何んしろ相手も侍大将、五十兩に後ろを見せる男でない、直ちに積み立て、仕合つて見たが、首筋瀾んで投げ出された、翌朝又もや掲札が出る、池田家の重役共は之れを聞くさ地團太踏んだ、重人を馬鹿にして居やアがる、之れを捨て置く時は池田家の耻辱である」さ腕に覺へのあの奴を差し向けたが、誰あつて勝つものがない、金は取られる掲札はダン／＼殖へる一方であるから城下の評判はイヨ／＼高くある、ヨ然さ此の事が大守の耳に入つた、池田備前守輝政公烈火の如く憤り、輝「ヤア／＼諸共聞く處によれば城下に無敵勝之助なるもの道場を開き、予の家來を慘々に苦しめ、剥さへ賭勝負をして金を捲き上げ、一々掲札を出して、麗々しく勝負を知らせ居る由、以ての外の振舞である、之れ必竟予を輕んずるの致し方である、誰かあ

る向つて打ち据へるものはないか……」誰かあると云つた處で、今迄に悉く打ち負かされて居るのだから、如何に大守の命令でも誰あつて名乗つて出るものがない、輝政公はイヨ／＼立腹の体だ、スルイ重役は恐る／＼一伍一什を言上した、輝「ナニ、予の家來は悉く遣られたと申すか、ウーム残念、萬一此の事隣國へ聞へては予が家勇士ふきに似て大の耻辱である、殊に素性も知らぬ奴に城下を荒らされたさあつては下人民に對しても面目ない、此の上は間者を差向け、無敵勝之助なる浪人を撃ち取つて仕舞へツ……」其處で問者を撰ぶ事にあつた、處が此處に池田家の二家老池田隼人の屋敷に食客となつて居る早雲太郎といふ武士がある、此奴は幾分か忍術の心得があるさ自分が誇つて居るから、池田隼人は又何かの役に立つかも知れないう屋敷へ止め置き、世話をして居る、其のうちに池田家へ推舉しやうといふ考へふのだ、斯ういふ時には持つて來いの男だから、隼人より推舉した、輝政公は大いに喜び、首尾よく

事成就の曉には五百石で召抱へやうとの言葉が下つた、隼人より此の事を早雲太郎に傳へる、太郎は喜こんだ、太「必らず共に御安心下されたし……」さ快よく引受け、夜に入るさ身仕度して猿飛佐助の道場へ忍び込ん 来た。

○忍術の二の字も知らぬ癖に

忍術 にかけては此方が専門だ、猿飛佐助平氣で居るやうでもナカク油断はさぬ、毎晩城内へ忍び込んで居るから、萬事手に取る如く聞へる、佐「オイ三好、面白い事が出来たぞ、三「ナンド、乃公の働く仕事ではあいか、佐「ウム、貴様の仕事だ、三「忝じけあいか、一体何んだい、佐「今夜、我々の首をかく積りで間者が入り込む、三「エツ、間者……其奴は洒落てる、強いか弱いか佐「ナアニ、高の知れたものだ、忍術使いださ云ふのだら忍術の二位のものだらう、三「ヨシ、乃公が一番生捕つてやらう……」清海入道大喜こ

び手具懸引いて待ち受ける、夜に居るさ、二人は酒を宜い加減で切り上げて入口に三好清海入道、奥に猿飛佐助が寝る、佐「三好、貴様酔つ拂つて寝込んで仕舞つては不可んぞ、三「大丈夫だ、大船にのつた積りで居れ……」二人は床の中へ入つた、暫らくするさ清海入道グウグウと鼾をかき出した、佐「オイ三好く、三「グウツク……」佐「オヤク、大船が寝て仕舞つた、此奴仕方のない奴だ、オイ三好く……」酔つた加減でグツスリ寝込んで仕舞つたらしい、佐「何うも、仕方のない奴だ……」佐助は囁いて居る、其のうちに夜は次第に更け渡る、佐助はバツと枕許の燈火を消した、佐「最う来る時分だ、待て……」佐助バツと姿を隠して廊下へ出たツロツロ庭前の方を見て居るさ果して一人の曲者が、何時の間に忍び込んだか、植込みの中に隠れて居る、佐「ハ、ア、彼奴ださ植込みの中へ隠れるやうさ奴から知れたものだ、オヤクツロツロ這い出したぞ、ハ、ア手探りにやつて居る鹽梅では、目も暗では利さ

ふいらしい、斯んふ忍術、使い知ら知れたものだ」と猿飛佐助は睨み眺めて居る、夫れとは知らぬ早雲太郎は、ノソリノソリと廊下へ近よつて来た、四ツ這にあつてソロ／＼上る、太「待てよ、居間は此處だと聞いて居る、ウム、駈の聲がするやうだ、酒に酔つ拂つて寝たさ見へて駈も大分大きいはい……」スーッと障子を開けた、表は朧月夜だから、幽かに見へるが室内は眞暗で少しも分らぬ、太「ハテナ、燈火を消して仕舞つては見當が附かない、一人は駈の聲で分つて居るが、今一人は何處に寝て居るのか知ら……」暫らく考へて居たが、襖中より燧石を取り出し、何ふく蠟燭へ火を移して、途端に猿飛佐助は、素早く床の中へ藻ぐり込み、グワツ／＼空駈をかいて居る、太「イヨ、二人共居るぞ、オヤ／＼大きい男だ、此方は入道だ、何方から先に片付けてやらう、へ、ン此奴を首尾よく遣付けるさ五百石だ、有難い、乃公もマア出世が何うやら出来かけたわい……」最う五百石貰つた氣で入る、三好清海入道の

方を睨み見て居たが、太「待て……此は奴後廻しにして、奥の奴から片付ける事にしやう……」足許を跨いで、マツと奥へ入り込んだ、途端に燈火がパツと消へる、太「失策つた、マア宜い、最う見當は付いて居る……」ズラリ一刀引抜いた、猿飛佐助は暗くても白晝同様目が利く代物だ、佐「オヤ／＼刀を抜いたぞ……グワフ／＼、ソロ／＼乃公の上に馬乗りさなる積りだ、……、グワフ／＼、今に見る吃驚させてやるぞ……グワフ／＼……」駈を掻きながら目を皿のやうにして居る、其のうちに曲者は蒲團の上へ馬乗りさふつた、一刀逆手に取り直し、咽喉元と思ふ處を日かげプスツ、突つ込まんとする途端、佐助は素早く足を揚げて刎れつけたから堪らぬ、曲者はアツと驚く間もなく三好清海入道の上へドシンン落ちかゝつたから堪らぬ、三「アツ、誰だい、此の野郎、オカロン、腹立ち紛れ盲目滅法に殴りつけた早雲太郎横面抛られてキヤツ五六間向ふへ張り飛ばされ、桂へ頭を持って行つて、コッソリ其の儘

氣絶して仕舞つた、三「オーイ猿飛、曲者は乃公が遣付けたぞ、起きろく、ハ、早く火をつける……」佐助は火を點した、三好清海、入道は猿飛佐助が今迄見て居た事は知らないから大威張り、三「何うだ猿飛、アノ通り乃公が此の拳骨で張り飛ばした、貴様に見せたかつたぞ、佐「オーイく三好、貴様は大きい躰を掻いて居たではあいか、三「其處が則ち乃公の計略だ、勇士は響の音に目を覺す、幾等寝て居ても眞逆の時にはチャンと此の通りだ、實は乃公は寢て居はしうい、空躰を掻いて居たのだ、處が此奴忍術の二の字も知らない癖に乃公の處へ窺よつたから、乃公がウンと睨みつけたのだ、スルト立ち疎んで身動きも出來ない、處を引摺んでヤツと投げつけ、起き上つて來る處をばり飛ばしたさいふは俺だ、何うだ豪いもんだらう……、佐「ウワ……、三「オーイく、何かウワだ可笑しな笑い方をするふ、佐「アツハ、ハ、ハ、これが笑はずに居れるか貴様宜い加減な事を云ふふ、三「ナニ……、佐「ナニもないもの

だ、乃公が蹴飛ばしたら貴様の上へ落ちたのだ、夫れで目を覺したのではあいか、三「オーヤツ、貴様何もかも知つて居るのかエツへ、ハ、ハ、實は其の通りだよ……」三好清海、入道坊主頭をかいて居る。

○之りや何うじや不思議く

早雲太郎は縛り上げられた、佐「オーイ三好、貴様此奴を擔いで來い、三「ウム承知した」清海、入道はウンと引擔いだ、二人は宿を立ちノシく岡山城の大手門前に歩つて來た、佐「サア此處へ降せ……」門の扉に寄せかけ馬繫石に縛りつけ、佐助は矢立て取り出して、

豊臣の大將ふごゝ威張つても

足腰立てぬ憫れ輝政

真田郎黨 猿飛佐助



三好清海入道

猿「サア之れで宜い、歸らう〜」宿へ歸り翌朝ブイと岡山城下を立ちのいた、跡で城内は騒ぎ出したが眞田の郎黨と聞いて何れも身震いした、池田輝政も烈火の如く怒つたが仕方ない、遂に泣寝入りさふつて仕舞つた、猿飛佐助と三好清海入道は暴れ徳だノシ〜歩つて來たのが藝州廣島の城下だ、

佐「オイ三好、此處は素通りにしやうか、三「ナゼ〜、佐「ナゼと云つて貴様、大守正則公は居ないよ、三「成程、明石で無心を云つたんだ、然し素通りとは意氣地がふさ過る、一番桂市兵衛、可兒才藏等を訪れて苛めてやらうてはないか、三「ウム、夫れも宜からう〜」二人は一先づ大川端に宿を取つた、翌日にふるさど、兩人はノシ〜桂市兵衛の屋敷へ乗り込んで來た、三「頼まう〜、家「ド〜レ〜」一人の家來が出て來る、何んしろ二萬石の執持を貰つて居るのだから屋敷さぎも堂々として居る、三「我々は、天下の豪傑で

ある、衝立市兵衛が居れば面會がしたい〜」家來は驚いた、家「オヤ〜、衝立市兵衛さんて餘り遠慮がふさ過る奴だ〜」シテ御本名は〜、三「本名は貴様等に云つては腰を抜すかも知れん衝立に會へば分る、取次げ〜、ボン〜云はれて家來は面膨らし、奥の主人の居間に歩つて來た、家「申上げます市「何じや、家「只今斯様〜てございます、如何いたしませう、市「ナニ乃公を捕へて衝立市兵衛と云つたか〜」怪しからん奴だ、追い拂つて仕舞へ、禮儀を知らん奴だ、本人に向つて衝立とは不届千萬〜」ウーム〜」短氣の市兵衛唸つて居る、家來は再び玄關に出た、家「エ、折角でござるが主人は只今會ふ事が出来まいと云はれますお歸り下さるやう〜、三「ハ、ア乃公が衝立と云つたのが腹が立つた、門出拂いを喰つてスゴ〜歸るやうな男ではな、いぞオイ猿飛、面倒だ、奥へ踏み込まうか、佐「待て〜喧嘩腰では不可ん、〜」佐助はバツと消へた、三好清海入道は取次の家來相手に喧ましく談じ

つけて居る、暫らくするに桂市兵衛慌て、出て来た、市ヤア三好か、通れ  
 く猿飛奴勝手に奥へ這入つて来て初めて貴様等と知つたのだ、三ツアツハ、  
 衝立さいはれて腹立てるやうな小膽者ではないと思つた、イヤ出迎いだ儀  
 ……」ノシノシと通る取次の家來は何も何やら陸張り分らない奥へ引返して見る  
 支關に居た筈の一人の武士がチャンと座り込んで居るから、家「オヤ、  
 之リア何うじやア不思議く」呆れて居る、市兵衛は酒肴を出して三人快  
 よく飲み交しあひながら、市「大体、貴様等が最初から名乗らぬから不可ぬ、乃  
 公は毎日二人三人浪人者が尋ねて来る、夫れが一々金の無心だから五月蠅く  
 つて仕方がない、ダカラ大抵は門前拂いを喰はせるのだ、三ツイヤ、我々に  
 門前拂いを喰せやうとしても、ナカク承知せぬぞ、愚圖く云つたら、ズ  
 ンく踏み込む、夫でも承知しない時は猿飛の奥の手を出す迄だ……アツハ、  
 」「桂市兵衛も清海入道の乱暴はヨク知つて居るから苦笑いをして居る、

此の時猿飛佐助は改まつて、佐「時に桂一つ尋ねて置きたい事がある、他  
 ではないが萬一此の後關東と大阪に合戦が起つた時は、當福島家は云ふ迄もさ  
 く大阪方にゐるであらう、市「ワ、夫れは御主人の御胸中一つ、我々は何と  
 も今から云ひ兼ねる、佐「夫れは尤だ、併し貴様等の腕一つで何んかにも出  
 來るではないか、成程徳川の爲に尾州清州から藝州廣島へ四十二萬石の出  
 世だから、徳川に背く事も出来なからうが、人間は恩義を忘れてはならぬ、當  
 福島家と豊臣家は何ういふ關係がある、若し秀吉公がお引立てがなかつたら、  
 正則公は今頃矢張り桶屋の悴で居るかも知れない、必竟大名にされたのは  
 殿下のお蔭ではないか、乃公の御主人さぞは、此の福島家との關係がよいの  
 だが、アノ通り太閤の恩義を思つて、五萬石を破れ履の如く投げ出したぞ、夫  
 れに比べるとききは、福島家などは命迄投げ出さればならぬ譯だ、市「イヤ、尤  
 だ理屈を云はれては一言ない、三ツジャア、此の後萬一合戦起つた時は貴様等

の腕で關東へ加擔しないやうにしてくれ宜いか……市ウム、我々も貴様の  
 意見と同様だ、ヨシ、密に勤め奉つたり、何ぞか都合よくしやう」と桂市兵衛  
 も二人にかゝつては叶はぬ、承知の旨を返答した後に大阪陣の時、福島家よ  
 り密に米五萬石を大阪城へ送つたのは、此の時猿飛三好が桂市兵衛を説  
 た爲であつた、兩人は大いに喜び、宜い加減にして宿に歸り翌日福島城下  
 を立ちのき、草津より宮島へ渡り、嚴島神社に參詣した、何んしろ日本三景  
 の一たる宮島の事だから、景色の良い事は云ふ迄も余り猿飛佐助と清海入道  
 は千疊敷へ来て四方の景色を見渡して居る、向ふに三人の武士が、床机に腰  
 かけ之れも四邊を見物しながら、景色の話よりも諸國大名の品評に及んで居  
 る、□「然し何うも幾等義のなきか何ぞか云つてた處で五萬石を投げ出して、  
 紀州九度山へ閑居した眞田左衛門尉幸村父子の義が知れぬよ、世の中に斯ん  
 ぶ、慾のふい大名は先づあるまい、△「ウム左様だ、大名でも我々でも少しも

變つた事は、利に走り慾につくさいふのが人情だ、眞田なんかは餘り堅過  
 るは、今徳川に及向つた處で、何うして勝てるものかい、時の勢に從  
 はふいやうな奴は駄目だよ、豊臣七將を見る、太閤殿下在世の時こそ、豊臣家  
 無双の大忠臣であつたが、今は何うだい、關ヶ原合戦に徳川家を助けた爲め、  
 福島は十八萬石から一足飛に四十二萬石、黒田は十二萬石から五十二萬石、肥  
 後の加藤は、出陣はしなかつたが、夫でも宇土の小西を討つて、裏から徳川の  
 爲にふつたから肥後一圓を貰つて七十二萬石ではないか、夫れに引かへ、上杉  
 は會津百二十萬石だが米澤へ國替にふつて二十萬石、毛利は出陣せよから  
 藝州、広島より長州萩へ移され、中國十州の太守と云はれた家柄でもタツタ三  
 十二萬石にふつた、今徳川家に敵對するのは、蟻螂に斧だ、逆も敵ふ譯のもの  
 ではない、上杉でも毛利でも祿高を大分削られたが、夫でも家が大事だから  
 我慢して居る、夫れにタツタ五萬石の眞田が幾等勇振りを見せた處で駄目だ

よ、マア眞田ぶぞは軍師の提灯のさ云つた處で、乃公等の目から見ると馬鹿だ時勢を知らんさいふものだ」口を極めてサン／＼悪口して居る。

○アイタ……ウーム

之れを聞いて怒つたのは三好清海入道だ、三ウーム猿飛、アレを貴様聞いたか、猿アツハ、マア怒るふ、アンふものが知つた事かい、相手にするも大人氣さいはい、三ヤイ猿飛、貴様は最少し話せる奴かと思つたら、案外の馬鹿だ、主人の悪口を知られて腹の立たないやうな意地地が何の役に立つ、アノ三人の武士を捻り潰してくる、ウーム、佐ヤイ／＼世の中には大君のこそでさへ、影では何さかか云ふではないか、夫れに一々關つて居て何うする……廢せ、三廢さい、廢口から宜いが、乃公の耳に這入つた以上は承知が出来ない、一番遣付けてやるんだ……」利かぬ氣の清海入道

ツカ／＼三人の側に進みよつた、三ヤイ木つ葉浪人、貴様等は先刻から生意氣な事を云つて居やアがる、眞田家が信州上田を立ちのいたのを、慾がさいの馬鹿のさ知つたが振りに吐して居たが、一体貴様何處のものだ……」怒鳴りつける三人は互いに顔見合せて居たが、別に驚ろく体もない、武コリヤ坊主人の名を聞きたくば、何故自分の姓名を名乗らさい無作法な奴だ、我々は天下の豪傑だ、今天下の勢は徳川に傾いて居る、夫れを知らないで義の恩のさいふ大名は馬鹿正直ださ云つたが何うした、三ナニイ、馬鹿正直……乃公を誰だと思つて居やアがる、眞田十勇士の随一人三好清海入道だ、サア勘辨ならん、貴様等は何處の馬の骨か知らないが、狸爺にベコ／＼頭を下げるやうな腰拔さは違ふぞ、サア立ち上れ、一々捻り潰してくる、甲ナニ、貴様が眞田の三好清海入道さ云つて、關ヶ原合戦の時、只一騎秀忠を追かけたさいふ坊主か、三黙れツ、坊主でさい入道だぞ、坊主と入道の區別を知らない

やうな奴が、餘計な事をペラ／＼口喋るゝ、三「何を吐す、貴様等の講、釋を聞かふくつても、夫れ位いは知つて居るわい、ヤイ三好清海入道、乃公の名を聞いて驚ろくる、乃公は天下の豪傑、後柳川立花家の十時傳右衛門だぞ、三「ナニ、貴様か立花の十時傳右衛門か其奴は面白い、シテ貴様は何んだ甲、乃公は肥後加藤二十四將の一人赤星太郎兵衛だ、三「フム、赤星太郎兵衛さい、ふ奴か貴様は何者だ、丙「我こそは毛利の家來井上五郎兵衛だ、三「ハ、ア、左様な奴だから徳川の提灯持をやつて居たのださ馬鹿な奴だ、ヤイ十時、貴様の主人は關ヶ原合戦の時は、石田方であつたのではないか、夫れが爲め一且柳川の十二万石を取り上げられ、大名の浪人をして、加藤家の食客をして居たのであらう夫れを漸々清正公の爲に執成して貰つて、本領安堵の沙汰を受けて元の十二万石、恨みは必竟徳川にあるのだ、夫れを思はふいで何んだ徳川を恐れてペコ／＼頭を下げる意氣地なし奴ヤイ十時、貴様は日本三槍の一

人と呼ばれた豪傑ではないか、チト耻を知れ、我々眞田の郎黨には、左様ものは一人もふいのだ、又毛利の井上五郎兵衛も意氣地なしの骨頂だ、主人の領分は減るわ、惨々の目に遭されながら有難涙にくれて居る奴もあるか加藤の赤星は狸、爺のお陰で、七十二万石にふつたのだから徳川を有難いと思つてゐるのだらうが、考へて見る、加藤家は豊臣大將の隨一人で豊臣家とは親戚の間柄だ、然るに豊臣の爲に盡して居る眞田家を悪口するとは何事だ、勘辨ならん貴様等三人は武士の風上にも置けぬ奴だ、三好清海入道一々捻り潰してやるから左様思へ……」ハツタと睨みつけるさ、三人はカラ／＼と大口開いて冷笑い、十「アツハ、理屈は何さでも云へ、加藤家でも毛利家でも乃公の御主人立花家でも家を大事と思へばこそだ、大体眞田は横着だ安房守昌幸公の嫡子伊豆守信幸は徳川方で立派に十万石の大名だ、ダカラ眞田の家は潰れる氣遣いはない家は別に立派に脇に立つやうにして置いて安房守も幸村

が、五万石を投げ出して徳川に反抗するさいふのは男を上げる氣ふんだ、ヨシ  
 ヤ自分等は何うあつても眞田の家は潰れない、一つ宜く芝居が當つたら、五十  
 万石百萬石の大名にされるさいふ氣でやつてるのだ、一六勝負をやつてるのだ  
 から矢張り軍師だけあるわいと、世間では云つて居るぞ馬鹿ッ、夫れが分らん  
 て無闇に威張るふ、三「ウー、此奴サマ」の事を吐す、最う勘辨からん覺  
 悟しる……」利かぬ氣の清海入道、大手を擴げて十時傳右衛門に飛びかゝつ  
 た、十「己れッ、小癩ふ入道奴……」二人は轉んづころんづ遣り出した、清海  
 入道の力や勝りけん、何なく十時傳右衛門を押し伏せ、三「サア何うだ此の  
 野郎ボカーン、十「アイタ……ウー……」刎れ返へす捻じ伏せる兩人は懸命  
 にやつて居る、之れを見るぞ赤星太郎兵衛と井上五郎兵衛の兩人は、五「サイ  
 赤星、何うする十時むチト劔香だ、一番加勢をしてやらうか、赤「合點だ……  
 二人が立ち上つて、三好清海入道の背後より、帶際揃んでズル／＼／＼力に

任せて引き戻したから堪らぬ、清海入道仰向け様に打つ倒れた、十時傳右  
 衛門「クノ、さ起き上り突然清海入道の上に跨り、グイと押へつけた十  
 此の野郎何うだ……」ボカ／＼打ち毆る、三「ウー、何をッ……」刎れ返さう  
 として、赤星太郎兵衛と井上五郎兵衛の兩人が、清海入道の兩足を力に  
 任せて押へて居るから、如何に力強よい清海入道でも身動きが出来ぬ、  
 三「ウー、ヒ、卑怯な奴、一人に三人が掛るさば……ウー……」幾等力味  
 でも敵ばぬ、清海入道三人にボカ／＼打毆られて居る、向ふの方で此の  
 体を見て居た猿飛佐助は、佐「アツ、ハ、ハ、三好、三人に虐られて居るわい、  
 ヨーシ一つ三人の奴を驚ろかしてやらう……」猿飛佐助ヤツと叫ぶとヤツと姿  
 が消へ失せた、三好清海入道も眞逆の時には、佐助が飛び出すさいふ事を知  
 つて居るから、三人相手に捻じ伏せられぬがらも、負けず劣らず挑み争つて居  
 る。

○アツハ、弱い奴だ

十時傳右衛門、赤星太郎兵衛、井上五郎兵衛の三人は、三好清海入道を押へつけ、無闇に打ん殴つて居る折柄、清海入道の上に乗れり跨つて居る傳右衛門の胸倉を掴む者がある、傳右衛門腹を立て、十「ヤイ放せ、痛いよ……誰だ、アイタ〜」誰とも判らんが急處を掴まれて傳右衛門力が入らぬから、三好清海入道は何なく跳れ返した、三「サア、何うだ此の野郎……」今度は清海入道、ホカ〜傳右衛門を打ん殴る、之れを見る赤星、井上の兩人は、又も「三好清海入道の兩の足を掴んで引倒さうとする途端、兩人の胸倉を掴むものがある、赤「アツ、タレだ……」井「ウーム」放せ、痛い……」二人は清海入道の足を放して、キリ〜舞い、足を放されて勇氣づいた清海入道、傳右衛門をホカ〜打ん殴り飛び起るが早い赤星、井上の兩人をホカ〜遣る、

三人は大いに怒り、三好清海入道に飛びかゝらうとするが、ムツと胸倉を掴まれ、傳「アイタ……」自分の身が大事だから藻掻いて居る、三好清海入道早くも夫れぞ知つた、イヨ〜威張り出す、三「ヤイ三人の奴何うだ、乃公には敵ふまい、ヘン貴様等が束になつて来た處で怯さもするんじやアないぞ、赤「何を吐す、此の入道……」三人は怒つて飛びかゝらうとする、ムツと胸倉を掴む奴がある、井「アツ、此奴は不思議だ、一体タレだ赤「アイタ……」薩張り分らん、奇妙〜……」三人は狐に捕まれたやうな鹽梅だ、清海入道カラ〜と嘲笑い、三「アツハ、ヤイ三人、恐れ入つたか、三好清海入道は奥の手を持つて居るぞ、乃公に指一本差して見る、立處に掴み潰すから左様思へ……」大言を拂つて居る、三人も之には弱つた、三人はウム〜唸つて居る、處へムツと姿を現はした猿飛佐助は、佐「アツハ、ヤイ十時、赤生、井上、暫らく……」井「オヤツ、貴様は眞田の忍術使い、猿飛佐助では無い

か、佐「如何にも猿飛佐助だ、赤アツ、夫れで分つた、先刻から我々の胸倉を掴んだのは貴様であらう、佐「アツハ、左様思へば間違いはない、士」道理で、變だと思つた、忍術使いに出會つては叶はぬ、三好の入道猿飛と連れ立つて居るから、強がつて居やアがつたのだよ、三「知れた事を云へ、ダカラ奥の手を持つてるさ云つたのだ、降参しろ……」果ては大笑い、喧嘩は何處へか行つて仕舞つて、五人は附近の料理屋に入り込み、酒肴を注文して飲み始める、猿飛佐助は天下を度々漫遊して三人とは懸念だが、清海入道は一面識だ、互いに大言を拂つて飲み据へて居る、スルト清海入道は、三「オイ猿飛、貴様も人が悪い、三人を知つて居て、乃公に喧嘩をやらせるさ酷い……」佐「ダカラ、最初大人氣ないから腹せま云つたのだ、此の三人、貴様に引けを取らぬ亂暴者だから何を云ふか分つたものでは無い、三「分つたものでないさ云つて御大將を悪口しられて黙つて居れるか、ヤイ三人、此の後乃公の主人の

悪口吐くさ承知しなさいぞ今度は捻り殺して仕舞ふ、清海入道一人威張つて居る、其の夜は宮島の宿に泊り、五人は互いに天下の形勢を談じて、快よく寝た翌日にある、三人は一足先に立出する、猿飛三好の兩人は七子七浦七恵子を見物して、夫より草津に渡り中國地方を次第に下つて、岩國の錦帯橋に差しかつた、三「オイ猿飛、之れが名高い岩國の錦帯橋だよ、三「ウム左様か噂に聞いたよりはバツさしないさ……」二人は橋の欄干に倚れて、川の流れを見下して居る處へ向ふからバタ／＼、女「アレ……お助け……」悲鳴を擧げつゝ一人の婦女が髪振り散し跣足のまゝで走つて来る、武「待てツ、ア、無禮者奴ツ、叩き斬つてくれる……」大分酔つ拂つて居るさ見へ、一人の武士が足許危げに抜刀振り上げ追かけて来る、三好清海入道之れを見ると三「オヤツ、アノ武士は大變酔つ拂つてるぞ、佐「ウム、助けてやれ……」云つて居る處へ婦女は命カラ／＼驅けつけて来た、突然猿飛佐助に縋りつき、女「



サ、お助けでございませぬ。何卒お力を以ちまして……佐「オ、ヨシ、助けてやる安心いたせ……」婦女は佐助の背後に隠れてブル／＼振へて居る。酔ざれ武士は驅けつけて来た。生酔本性違はず、早くも佐助の背後に目をつけ武「ヤ、ヤイ浪人、婦女を之れへ出せ。不埒な奴だ……」ヌルト三好清海入道はヌツと現はれ、横合より武士の利腕チヨイと掴んだ。清海入道はチヨイと掴んだのだが、相手は堪らぬ、武「アイタ……」思はず太刀取り落した。三「ヤイ酔ざれ、貴様は白晝に及を振り立て、婦女を追かけるは不都合な奴だ」婦女に指一本觸れて見る、捻り潰すぞツ」云ひさまヤツと投げつける、ドシーン、キヤツ……腰骨打つて悲鳴を上げて居る清海入道太刀拾ひ取り、足に踏へてボキーン、二つに折つて夫れへ投げ出し、三「ヤイ雅樂多、貴様等の百や二百が来た處で怯さもするのじやアおいそ命ばかりは助けてやる歸れ……」又もや首筋掴んでヤツと投げる、武士は酒の酔も醒め果て、武「アイタ

……オ、覺へて居れツ」其の儘跛足引き／＼逃げ出した、三「アツハ、弱い奴だコリヤ婦女安心しろ一体何うしたのだ」婦女は大地に手を支へ、女「ハイ、誠に有難う存じます、妾は此の岩國の町端に居ります茶店の娘でお瀧と申します今のお武士は此の城下に居ります中國權左衛門といふ俠客の宅に賭場押へをいたして居ります九州浪人で、駒木根傳八郎と云ふお方でございませぬ、毎日のやうに妾の店へお越しに居りますから、可笑しいと思つて居りますと妾に云ふ事聞けさか、妾にふれさか云はれまして、妾が柳に風を受け流して居るのを宜い事にして今日は酔つ拂つて見へ、丁度父が不在を幸い、妾を奥へ連れ込み、手込みに遣さうございませぬと云はりましたゆへ、妾は逃げて来たのでございませぬ、佐「ム、悪い奴だ武士が婦女を捕へて強姦しやうと、は怪しからん、心配する、假令相手が何者でも構はん、我々兩人が居たら大丈夫だ女」アハございませぬ、又仕返へしに来るに違ひございませぬ、三「ナアニ仕返へ

しに來てくれる方が面白いのだ、マア宜い、貴様の宅へ送つてやる……」二人は婦女を連れてノシノシ町端れの茶店へ差して歩つて來た。

○捻り潰してくれるぞ

三好清海入道に惨々に遣られた泥酔武士の駒木根傳八郎は跛足引き、中國權左衛門の宅へ逃げて歸つた、傳「アイタ……ウーム、子「オヤツ、先生、貴公は何うおさいました、オヤ、頭に瘡が……額がスリ剥けて……傳「アイタ……」傳八郎四ツ這にあつて奥へ漸々入り込んだ、中國權左衛門は傳八郎より事情を聞いて赫々怒つた、權「ヤイ、野郎共用意しる、宅の先生の斯んぶに遣られて乃公等が黙つて居たさあつちやア、以後面出しが出來れへ事柄は何うでも宜い、飽迄お瀧を連れて歸つて先生の爲に諾と云はささきやア承知が出來れへ……」此の社會の常として理が否でも押し通さうさいふ考へふのだ、

子分は三十人ばかり集まつた、中國權左衛門は夫れを引つれ、權「駒木根先生私に乗り込んでお瀧を提げて歸りますよ、マア膏藥でも張つて寝ておいでなませ、」駒「アイタ……オ、親分何分頼む、權「大丈夫でございませぬ、ナアニ浪人も二人居た處で怯さもするんじやアございませぬ……」駒「然し親分、相手が恐ろしい強い奴だが、何人出掛けるのじや、權「私共に三十人でござい、駒「ソ、夫れ位いふらマア行かぬが宜い、駒「エツ、左様に強いですかい、駒「強い何のさ云つて二十人や三十人から行かぬ方が宜からうマア少くとも百人以上は……、權「エツ、百人……冗談じやございませぬよ、高の知れた二人の浪人……、駒「イヤ、其の高の知れたのが餘程強い……」之に驚いて權左衛門は子分を走らせ、残らず呼びよせる、子分はワイワイ歩つて來る、丁度百二十八人集つた、權「ヤイ、手前等油斷しちアいけれへぞ、相手は半分強よさうだ……」權左衛門は一同を引つれ、ノシノシ町端れに繰り出した、何

かく茶店の表に來た、權「野郎共、裏と表を張り番しろ、逃しちやア不可ね  
 へぞ……」子分は家の周圍をヒシ／＼と取り捲いた、中國權左衛門は重立つ子  
 分を五人ばかりつれて、ノソリ店へ入り込み、權「ヤイ／＼、誰か居るか、お  
 瀧坊は居れへか……」奥に居たお瀧は之れを聞くさ青くあつた、瀧「ダ、旦那  
 様來ました／＼、アノ聲が中國權左衛門で……、猿「フム來たか……待て／＼、  
 成程澤山來て居るわい、三好、貴様の暴れる仕事が出来たぞ、三「アツハ、  
 、此奴は右難い猿飛、何人ばかり來て居る、佐「サア、チヨイと足音の様子  
 では百三十人位は大丈夫だ」忍術使いだから足音や聲で直に分る、三「ナ  
 ニ、百三十人……其奴は結構、二十人や三十人では薄らさいと思つて居たのだ  
 目シ乃公が一番應對してやる、婦女震へるさ、今に悉く捨り潰してやるぞ……  
 ……三好清海入道杯を手に持つたま、ノシ／＼店へ出て來た、奥の部  
 屋ではお瀧と父親が何うある事かさ青くあつて居る猿飛佐助は酒を飲んで居た

が、何に思ひけんバツと姿を隠した、三好清海入道ノシ／＼店に出るさ杯の  
 酒をチヨイと甜め、三「ア、美味い／＼、ヤイ何んだ貴様等は……、權「手前  
 こそ何んだい、三乃公は人間だ、貴様の見る通り、身の丈は六尺八寸、持  
 つた力が底知れず、人を見るさ捨り潰したくある性分だ、夫れが酒を飲むさ、  
 最う堪らなくあるのだ、大方貴様等は捨り潰されたくつて出て來たのであら  
 う、何うだ蚤野郎、風野郎、權「オヤツ、此奴人を馬鹿にして居やアがる、乃  
 公は此の岩國で人も知つたる中國權左衛門と云つて、子分の五百人は自由にす  
 る俠客だ、大方乃公の處の先生を橋の上で酷い目に遭したのは手前だらう三  
 ウム、其の事か、イヤヨク知つて居る乃公だよ／＼、捨り潰してやらうと思つ  
 たが、マア夫ればかりは許してやつた有難く禮を述べに來たのか……イヤ感心  
 さ奴だ……」又杯の酒をチヨイと甜める、權左衛門之れを聞いて赫と目を刺  
 いた、權「ヤイ養坊主、手前は乃公等を蚤の風のやうに思つて居やアがるさ。

サア先生の仕返しに來たんだ、之れへ出る、三「アツハ、出るさ云はんでも出たくつて堪らぬ乃公だ一日でも人間を打ん殴らぬさ、酒を飲んでも咽喉へアまるさいふ厄介な入道だ、先刻は可笑しな助平野郎を橋の上で酷い目に打ん殴つてやつたから今日は餘程酒が美味い……ペロ／＼ア、美味い／＼……處で人間の屑、貴様等も殴りたいのださ、ヨシ、殴つてやる、乃公の拳骨は天下一品、味が太分良いから賞翫しろ」云ひさま、左りの手に持つ杯をバツと投げるさ中國權左衛門の眉間へバシーン權左衛門不意を喰つてア、と驚るさ尻餅ついた喧嘩専門の子分共も此の体に度膽抜かれ、ワイ／＼騒いで居る奴を清海入道大手を振つてバラリ躍り込んだと思ふさ、アン／＼と拳骨振り廻す一度に五人七人は打つ倒れる、□「ヤア、強いぞ／＼、ソレツ遣付ける……」  
 プラリ／＼と腰の長刀を抜いて見るさ、斯は如何に、中身がふい△「オヤ／＼／＼、此奴は不思議だ、中身がふい……、□「オーヤオヤ、乃公の乃も中身が

……此奴は奇体ださ、皆々騒ぎ出した、百二三十人の子分は悉く中身を取られて柄ばかりになつて居る、三好清海入道之れを見て、三「ハ、ア、最う極飛が遣つたさ、此奴は宜い鹽梅だ、ヤイ人間の屑、貴様等何なガヤ／＼騒いで居る、サア早へ來い一々捨り潰してくれろぞ」掴んで投げる、取つて投る、バ／＼と人礫で、三「アツハ、面白／＼、投げ上げる奴と落ちて來る奴さかカチ合つて、即死怪我人數知れずさいふ光景だ、

○オヤツ此奴は大變だ

親分中國權左衛門、此の体を見てアツと驚ろき逃げ出さうとする處を背後からムツと掴まれ、權「エツ、放せツ」振り向いて見るさ誰も居ない、權「オヤツ、此奴は變だ……ウーン／＼」無理矢理振り放さうと藻掻いて居る奴を、エイツ、ドスーン、キヤツ、エイさいふ聲は聞へたが、姿が見へない、權左衛門

平筒り込んでイヨく青くふる、清海入道も無闇に暴れる、小口より雷で殺す到頭百三十人を悉く氣絶させ又は殺して仕舞つた、猿飛佐助はバツと姿を現はし、佐「三好、何うだ、少々暴れ場へがしたか、三「ナアニ、町人や人間の層では構らぬ、貴様刀の中身を一々抜いたる、佐「左様だ恐るゝには足らぬが、何んしろ大勢だ、怪我をせないとも限らんから、中身は抜き取つて仕舞つた鈍刀ばかりで碌な刀はないわい、三「處で猿飛、此の上は何うする、佐「吉川家の陣代へ引渡して仕舞へ、此奴等を許してやるも又何をするか分らぬ、三「オ、宜しく……」三好清海入道は五月幟を立てる大きい等を二本宿屋で借り出し、三「サア猿飛、貴様も一本を天秤にしる……」一人か片側へ三十人づゝ縛りつけ、都合六十人をウンと擔いだ、佐「アツハ、三好まだ十人餘り残つて居るよ、三「ウム、二人が六人づゝ提げるのだ」兩手に三人づゝ提げて肩には六十人の奴を擔いだ、往來のものは之れを見て驚る

た、□「オーヤヤヤ、恐ろしい人だ、一人二人……六十人を竿で擔いで、六人を提げてるぞ、何んぞ素敵の力ではあいか……」ソロ／＼後から尾いて来る、二人はノシ／＼岩國の陣代屋敷へ乗り込んで来た、陣代笹部源太夫に會つて一伍一什を述べ立てる、笹部源太夫も眞田の郎黨と聞いて驚る、鄭重にして奥へ通し、笹「承知いたしました、相當の處罰に行ふでござる……」三百三十六人を引受け取つた、二人は宿へ引取る百三十六人の中で死人が半分以上ある生き残つた奴は夫々、領内追放申付られた、死骸は取り捨てさふつた、賭場押への駒木根傳八郎は早くも風を喰つて逃げ失せた、然るに兩豪傑は、お瀧の身を氣遣い、萬事陣代に頼んで置いて、翌朝岩國を出立した、三「オイ猿飛、何うも百三十人位も相手にするさ、チト面白いが、町人や破落頭では一向満らぬ、思ふ存分働くさいふ事はあいな、マア迷ひ半分だ、佐「ウム、アンふ者は面白くない、一つ天下の豪傑に出合つて、ウンと暴れてやりたいも

のだ……二人はノシク九州路へ入り込み、豊前小倉の城下へ歩つて来た。此處は細川越中守の居城だ、佐「オイ三好、細川家には長岡監物、澤村才八郎といふ豪傑があるよ、三「ウム、アノ足輕から出世した澤村才八郎がイヤ細川家も豊臣家には大變な恩義があるのだ、佐「だが徳川にも恩義があるよ、マア細川は家の爲に徳川家康より助けられて居る事があるから、徳川に加擔するのも無理はないよ、三「無理はないが、豊臣家の恩を忘れるのも不可、越中守の父の幽齋は太閤殿下の覺へ目出度く、丹波田邊の小大名であつたのが、ダンクと出世したのだ、既に天正十年六月本能寺の變があつて以來、細川家は取り潰されなければならぬのを、秀吉公のお蔭で無事だつたのだ、佐「ケレドも貴様、其の後細川家が金を新關白秀次公に貸した時、家が潰れやうとしたのを、徳川家康に助けられた事があるのだ、マカラ何方か云へば太閤が薨去遊ばした今日だもの、徳川に加擔するのは人情として無

理からの事だ、三「オヤツ、貴様妙に細川の肩を持つやうだが、左様な理屈は何うでも宜い豊臣の恩義を忘れるやうな奴は、小口から大名と云はささい乃公の考へだ、佐「マア怒るふよ、實際細川は可哀想だ、黒田や福島、伊豫の加藤さには比べものならん、苛めるから福島、黒田、加藤を苛めるが宜い細川は許してやれ」二人は頼りに争つて居る、大体此の細川家は豊臣家にも徳川家にも恩義があるのだ、天正十年六月十三日、山崎久我嘯の吊合戦の時、日向守光秀はヨク戦つたが、遂に小栗栖で土民の爲に討取られたといひ傳へてある、處が一説には、徳川家康が密に光秀を濱松城へ庇い、名を土岐主水と改めさせ、客分として居たといふ事である、秀吉公が天正十五年に小田原の北條を攻める時に濱松へ立ちよつた、其の時家康はイロク馳走をした時、夫れさなく饗應役に土岐主水を出したスルト石田治部三成が早くも見破つて治恐れながら光秀が此の席上に居ります」と申し上げた、秀吉公は聞かぬ振りし

て居るも、三成は二度も三度も言上した、秀吉公カウ／＼笑つて、秀假令、光秀も生きて居ても死んで居ても同じ事だ、手も足も出るものでは無い……」

と高笑いしたさいふ事がある、其の後天正十六年に光秀は濱松で死んださいふ之れを細川越中守が聞いて、越中守、忝るい、家康公があれはこそ、舅は壘の上で死ぬ事が出た……と喜んだ、此の時から細川家は徳川を慕つて居たものだ何故さいふに、越中守の夫人は浅茅と云つて明智日向守の末の女だ、之れは元信長公の口添で秀吉公が媒介したのだ、然るに日向守の信長公を弑するさいふと、越中守何さなく、主殺しの娘を嫁にして居るさいふ事が世間へ對して面目ないから、親類中にもイロ／＼意見をするものがあつて、當時兵部大輔藤孝……後に幽齋とあつた人だ、藤孝公も離縁をしたいと思つたか、小供を二人迄生んだ仲だから生木を裂くのも甚だ可哀想だと思つたが、世間でイロ／＼非難をするから藤孝は忠興に向つて、妻の浅茅を所置せ

よと申し渡した、越中守も仕方ないから妻の浅茅に此の事を話すと、浅茅は尼寺へ入りたいと云つた、其處で越中守は父藤孝と相談の上、京都北山へ草庵を建て、之れへ浅茅を入れて尼にするさいふ事にした、浅茅を乗物にのせて警固の若武士十二三人をつけ丹後田邊の城より、ドシ／＼京都へ送りつける。

○婦女は三界に家なし

其の頃秀吉公は京都の聚樂の邸に居て旭の昇る勢ひ、常に洛中洛外の様子を見て禁裏の取締を嚴重にして居る、一日秀吉公例によつて市中を巡視して居ると、怪しい女乗物にて、十二三人の若武士が附き添い歩つて来る、ヨク／＼見ると、其のうち細川兵部大輔藤孝が交つて居るから、呼びよめて仔細を尋ねると、藤孝は赤面して差俯向き、敬禮したまゝで行つて仕舞つた、

秀吉公不審に思い、翌日改めて藤孝を招き、秀「昨日は途中だから何も尋ねなかつた其方も又赤面をいたして居たから強いて問はなかつたが、一休彼れは何うしたのだ、藤「ハイ、甚だ恐れ入りましたる次第、申上ぐるさへ面は次第もございませぬ」遠慮の体、秀吉公は強て話せと、再三再四尋ねた、藤孝は恐る／＼越中守の妻淺茅の事を述べた、スルト秀吉公カラ／＼と大口開いて冷笑い、秀「アハ、ハ、夫れは以ての外じや、左様な遠慮をして大切の妻を失ふは宜しくない、マシテ嫁しては夫に從ふべきもの、婦女は三界に家なしささへいふではないか、一良嫁しては何處迄も夫に從ふべきものじや一旦嫁入つた以上は生家の善惡に仍るものではない尼になるさは聞けば聞くほど不憫である、早速元々通り夫婦の縁を固めさすが宜からう、改めて予が聲掛りなし遣はさん……」と云はれて藤孝は嬉涙にくれた、翌日秀吉公近習を遣はし、淺茅を呼び迎へ、再び越中守の内室に周施つた、之れ則ち秀吉

公の寛仁大度の致す處と細川父子は非常に秀吉公を徳として居る、處が其の後秀吉公は自分の甥三好秀次に關白職を譲つた、秀次は智恵の淺い人物だから非常に亂暴を始めた、秀吉公之れを聞いて大いに怒り秀次の關白職を取り上げ、誰か他に適當もふのを養子にしやうといふ心が出た、早くも此の事を知つた秀次は大いに驚るき、官位を奪はれては堪らぬから今のうちに味方を拵へて置かうと大阪城内にある金藏の金を出して、大名に貸付けを始めた、此の時分の大名は貧乏人が多かつた、大名が貧乏したさいふと變に聞へるが、筆費多端の時で、軍用金へのみ入費が澤山かり、ナカ／＼懐裡がヨクない、ダカラ誰も彼も手を出して秀次の金をかつた、秀次は七八万兩なしたつた、イザさいふ時には金響で引張り込まうさいふ算段であつた、スルト秀吉公之れを聞いて、秀「憎くい奴だ、秀次より金を借り入れた大名は、本日より三日間内に返金させよ、四日目にふれば名圖絶申付ける」と嚴重な沙汰が下つた



借りて居る大名は大いに慌て、金の工風に血眼にあつて居る、何んしろ三日間に調達が出来ぬ時は家が潰れるさいふのだから、京都市中サテは大阪邊りの豪商を呼んで金子調達の相談をするさ商人はウンさいはさい、ナセさいふに其の時分の大名は誠に當てにふらぬ、昨日迄は何々の城主何十萬石と威張つて居るかと思ふさ一夜のうちに敵さふり味方さなつて戦いが起る、負けるさ家が潰れる、ダカラ昨日の大名も今日の乞食さいふ工合、劔呑千萬の世の中だ夫れゆへ金などを快よく貸してくれ人がさい、大分困つた大名があつたが、就中細川越中守は黄金七百枚を借りて居る、イロく三日目にあつて、漸々四百枚の金は出来たが、後三百枚が何うしても出来ぬ、仕方がないから、臣等一統を集めて評定をした、其の結果、徳川家康に泣きついて見やうさいふ事にあつて、重役の松井佐渡が使者に立つて徳川家へ頼み込むさ、家康も大名を取り込んで置く必要があるから、二つ返事で黄金三百枚貸してくれた、越中

守大いに喜び、直ちに七百枚の黄金を返した、之れが爲め家は潰れないで済んだが、爾來細川父子は徳川家康を家の恩人として、非常に尊敬した、此の事があつたから、關ヶ原合戦が起つた時、細川越中守は徳川の恩義を思つて豊臣大將を巧く説きつけ、遂に徳川へ味方をさせたのだ、ダカラ細川家は豊臣家にも徳川家にも恩義がある、然し太閤殿下が薨去して後は何方の恩義に盡すかさいふさ、生きた徳川の方へ盡すのが人情、夫れゆへ細川家は徳川無二の味方さあつて居るのだ、猿飛佐助も三好清海入道も此の事は主人幸村より聞いてヨク知つて居る、佐助は細川の肩を持つ、三好清海入道は一も二もよく不都合だと怒つて居る、互ひに二人が争つた處で仕方がないから、佐「最う廢せ、アラク歩いて議論をして居た處で、一文にもふらさい、最う日が暮れる、宿を取らう……」二人は小倉屋喜助さいふ宿へ泊り込んだ、清海入道飽迄暴れてやりたいさいふ氣がある、二「ナイ猿飛、貴様は細川の提灯持を

やつて居るが乃公は飽迄、不承知だ一番暴れ散してやりたいと思ふ、貴様否から勝手にする、乃公は此處丈け素通りにする事は出来ない、何んでも蚊でも、細川を苛めてやるのだ」一人力味返つて居る。

○ソロソロ弱音を吐き出した

二人は城下の島屋喜平といふ宿へ泊つた、翌朝にふるさど三好清海入道はノシく大手門前に歩つて来た、登城の時刻と見へ或ひは乗物又は馬上で槍持ちあそを連れて續々登城する、二三ハ、ア、大分刀架がでて来るわい、彼奴等はマア刀架野郎だ、足腰の立つ奴は一人もふい……」ミソザと聞へよがしに冷笑ふ、若武士共は之れを聞いて腹を立てる、○「オイ、アノ大入道は一体何者だ、我々を刀架野郎と云つて居る、不埒な奴だ、△「マア、相手にするあ、恐ろしい大きい奴だから、萬一暴れ出しては困る障らぬ神に崇りふし、相

手にしさい方が宜い……」利巧なものは聞かぬ振りして行き過る、清海入道も相手が之れだから、一向満らふい、三「オヤ、細川の家来は皆意苦地おしばかりと見へる、乃公が悪口しても少さも腹を立てふい……」待て、之れは不可ぬ、一つ喧嘩を買い出してやらんければならぬ……」と仁王の如く突つ立つて居る處へ、家来十五六人を従へ、馬上で歩つて来たのは、之れぞ細川豪傑澤村才八郎だ、清海入道見るより、清ハ、ア、此奴はチト價値のある奴らしい、面白い、打つ附かつてやらう」ズイと大道の真中に出た素より往來の邪魔す、さへふのだ、スルト先供の家来は果して怒つた、□「ヤイ、御家老様の御通行だ退り居れッ、三「アツハ、貴様等には御家老様が豪いものであらうが、乃公の目から見ると赤の他人だ、一文半粒の恵みを受けた事もまいぞ、天下の往來を歩くに、何の不都合だ、邪魔だと思つたら、避けて通れッ、乃公は一足も退げる因縁がまい、愚圖く云ふふ……」口より腕が先に出

る男だから堪らぬ、突然家來の首筋、擱んでエイッ、ドシーン、二三間向ふへ  
 投げた此の体を見るも他の家來は騒ぎ立つた、△「ヤア狼籍者、其處動くふ  
 ……」四方より打つてかゝる、清海入道躍り上つて喜んだ、三「イヤ、お出  
 であく、斯う來ふくつちやア嘘だ、一人二人は面倒だ、束にあつてかゝつて  
 來い」大言を拂つて小口より擱んで投げる取つて放る、無二無三に暴れ出した  
 何んしる向ふ見すの大力無双だから堪らぬ、見る／＼十五六人の家來は夫れ  
 へ投げ出された、此の時迄馬上より呢を見て居た澤村才八郎は、何に思いつ  
 ん家來に持たせた槍を取るより早く、リッ／＼と引抜いて、オ「ヤア狼籍者動  
 くふ、澤村才八郎槍玉に上げてくれん……」云ふより早く、ヤツまばかりに  
 突つかつた、清海入道得たりと仁王立ちさふり、三「面白い、サア來い、  
 ……」突つかゝる槍先をヒラリ／＼と二三度引外して居たが、エイと一聲喚き  
 叫んで、身を蹴へしたと思ふ途端、馬の下腹に飛び込み、四足をムンツと擱ん

でケイと差し上げた、澤村才八郎程の豪傑も驚いた、オ「オヤツ、此奴恐る  
 しい強い奴だ……」馬上で地團大踏んで居る、清海入道平氣の平左、差し上  
 げたまゝノシ／＼濠の方へ歩き出した、澤村才八郎も堪らぬ、オ「オヤツ、  
 乃公を人馬諸共濠の中へ投げ込む積りが知ら……アイヤ下なる豪傑に物申さ  
 ん……、三「ナンダ才八郎……」三千石の家老も三好清海入道にかゝつては  
 三文の價値もない、オ「御身は全体何人である、姓名を承はらん、三「ア  
 ツハ、ソノ弱音を吐き出したぞ、乃公は誰でもない、眞田の郎黨三好  
 清海入道だ、濠の中へ投げ込むから覺悟しろ……」之れを聞くも才八郎は目  
 へ驚いた、三好清海入道と云へば、天下に聞へた亂暴者だから何をするか  
 わからぬ、オ「ヤア、サテは三好清海入道は御身か、マ、待つてくれ、亂暴  
 をしては困る、三「アツハ、之れ位は亂暴ではない、乃公が腰を据へて  
 亂暴を働く段にふるさ、此の城位は一人で脊負つて歸るぞ、今に濠の中へ

投げ込んでやるから覺悟しろ……、オア、待つてくれ、濠の中へ投げ込まれて堪るものではない、三三イ、ヤ待たんぞ、餘り貴様は威張り過ぎる、チト水を飲ませて、逆上を下げてやらう」三三清海入道何なく濠の淵に來た、ウシ人馬諸共、目よりも高く差し上げエイツザアーン、投げ込む途端、流石は澤村才八郎、馬上よりヒラリ地上へ飛び降りたから、馬ばかりが濠の中へ投り込まれた、此の体を見る三三澤村才八郎も怒つた、オウヌ、太い奴、覺悟ツ槍を抜いて無二無三に突つかゝる、清海入道も之には少々驚ろいた、三三ヤ、ツ、流石は名題の澤村才八郎だ、面白サア、來い……」鐵扇片手にパンくくさ打ち合つて居る、處へ向ふより登城して來たのか、一家老長岡監物の行列だ、此の体を見る三三、長ソレツ、澤村を助けよ、曲者取り押へよ」三三號令する家來の面々はバラバラく驅け出す、三三好清海入道大勢を引受けパンくさ打ち据へく片端より殴りつける、澤村の家來と長岡の家來が、一手にまつ

て打ちかゝる、大手門前は今や大騒ぎさあつが、早くも此の事が城内へ聞へるさ若武士は續々繰り出して來る、△「ヤアく曲者神妙にしる縛につけい」口々に叫び立て四方より打つてかゝる幾等三三好清海入道が強力でも敵はい衆寡素より敵すべからず遂に三三好清海入道は折り重ふつて押へつけられ、ヒシく縛られた、三三ウーム、残念斯んふ事から猿飛と連れ立つて來れば宜かつた……」今更ら悔んだが仕方がない、三三サア勝手にしろ、今に貴様等は驚くのだぞ、△「何を吐す、キリく立てツ……」到頭清海入道城内へ引立てられた、然るに宿に残つて居る猿飛、最う正午が來たのに、清海入道が歸らぬ、日の暮になつて音沙汰がぬいから、佐ハテナ、此奴は可笑しい、三三好奴大手門前へ暴れに行くさ云つて居たが、若し遣られたのではあるまいか今迄歸らぬ處を見るさ、大方失策つたものに相違ない、アツハ、三三好奴、今頃は乃公が來てくれれば宜いさ、目を剥いて居るだらう、困つた奴だ、

……」夜に入る猿飛佐助、アラリ宿を立ち出で、ノシノシ小倉城の大手門前に歩つて来た、人に尋ねて見ると云つた處で、門番より外には犬の子一匹も居ない、佐「待てよ、門番に尋ねるのも變だ、一つ例の術で城内へ忍び込んでやらう……」バツと姿を隠して、何なく城内へ忍び込んだ、佐「一体三好は何處に閉ぢ込められて居るのか知ら……」彼方此方を探し廻つて見ると、城の裏手の乾の隅に、一棟の牢屋がある、之には重罪のものを入れる處で、嚴重な鐵格子の構へにあつて居る、佐「ハ、ア、之れだ、オイ三好……何處だ……」  
 三好清海入道、猿飛佐助が助け出しに来るといふ事を知つて居るから一向心配ふんかしう平氣でグイグイ高駈き、氣樂さうに寢込んで居る。

○物を云ひく、駈を掻いて……

猿飛佐助等聲をかけても返事が無い、佐「オヤ、奴陽氣な男だから、駈

をかいて寢て居やアがる……」隅の牢の前に來ると、果して三好清海入道、雁字搦目に縛られながら平氣で高駈だ、四邊は眞暗だが、ヨク佐助の目には見へる、佐「ハ、ア、大分暴れたと見へて酷い目に縛られて居るはい……オイ三好、清海入道……、三「ウーム、タ、誰だ……、佐「乃公だ、く、三「ヤア、猿飛か、御苦勞……、佐「御苦勞も無いものだ、貴様失策つたが、三「イ、ヤ、一つも失策らんで、乃公はワザと縛られて此處へ投げ込まれて見たのだ、牢屋といふものは氣樂な處だよ、泥棒の這入る氣遣いはなしさ……、佐「オイ、負け惜みをいふふよ、サア出る、夫れ位いの繩千切つて仕舞へ、三「チアニ、千切る位はお茶の子さいさいだが、乃公は明日城主の前に引出されて、ワンと一つ氣張つて此の繩を千切つて見せる考へるのだ、折角此處迄狂言を仕組んで、此の儘逃げ出しては面白くない、佐「ウ成程其處もある、眞田の郎黨が牢破りをして逃げたと云はれては耻辱だ、ツヤア明日の朝、ワンと遣れ

明日の晩は乃公が助けに来てやる、三「ヨシ、間違へては困るぞ、一つ酒  
 を持つて来てくれ、佐「アツハ、氣樂ふ事をいふふ、酒を持つて来た處で  
 両手を縛られて居ては飲めまいではいか、三「貴様、兄弟分の好誼で、一つ  
 飲ませてくれ、乃公は二升ばかり飲んだら明日一日喰はないでも大丈夫だ……  
 猿飛佐助何處かへ出て行つたと思ふぞ、纏て二升樽を提げて来た三「イヨ……  
 忝ふい、何處にあつた、佐「牢番の部屋で遣つてる處を分捕つて来た、之れ  
 が天鉄羅だ……、三「ウム、天鉄羅、御馳走だ……オ、蛤か……好物、然し  
 斯う暗くつては困る、物を喰つても美味くまい、一つアノ燈火を持つて来てく  
 れ、佐「オイ、贅澤を云ふふ、サア飲め、厄介な奴だ……、猿飛佐助ヤツ  
 と叫ぶと、縛めの繩はバラ／＼解ける、三「イヨ……結構、然し元の通り  
 にして置いてくれまい事には困る、佐「夫れ位いは、云はふくつても分つて居  
 るよ、サア飲め、二人は差向いでグイ／＼遣る、瞬く間に飲んで喰つ

て仕舞つた、佐「乃公は最う歸るよ、又明日の晩に来やう……」再びヤツと叫  
 ぶと、元の通り雁字搦目に清海入道は縛られた、三「アツハ、貴様が居  
 てくれると、百万の大敵が攻めて来ても怯まもない明日の晩は一つ奥の手を  
 出してくれ……」猿飛佐助はバツと消へた、最ふ城外へ飛び出して居る、ス々  
 宿へ戻つて来る跡に清海入道二升樽を枕にして、氣持よく寢込んだグ  
 ウ／＼と高鼾だ、間もふく夜が明ける、牢番は目を覺す、見ると酒樽も肴も  
 ない、△「オヤツ此奴は可笑しい、今朝遣る積りで残して置いた奴が、紛失し  
 て仕舞つたさは……」囁きながら三人の牢番、牢屋を一々見廻つて見ると、三  
 好清海入道の居る牢内に酒樽が轉がつて居る、竹の皮が散ばつて居る、牢  
 オヤツ、此奴が盗んだのだよ……、△「夫にしても、不思議だ、アんなに縛ら  
 れて居て、何うして出られる譯か……ハテナ……ヤイ坊主起きろ、  
 三「ウーム未だ酔が覺めん、宜い氣持の處だ、起すよグウ／＼……、牢此

奴、物を云ひく、肝を搦いて居やアがる、サア起きろく、三アア、睡い  
 ……ヤア牢番お早ふ…、牢「ヤイ入道、何故酒樽を盗んだ…太い奴だ  
 ……三乃公は一向盗まふいが、誰か知らん夜前眞夜中頃酒樽と竹の皮包み  
 を持つて来てくれたのだ夢のやうな氣持で飲むと、夫滅り酔ッ拂つて来たのだ  
 よ大方乃公の親分の不動明王だらうと思つてゐるのだ…」口から出鱈目の事を  
 云つて居る、牢番は烟りに捲かれた氣持で、呆氣に取られて居る、時刻が来る  
 と牢内より引出された、城内に白洲を立て、澤村才八郎が取調べる事にあつ  
 た、此の時分は豊臣家と徳川家が睨み合つて居る時だから、細川家は敵國の間  
 者であらうと思つて居る、オ「コリヤ其方は眞田の郎黨三好清海入道と申し  
 たが當細川家の様子を探りに參つたのであらう何うじや包まず白状いたせ三  
 アツハ、オイ澤村、貴様は足輕から出世して、細川家では大の器量人と呼  
 ばれて居る男だが、夫れ位いの事が分られば、乃公が白状する迄もふい、素よ

り細川にはチト恨みがある乃公だ、其の恨みの理由は貴様等に話した處で分ら  
 ん、太守越中守の前に出て申し述べ、案内しる、オ「黙れッ、乃公は細川  
 家の二家老であるぞ、乃公に話せまいさいふ法はない、速に申せ、三「イヤ、  
 話せまい事はないが、太守の前に出て話すまいふのだ、貴様等に云つた處で何  
 の役にも立たない、大体貴様等細川家の大忠臣さか、何さか云つて居ても三千  
 石貰つて居るから大忠臣だから、云はば三千石だけの忠臣だ、乃公もぞは眞田  
 家に仕へて今は一合の祿も頂いて居る、夫れも身食を的にして働らいて  
 居る、貴様とは同じの論ではふい、控へる…」何方が取調へるのか一向分ら  
 ん、澤村才八郎も智恵のある人物だから、此の事を太守越中守に伺ふと、苦  
 しくない目通へ引けよとの命だから、三好清海入道は奥庭へ引立てられた、  
 △「下に居れ、三「黙れッ、乃公は罪人ではふい、下に居れさは無禮な奴、  
 控へる…」怒鳴りつけられ、若武士共は小さくゑる、折柄椽側へ現はれ

た細川越中守は禪の上に悠然と座り込み、ツロ／＼三好清海入道を見渡して居る、清海入道は突つ立つたまゝ、之れも越中守を睨みつけて居る、越中守の左右には長岡監物、澤村才八郎、其他勇士豪傑が居列んで居る。

○驚いて腰を抜かすな

越「ヤヨ、夫れある三好清海入道さやら、其方は幸村の命によつて、當家の模様を探りに参つたのであらう何うじや、眞直に申せ」之れを聞く清海入道はカラ／＼と冷笑い、三「アツハ、細川越中守殿は豊臣大將の中でも智謀勝れし方と承つて居たが聞くを見るさは天地の相違、案外の事をお尋ねにふるものか、五万石を破れ履の如く抛げ出して豊臣家の爲に盡さんさせられし我が君幸村公は豊臣家に對して左せる恩義はござらん、然るに御當

家は如何でござる、豊臣家には大恩ある家柄ではござらぬか、夫れに何ぞや、殿下御他界と共に以前の恩義は忘れたる如く狸爺に媚び阿ひ、丹後田邊の七万石より、豊前小倉十五万石に出世、頼りに狸爺の提灯を持つて居られるさは、イヤハヤ笑止千万、三好清海入道取るに足らぬ陪臣ではござるが、まだ腐つた精神は持ち申さん、俯仰天地に對して愧る處は微塵もござらん……さ口を極めて罵つた、細川越中守は勃然として顔色が變つた、越「ヤア無禮者、云はして置けば憎き一言、假令豊臣家に恩義あらうとも夫れは太閤殿下に對して、この家を潰して迄も盡さればならぬ理屈はないぞ、予は名よりも家を思ふが爲めだ、汝等の知つた事ではないわい、ヤア／＼者共、此奴嗚呼の曲者である、打つて／＼打ち据へよ……」聲に應じて、近習の若武士五六人はバラ／＼と清海入道を取り捲いた、清海入道驚ろく体もなく、三「アツハ、此奴は思ふ盡にはまつて來たはい、ヤイ木ッ葉、此の三好清海入道は



骨があるぞ、イテヤ腕前の程を見せてくれん、驚ろいて腰を抜かすな……」云ふより早くヤツと一聲ウソと氣張る。綾十文字の縛めの繩はアツ／＼と千切れ、て仕舞つた、之れを見る。太守越中守始め一同はアツと驚ろき騒ぎ立つた。三好清海入道は大手を擡げて仁王立ち、三「サア何うだ、南蕃鐵の豆鎖で縛つた處で、乃公が一つワンと力味だらアツ／＼千切れるのだ、イテヤ天下の豪傑三好清海入道の腕前を見せてくれん。一人二人は面倒だ東にあつて掛れ、／＼……」大言を拂つてエイヤツと腕を振り廻る。二三人の若武士は、バラ／＼と押し倒された、越中守、召捕れ／＼……」越中守、椽側に突つ立ち下知を傳へる、若武士は次第に殖へる、ヒシ／＼と清海入道を取り圍み四方より打つてかゝる、清海入道最初は拳骨を振り廻して居たが、人数がダン／＼殖へるから、獲物があつては面倒と傍へを見る。目方二百貫ばかりの石燈籠がある、之れ幸い走りより力に任せて引抱へ、ワンと差し上げヒユ

／＼振り廻はす、何んしろ二百貫以上の大石だから一つ當つたら、身体は微塵にあつて飛んで仕舞ふ、三「サア來い、清海入道の力の程を拜ませてくれる」相變らず大言を拂つて、無二無三に暴れ廻る、見る／＼十五六人叩き潰した手負い怪我人数知れずさいふ光景だから、越中守も大いに驚ろき、越中此奴、尋常では逆も召捕る事は出來ない、飛道具で射疎めて仕舞へツ……」聲に應じて二十人の足輕は、各自に鐵砲提げて飛び出した、清海入道に向つて覗いたつける、此には流石の清海入道も弱つた、一發スドンと來たら夫れきりだから、暴れる事も出來ない、三「ウーム、ヒ、卑怯な奴だ、仕方ない、サア縛れ／＼、斯ういふ時に猿飛が居るさ、大いに助かるのだが……ア、残念だ……」到頭繩をかけられた、處か雁字搦目に縛つて置いて、アツ／＼千切るのだから、今度は南蠻鐵の豆鎖を持ち出して、ヒシ／＼と縛り上げた、之では如何に強力無双の三好清海入道でも敵はない、再び牢内へ投り込まれた、

清海入道猿 飛佐助が夜に入つたら助け出しに来る事が分つて居るのだから平氣だ。三「ヤイ牢番……氣をつけて居れよ、乃公は今夜牢破りをして見せる貴様等の三人や五人で固めて居た處で逆も駄目だ、最少し人数を殖せ……牢番はビク／＼ものだ、此の事を上役に話さ、上「何うも、奴は大力無双だから、或は牢破りをやるかも知らん、油断はならぬと二十人ばかり警固の人数を殖して嚴重に警戒する、スルト三好清海入道之れを見て、三「アツハ、面白くあつた、ヤイ若武士今夜は睡すの番をしる、乃公が牢破りをするのだから油断をするさ大變だぞ……」大言を拂つて一同をビクつかせる間もなく夜に入つた十人の鐵砲足輕は鐵砲を持つて牢屋の前を取り圍んだ、素破と云つたら討ち取る積りらしい、三「アツハ、馬鹿な奴、何百人居た處で佐助の忍術にかゝつては敵ふものかい……」冷笑つて居る、夜も次第に更け渡る清海入道轉り横にあり、グ／＼と高駈で寝込んだ、△「オヤ／＼此奴何處

迄不敵の奴であらう雷のやうな駈をかい居やアがる」舌を捲いて警固の武士は驚ろいて居る、然るに其の夜も既に眞夜中過ぎなる警固の武士は俄に睡くあつた、△「ア、睡い／＼、此奴は堪らぬ……」コロリ／＼と遣り出す、猿飛佐助が最う乗り込んで、術を行つて居るのだ、佐「アツハ、何うやら睡りかけたヨシ／＼……」不敵の猿飛佐助は、ノシ／＼役人の側に近より、小口よりボン／＼脾腹を當て、廻る、牢番と共に二十五人の奴は何かく當て殺された、佐「サア、之れで宜い、オイ三好／＼、三「ムニヤ／＼、佐「オイ三好、目を覺せ乃公だ／＼、三「ヤア、猿飛来てくれたか今日實は斯様／＼だ佐「アツハ、鐵砲には貴様も敵はないわい、サア出る……」九字を切るさピン、錠が外れた、清海入道はノシ／＼牢内から出る、又もや佐助九字を切つて口中に何か唱へるさ、綾十文字に縛つてある豆鎖がストラ／＼と解けて仕舞つた、三「ヤア忝さい、何うも忍術に限る、シテ猿飛、此奴等は何う

する、佐「待て、此奴等は當て殺してあるから、暫らく梅はふい此の牢内に居る奴で無實の罪を被つてゐる奴があるだらう、三「ウム、有る、佐「其奴等が可哀想だから助け出してやるのだ、乃公が一々調べるから、之れへ一人摘み出せ、三「オ、合點だ、猿飛佐助は牢番部屋から床机を出して腰かける、清海入道は一つの牢へ近よつた、錠前をピチーン捻じ切つて戸を引開けた、清「ヤイ一人、之れへ出る、取調べた上放免してやる……」罪人は喜んだ、一人の大男がノソリ這い出した。

○細川の腰拔大名見参

三「ヤイ、控へる、此處へ平身叩頭しろ……」引据へる猿飛佐助、扇膝につき立て、役人氣取り、佐「ヤイ大男、其方は何んで来た、真直に申し立てい、太「ハイ、ワ、私は喧嘩をして来ました、佐「ナニ喧嘩勇ましい奴だ

何んか喧嘩だ、大「婦女の取り合いで、相手は三人、私は一人で大喧嘩をやりまして、私がツイ相手の男を二人出及で突き殺しました、佐「ハ、ア、二人突き殺したか、其奴は強い、シテ婦女さいふのは何ういふ關係だ、大「最初、私が色にして居りました處か、横合から清吉さいふ奴がチヨツカヒをして取りました私は婦女に未練はございませんが打つ放つて置かれませんか、手前に来てやるから横奪りした罰に金を五十兩出せと申します、清吉の兄弟が喧ましく云つたのでツイ大喧嘩にふり私も意氣地で……突き殺しました、佐「ウム、ナカ、貴様強い、度胸がある、三好此奴は放免ものだぞ、三「ウム乃公は氣に入つた、ヤイ大男、許してやる、歸れ、大「ハイ、大きに有難う存じます、大男は喜んで飛び出した、三「ヤイ、次の奴出る……、男「はい、有難う存じます、佐「コリヤ、未だ放免さも何さも分らん、禮をいふさ、貴様は何んだ、男「ハツ私も人殺して……、佐「ハア貴様でも人殺しをやつた

か、何ういふ人殺しだ、男「私は、嬬を人に取られました、三「アツハ、道理で鼻の下の長さうふ奴だ夫れから何つした、男「私も腹が立ちます、己れ重ねて置いて四ツさ様子を窺つて居りますよ、或る晩嬬が密夫を引張り込みました、佐「フム憎く奴だ、男「處で私が躍り込みまして、間男見付けた其處動くふさ、刀でヤツさ上から斬りつけてやりました……クシ、佐「コリヤ、斬り付けてやつた迄は勇ましい、男は夫れ位いの勇氣がなくては不可ん……不可んが何故泣いて居るクシ、いふふ見つさもふい、男「へい、之れが泣かずに居られませんが……巧く斬りつけましたのは、間男であつて可愛い嬬でございました、三「ナニ嬬 待て、男ではふいのか、上は男さ……、男「處が、嬬が上でございましたので……間男は逃して嬬を眞二つに……クシ、三「アツハ、此奴は笑はせる、オイ猿飛、此奴は放免の價値はふいぞ、佐「ア、此んふ奴は仕方がふい、ヤイ貴様は放免は出来ぬぞ、引込め

く、三「サアサキリ、逆戻り……」首筋擡んで元へ投げ込む、三「サア次の奴出るツ……」一々調べる、喧嘩や人殺しさいふさ、一も二もふく放免だが、女々しい罪を犯したり泥棒や強盗強姦は打ン毆つて牢内へ放り込む、到頭十五六人助けてやつた、城内の牢へ放り込まれて居る奴は、何れも重罪で仕置にふる奴ばかりふのだが、勇氣のある奴は悉く助け出した、猿「サア、之れで宜い、一番行きがけの駄賃に暴れてやらう……」さ二人は二十五人の奴を悉く縛り上げて牢内へ放り込み、ノシ、本丸へ歩いて来た、佐「待て、三好、暴れる先に一つ狂歌を書き残して置かう」側に倚つて猿飛佐助、矢立取り出し、玄關先の衝立へ差して

物ごさば越 中禪ふられども  
前へ 前から外れ目許バチ

佐「サア之れで宜い……」ノシ、奥へ踏み込み、越中守の寢處へ来て見る

忠興公の駢あひびきの聲高く白河しらかは船だ、三「オイ猿飛、此この金屏風きんべうへも書いて置け、佐「オ、宜しく……」又もや矢立やたて取り出して

豊臣の恩を忘れた細川の

水は濁にごつて徳川に入る

斯かふ書いて二人の名前を記し、佐「これで宜い、サア一番ばん暴れ散してやらう、……」次の間つぎに出るさ、宿直番さくぢばんが三人睡ねむさうに控ひかへて居る、清海入道せいかいにぶどうにんじゆつ忍術にんじゆつを知らぬから、突然いきなり三人の横面よこづらをボオ／＼と打ぶン殴なぐつた、宿直番はアツと驚おどろく、△「ヤ、ツ曲者くせものツ……」聲こゑを立てる奴を、三「エ、イ此この野郎……」摺つかんでヤツと投げつける、襖ふすまを突き破やぶつて、越あつちうのかみ中守しんじよの寢處しじよへコロ／＼／＼此この物音ものおとに越あつちうのかみ中守しんじよは目を覺さました、越「ヤア、曲者くせもの忍にんび込んだぞ、出合であへ……」聲聞こゑききつけて、彼方あなたこゝ此方わかざむらひより若武士わかざむらひが飛び出して來る猿飛佐助さるこびますけ、バツと姿すがたを隠かくしたと思ふさ、小口こぐちより首筋くびすじ擱つかんでドン／＼投げ出す、△「ヤ、ツ、此奴こいつは不

思議しぎだ、一人ひとりと思つたら二人ふたりだぞ、油斷ゆだんをするな……」口々くちくに呼よばり／＼三好清海入道みよせいかいによぶどうにんじよ一人に打うつてかゝる、清海入道せいかいによぶどうは拳骨けんこつ振り廻まわして、エイヤツと打ぶン殴なぐつて居たが、何んなにしる相手あいては多人たにんず數かずだから左様さうま巧くわくは行ゆかない、今いまや清海入道せいかいによぶどう大汗おほあせ流ながして無二無三むにむさんに暴あはれ廻まわりながら、三「オー猿飛、早はやく奥おくの手、佐「オイ合點がつてんだ……」何處どこからか聲こゑがしたと思ふさ、斯こは如何いかに城内じやうないの部屋へや／＼より、アツと火ひを吹ふき出した、此この体ていを見みるさ、若武士わかざむらひはアツと仰天げうてんした、○「ヤ、ツ、大變たいへん／＼、火事かじだ／＼……」三好清海入道みよせいかいによぶどうを取り押おへる處ところの騒さわぎでは無い、ワイ／＼叫まじびながら消防せうぼうに勤つとめる、シテやつたりと清海入道せいかいによぶどう、其そのの隙ひま見みかけて、無闇むやみ矢鱈やたらに暴あはれ散ちら庭前ていぜんに飛び出し、城内じやうない自慢じまんの築山つきやまを滅茶めつちや／＼にする泉水せんすいの中なかへ石燈籠いしどうろうも手洗鉢てうつぱちも庭石にわいしもドン／＼と投なげ込む、果はては庭木ていぎを片端かたつばしより引抜ひきぬいて放はなり込む、間毎まごご／＼は黒烟くろけむり／＼渦巻うずまき立ち火たは炎々えん／＼と燃もへ上ある、其そのの間まに猿飛佐助さるこびますけは大鼓おほつづ櫓らの上うへへ上あつて來たドン

く、非常太鼓を打ち鳴らす、夜陰を破つて城下一圓へ響き渡らさ、△「ソ、城内に變事が出来たぞ、非常太鼓が鳴るわ、行けい、……」と一家中のものはワイ／＼繰り出して来る、奥庭では三好清海入道、思ふ存分暴れ廻つて、ナイト廣庭に飛び出して見る、細川越中守は馬上にあつて、臣等一統を指揮して居る、三「ヤア、細川の腰拔大名見参、真田の郎黨三好清海入道見参、……」名乗りかけて躍りかゝる、猿飛佐助は大鼓櫓より下を見下し九字を切つて口中に呪文を唱へる、忽ち越中守の乗つた馬がヒーン、一聲嘶くと共に竝立ちさふつた、流石の越中守アツさばかり落馬する、隙さす躍りかゝつた清海入道、素早く駒に飛びのり、四角八面縦横無盡に暴れ出した、夥多の家来は一面越中守を警固しおがら清海入道に打ちかゝる、間毎／＼では火を消して廻るまいふ騒ぎだから、今や城内は鼎の沸くが如き光景となつて来た、十分城内を騒がした猿飛佐助は

アリ庭前に飛び降り、ヌツと姿を現はし、佐「ヤア、細川越中守、我は真田の郎黨猿飛佐助である、豊臣の恩義を忘れた腰拔大名を打ち懲すのだ、思ひ知れッ」云ふより早く、ヤツと叫ぶと、バツと姿を消へた、越中守首め一同はハツと驚ろく、越「ヤ、ツ、サテは真田の忍術使い猿飛佐助か入り込んだか、ソレツ鐵砲で打ち捕つて仕舞へッ……」鐵砲足輕五十人ばかり各自に鐵砲提げて飛び出して来た、折柄空中へ一羽の大鷲現はれたと思ふとサツと舞い下り三好清海入道を引摺み、宙天差して飛び上る、細川の家来はアレヨ／＼と驚ろき騒ぐ、鐵砲足輕は筒口揃へて撃たんとする、此の時遅し月は雲間に隠れ、見る／＼四邊は眞暗くあつたから、鐵砲足輕も見當が附かぬ、ワイ／＼騒いで居る折しも、ザア／＼と大粒の雨が降り出した。

○乃公は尻を引受けるんだ

く、非常太鼓を打ち鳴らす、夜陰を破つて城下一圓へ響き渡らさ、△「ソー  
 レ、城内に變事が出来したぞ、非常太鼓が鳴るわく、行けい〜」と  
 一家中のはワイ〜縋り出して来る、奥庭では三好清海入道、思ふ存分  
 暴れ廻つて、ナイト廣庭に飛び出して見る、細川越中守は馬上にあつて、  
 臣等一統を指揮して居る、三「ヤア〜、細川の腰拔大名見参〜、眞田  
 の郎黨三好清海入道見参〜」名乗りかけて躍りかゝる、猿飛佐助は  
 太鼓櫓より下を見下し九字を切つて口中に呪文を唱へる、忽ち越中守の  
 乗つた馬がヒーン、一聲嘶くと共に竿立ちさふつた、流石の越中守アツ  
 さばかり落馬する、隙さす躍りかゝつた清海入道、素早く駒に飛びのり、四  
 角八面縦横無礙に暴れ出した、夥多の家來は一面越中守を警固し、今  
 清海入道に打ちかゝる、間毎〜では火を消して廻る、いふ騒ぎだから、今  
 や城内は鼎の沸くが如き光景となつて来た、十分城内を騒がした猿飛佐助は

アリ庭前に飛び降り、ヌツと姿を現はし、佐「ヤア〜細川越中守、我は眞  
 田の郎黨猿飛佐助である、豊臣の恩義を忘れた腰拔大名を打ち懲すのだ、  
 思ひ知れツ」云ふより早く、ヤツと叫ぶ、ヌツと姿を消へた、越中守首  
 め一同はハツと驚ろく、越「ヤ、ツ、サテは眞田の忍術、使い猿飛佐助が入り  
 込んだか、ソレツ鐵砲で打ち捕つて仕舞へツ〜」鐵砲足輕五十人ばかり各  
 自に鐵砲提げて飛び出して来た、折柄空中へ一羽の大鷲現はれたと思ふと  
 サツと舞い下り三好清海入道を引摺み、宙天差して飛び上る、細川の家來は  
 アレヨ〜と驚ろき騒ぐ、鐵砲足輕は筒口揃へて撃たんとする、此の時遅  
 し月は雲間に隠れ、見る〜四邊は眞暗くあつたから、鐵砲足輕も見當り附  
 かない、ワイ〜騒いで居る折しも、ザア〜と大粒の雨が降り出した。

○乃公は尻を引受けるんだ

巧く忍術を以つて城内を騒がした猿飛佐助と三好清海入道の兩人は何ふく宿へ戻つて来た。佐「アツハ、三好何うだ最う暴れるのも堪能したであらう、三「ナアニ、朝から晩迄暴れて居ても一向驚るかあいのだが、マア之れ位いで許してやるさ、今頃城内は騒いで居るであらう……」二人は其の儘寝て仕舞つた此方城内では猿飛佐助が立ち去るさ共に雨も己んだ、月も出た、見ると一向雨の降つた模様も無い、△「オヤ、之りや何うじや、イヨ、可笑しい話した……」とワイ／＼騒ぐばかり、越中守始め一同間毎／＼を取調へて見るさ一向出火の模様もない、越「フ、ム、サテは忍術で奴等は城内を騒がしたものと見へる残念ツ……」切齒をしたが仕方ない、長岡監物、澤村才八郎の兩人は越中守を諫めて、長「斯るものをお相手に遊ばしては御損でございませう」と遂に此の事は沙汰なしといふ事にした、猿飛、三好の兩人は暴れ徳だ、翌日は一日逗留して細川の模様を窺つたが、少しも相手にする様子

がふいから、佐「オイ三好、細川は大分智恵があるわい、長岡監物、澤村才八郎といふ器量人が控へて居るから我々素浪人を相手にしては引合はさいと思つて、泣寝入りだよ、三「ウ、意苦地のふい奴だ、佐「イヤ、意苦地のふいのではない利巧なのだ、明日は我々も出立しやう……」と二人は其の一日飲み据へ、翌日小倉を立つて、ノシ／＼筑前福岡の城下へ入り込んだ、此處は五十二万石で黒田甲斐守の居城のある處、黒田家には八虎の勇士と云つて第一が後藤又兵衛基次、毛里太平、菅六之助、栗山備後、毛谷下總、衣笠因幡、黒田三蕃、山田隼人、此の八人の豪傑が居る、中にも後藤又兵衛基次は小限の城將として、三万石を領して居る、斯ういふ豪傑揃いだから、細川なぞと比べては、ナカ／＼大した勢いだ、三「オイ猿飛、此處はチト暴れ力があるぞ、五十二万石だから……然も豊臣七將の一人だよ、佐「ウ、然し後藤が居るから逆も暴れる事は難かしい、三「ナアニ、後藤が居ても構はふい、却つて



後藤が居るから面白いのだ、後藤が居ると云つて凹たれるやうでは我々の面目に關係する、何ふら之から小隈の城へ押しよせて、一番後藤から先に凹ましてやらう……」大分鼻息が荒い、佐「アツハ、貴様は乃公に尻を拭はせるのだから、跡は野さふれ山さふれだ、何んか暴れ方でも出来るよ、三「ダカラ面白いのだ乃公が存分暴れる、貴様が尻始末する、役者がチヤンと出来て居るのだから世話はない、佐「アツハ、ジャア一つ城下を騒がして、八虎の奴を誘き出してやらう」二人は相談した、翌日猿飛佐助はブラリ宿を出て、普れく城下を歩き廻つて十分地理を見定め、博多の町へも歩つて来て、大宰府にも参拜、千代の松原に出掛けて日蓮上人の舊蹟を吊ひ、仔細に取り調べて夕景に宿へ歸つて来た、佐「サア、城下を騒がす口の見付かつたが、三「ナンド、佐「實は斯うくだ、二「エツ、博多の大宰府の石の鳥居に豊臣甲斐守長政としてあるか、佐「ウム有る、之れは朝鮮征伐から歸つて、伏見

大地震の時、加藤清正と一處に黒田家も豊臣姓を許されたものだ、然るに今日に到つては豊臣の事は忘れ果て、徳川に媚び阿ふさは以ての外、幾等家大事ださ云つても、左様日和ばかりを見て居るやうでは駄目だダカラ一番アノ鳥居を引擔いで来て、城門の前に置くのだ、何んしろ大きい鳥居だから人間の所業とは思はふいだらう、三「アツハ、スルト鳥居を引擔いで持つて来る役は乃公だ、佐「知れた事をいへ貴様でふくつちヤア外にあるものかい乃公は尻を引受けるんだから、貴様がしる三「マア、遣るよ、夫れ位いは譯はない……」夜に入るに二人は宿を出た、ノシノシ大宰府へ歩つて来る、鳥居を見るに豊臣甲斐守長政としてある、三「フ、之れだ、目方は幾等あらう佐「マア二三百貫から四五百貫の處だ、三「ヨ、乃公が一番ウツと遣つて見る……」二人は石の鳥居に手をかけて、グクス揺り始める、斯んか亂暴な人間にかゝつては神様も堪らない……」二人は何なく鳥居を押し倒した、素より怪

力無双の兩人だから、何の造作もない、佐「サア擔げ〜……」清海入道人でウンと一本の柱を擔き上げやうとしたが、ナカ〜動かぬ、三「オーヤオヤ之れば五百貫位いじやアないぞ乃公一人で五百貫位いは引受けるのだが、餘程あるわい、佐「ジャア、乃公も手傳つてやらう……」二人して漸々擔いだ、夫れも其の筈だ、大きい丸い石の鳥居の柱だから、千貫以上二千貫からある、二人はウンと擔いだ、エツシ〜と歩き出す、眞夜中の事だから、誰知るものもふい、漸やく福岡城の大手門前に持つて来た、門の扉の前へ横に轉がした、猿「サア之れで宜い……」豊臣甲斐守長政と彫んである其の上へベツタリ紙を張りつけ矢立取り出して、

豊臣の恩義を受けた甲斐もなく

今は狸の尻を長政

眞田郎黨 猿飛佐助

三好清海入道

斯う書いてアいと宿へ戻つて来て素知らぬ顔、翌朝にふるさ大宰府でも騒ぎ出したが、城内も大騒ぎ、大宰府よりは直ちに、寄進主の黒田家へ注進する、城内は噂トリ〜、□「一体、誰が斯んな悪戯をしたのだらう、○「誰か云つてチャンと書いてある、眞田の忍術、使猿飛佐助と亂暴者の三好清海入道さが入り込んで来て居るのだよ、△「フム、其奴は大變だ、之りや何うあるだらう」大騒ぎさなつた、何んしろ大きい長い石の棒が門前に轉がつて居るのだから、取りのけない事には邪魔にふる、黒田家の重役は、直ちに人夫二三百人呼び集め、漸々石の柱を取りのけ、大宰府へ運んで来て、チャンと元の通り鳥居して置く、五十二万石の勢で遣るのだから造作はふい、一日の間に出来上る、スルト又二人は其の晩出掛けて揺り崩し、城門の外に擔いで来て轉がして置く、今度は又張紙を張へて、

徳川の水に濁され今は只

有る甲斐もなき黒田ありけり、

其の儘アイミ戻つて来る、翌朝又城内は騒ぐ、漸やく取りのける、チャンと鳥居にして置く、其の上重役共は、若武士に命じ、重今夜より五人づゝが大宰府へ出かけて睡すの番をいたせ……」若武士も屈強な奴ばかりが出掛ける目を皿のやうにして眼張つて居る處へ二人の曲者がヌツと出て来た、これぞ猿飛佐助と三好清海入道だ。

○目を剥いで居やアがる

猿飛佐助は九字を切つて口中に何か唱へるさ五人の若武士はコクリ〜と居睡りを始める、三好清海入道近よつて、一々脾腹を當てる、三「アツハ、造作ふいよ、佐「ウ、毀せ〜……」又もや毀して、五人の若武士諸共、

大手門前に持つて来た、佐「其奴等は、此處へ繫いで置け、鳥居の柱に縛りつけ又紙を張つて、

犬猫に劣つた黒田甲斐守

狸爺の提灯ぞ持つ、

佐「サア歸らう〜、之なら黒田甲斐守も怒るであらう」アイミ歸る、翌朝又もや城内は大騒ぎ、一度ならず二度三度迄遣られては幾等隠して居ても甲斐守長政の耳に入る、長政は之れを聞くに烈火の如く憤り、甲「己れ不埒千万、予を馬鹿にするにも程がある、ヤア〜者共、今夜打ち向い生捕つて參れ」其の夜は十人の若武士が乗り出した之れも駄目であつた、翌朝にふるさ引縛られて大手門前に轆かしてある、甲斐守イ〜立腹の体だ、甲「ヤア〜八虎の一入母里太平を呼べ……」母里太平は目通りへ出る、甲「ヤア太平、其方も存知居らう斯様〜である、之れ此のまゝに捨て置く時は、予の威勢に關はる、汝

今夜乗り込み、猿飛佐助、三好清海、入道といへる兩人を召捕つて引立てよ、舟「ハッ、畏まりました、夜に入ると八虎の一人母里太平がノシ〜五人の若武士を連れて大宰府へ出かける、太「コリヤ五人、油断をするか、相手は忍術使いだぞ、△「心得ました……」眼張つて居る、スルト猿飛佐助は早くも忍術で此の事を知つた、佐「オイ三好、今夜は八虎の一人母里太平が五人の若武士と共に掛けて居るよ、三「フム其奴は面白い、チト手懸へがあつて宜い、サア行かう〜……」ノシ〜出掛ける、鳥居の根元には床机を据へて母里太平と五人の若武士が控へて居る、佐「アツハ、六人の奴が目を刺いで居やアがる、三「オイ猿飛、巧く遣れ、佐「合點だ……」猿飛佐助九字を切るさ忽ちガラ〜〜と雷鳴轟き、ピカ〜と稲妻が閃き出したと思ふさ、大粒の雨がポトリ〜降り出した、母「ヤア、此奴は困つた天氣だ、暫らく社の中で雨宿りをしやう……」太平始め五人のものは濡れては堪らぬから、バラ〜社

殿へ駆け込み、雨宿りをする其の跡へノツリ現はれた兩人は又もや鳥居を押し倒し、エツシ〜と大手門前に擔いで来る左様な事さば知らぬから母里太平等は雨が止むと共に鳥居の傍へ来て見ると最う鳥居が毀してある、太「ヤツ、失策つた、サテは又忍術に一杯かけられたか……」四邊を見ると雨の降つた模様も無い、倒れて居る一本の鳥居の柱を見ると何か張紙がしてある、忍術にかけられたさは白波や尻を抜かれて涙ポロ〜、母里太平之れを見るさ、地團大踏んで口惜涙、ポロ〜涙を流して居る、太平は首尾よく失策つた、甲斐守はマス〜立腹、其の晩は栗山備後が出かけた栗「コリヤ〜、貴様等も抜るさ、母里さ乃公さばチト段が違ふ忍術さんにかゝる栗山備後ではない……」力味返つて警戒する、猿飛佐助はソツと歩つて来た、佐「オイ三好、最う鳥居は廢さうではぬか度々の餅は腮につくよ三